

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第214集

ほく ざん かま あと
北 山 窯 跡

かん すけ かま あと
勘 介 窯 跡

2020

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

やきもののみちとして知られる瀬戸市は、愛知県尾張地域の北東部に位置します。ここは岐阜県との県境に接するところでもあり、多治見市、土岐市などととも日本有数の中心的な窯業地として、今日まで長い歴史と豊かな伝統を伝えてきた地域であります。

この瀬戸市域北東部、落合町の丘陵部にかけて立地する北山窯跡と勘介窯跡について、急傾斜地崩壊対策工事の対象地域に含まれることになり、両遺跡の発掘調査が行われました。調査は、平成 27・29 年度に公益財団法人瀬戸市文化振興財団と公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターがそれぞれ実施し、北山窯跡では近代に操業した連房式登窯が 1 基、勘介窯跡では 16 世紀の戦国期の窯体 2 基と物原の広がりが確認されました。

調査された北山窯跡の連房式登窯は、明治 35 年に開窯されたものであり、本格的な遺跡の発掘調査事例として大変貴重な事例となりました。また勘介窯跡では操業期間の異なる 2 基の大窯が隣接する空間が捉えられ、戦国期の窯業生産の実態を伝える貴重な情報が得られました。

本書はこれらの成果をまとめたものであり、今後学術的な資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財の理解への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に対しての御理解と御協力を賜りました関係諸機関ならびに地元の皆様、発掘調査や資料整理に参加協力していただきました多くの方々に厚くお礼を申し上げます。

令和 2 年 3 月

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長 尾 崎 亨

例 言

1. 本書は愛知県瀬戸市落合町地内に所在する北山窯跡・勘介窯跡（県遺跡番号 030970・030408）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、急傾斜地崩壊対策工事（防災・安全）に伴う事前調査及び工事中の立会調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた公益財団法人瀬戸市文化財振興財団と公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
（公財）瀬戸市文化財振興財団埋蔵文化財センター
平成 27 年 8 月 5 日から 9 月 30 日まで 発掘調査 190 m²
平成 27 年 10 月 1 日から平成 28 年 3 月 10 日まで 立会調査
（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
平成 29 年 5 月 9 日から 5 月 26 日まで 発掘調査 100 m²
3. 現地調査の担当者は次の通りである。
（公財）瀬戸市文化財振興財団埋蔵文化財センター 岡本直久（所長） 松澤和人（主任）
（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
酒井俊彦（主任専門員） 武部真木（調査研究専門員） *（ ）内は刊行時役職
4. 発掘調査および立会調査は、(株)永井組、(株)イビソク、(株)波多野組の協力を得て実施した。
5. 調査にあたっては以下の関係機関の協力を得た。
愛知県尾張建設事務所 愛知県教育委員会文化財保護室
瀬戸市教育委員会 愛知県埋蔵文化財調査センター
6. 発掘調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々から指導・協力を賜った。（敬称略）
小澤一弘 太田攻 加藤真一 深川完雄 藤澤良祐 森山雄二郎 山下峰司
落合クリーニング店 株式会社永井組 曹洞宗龍洞山久雲寺
（発掘調査）
青山一甫 石黒義人 井上正昭 浦川百々子 加藤清美 加藤孝子 黒田泰史
杉井健二 杉本英子 中根千恵子 西田まゆみ 野村 忍 橋本 克 宮本勢津子
森川敏育 山下洋子 山中美代子
（整理作業）
遠藤満喜子 加藤孝子 野村 忍 山下洋子 山田達美 山中美代
阿部裕恵 鈴木好美 瀧 智美 時田典子 堀田祐美 前田弘子 山田有美子 山本孝枝
7. 本書は、（公財）瀬戸市文化財振興財団埋蔵文化財センターにより平成 28 年度に刊行された『北山・勘介窯跡発掘調査概要報告書』（編集・執筆 松澤）を元としている。その後に行われた発掘調査の成果に加え、出土遺物の整理作業、報告書刊行を（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが実施した。報告書編集は武部が担当した。執筆の分担については目次および本文中に示す通りである。
なお第 5 章は(株)パレオ・ラボ 藤根 久・米田恭子の分析結果等を掲載した。（敬称略）
8. 報告書に関わる整理作業において、陶磁器類の実測・トレース業務は(株)島田組に、遺物写真撮影については写真工房・遊 金子知久に依頼した。（敬称略）
9. 出土遺物の登録は、本書図版の掲載番号を元に整理を行った。
10. 本書に示す座標値は、国土交通省に定められた平面直角座標第 VII 系に準拠する。海拔表記は東京湾平均海面(T.P.)の数値である。表記は世界測地系を用いている。
11. 写真および図面などの調査記録については（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24 (0567-67-4163)
12. 出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24 (0567-67-4164)

目次

第1章 調査の概要	1
1 遺跡の位置と地形	(松澤) 1
2 歴史的環境	(松澤) 2
3 発掘調査に至る経緯・経過	7
(1) 公益財団法人 瀬戸市文化振興財団による調査	(松澤)
(2) 公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センターによる調査	(武部)
第2章 遺構	9
1 調査の方法	(松澤) 9
2 北山窯跡	(松澤・武部) 9
(1) 調査区の概要	
(2) 検出遺構	13
ア、窯体 イ、物原 ウ、平坦面 エ、通路状遺構 オ、補足 (窯体断面)	
3 勘介窯跡	(松澤) 17
(1) 調査区の概要	
(2) 検出遺構	
ア、1 試掘坑 イ、2 試掘坑 ウ、勘介1号窯遺構 (窯体・灰原) エ、勘介2号窯遺構 (窯体・灰原)	
第3章 遺物	(松澤・武部) 23
1 北山窯跡	23
(1) 陶器製品	
(2) 磁器製品	
(3) その他	
(4) 窯道具類	
2 勘介窯跡	44
(1) 勘介1号窯	44
(2) 勘介2号窯	48
第4章 自然科学分析	((株) バレオ・ラボ 藤根・米田) 87
北山窯跡の焼成室床材の材料分析	
第5章 総括	(松澤・武部) 94

掲載遺物一覧表

写真図版

挿 図 目 次

図 1	瀬戸市の位置と地形	1
図 2	瀬戸市域の地質	2
図 3	北山・勘介窯跡周辺の地形 (縮尺 1/20,000)	3
図 4	北山・勘介窯跡周辺の地形 (縮尺 1/20,000)	5
図 5	北山・勘介窯跡調査地点位置図 (縮尺 1/5,000)	8
図 6	北山・勘介窯跡の調査範囲 (縮尺 1/250)	10
図 7	北山・勘介窯跡 調査区配置図 (縮尺 1/250)	11
図 8	北山窯跡 窯体実測図 (1) (縮尺 1/40)	12
図 9	北山窯跡 窯体実測図 (2) (縮尺 1/40)	13
図 10	北山・勘介窯跡調査区位置図 (縮尺 1/100)	14
図 11	北山窯跡 調査範囲南壁土層断面図 (縮尺 1/80)	16
図 12	北山窯跡 窯体残存部土層断面図 (縮尺 1/80)	16
図 13	勘介窯跡 1 試掘坑実測図 (縮尺 1/40)	18
図 14	勘介窯跡 2 試掘坑実測図 (縮尺 1/40)	20
図 15	勘介 1 号窯被熱範囲実測図 (縮尺 1/20)	21
図 16	勘介 2 号窯窯体実測図 (縮尺 1/20)	22
図 17	北山窯跡出土遺物 1 (1/3)	24
図 18	北山窯跡出土遺物 2 (1/3)	26
図 19	北山窯跡出土遺物 3 (1/3)	28
図 20	北山窯跡出土遺物 4 (1/3)	29
図 21	北山窯跡出土遺物 5 (1/3)	30
図 22	北山窯跡出土遺物 6 (1/3)	31
図 23	北山窯跡出土遺物 7 (1/3)	32
図 24	北山窯跡出土遺物 8 (1/3)	33
図 25	北山窯跡出土遺物 9 (1/3)	34
図 26	北山窯跡出土遺物 10 (1/3)	35
図 27	北山窯跡出土遺物 11 (1/3, 1/6)	36
図 28	北山窯跡出土遺物 12 (1/3)	37
図 29	北山窯跡出土遺物 13 (1/3)	38
図 30	北山窯跡出土遺物 14 (1/3, 1/6)	39
図 31	北山窯跡出土遺物 15 (1/6)	40
図 32	北山窯跡出土遺物 16 (1/3)	41
図 33	北山窯跡出土遺物 17 (1/3)	42
図 34	勘介 1 号窯跡出土遺物 1 (1/3)	45
図 35	勘介 1 号窯跡出土遺物 2 (1/3)	47
図 36	勘介 1 号窯跡出土遺物 3 (1/3)	49
図 37	勘介 1 号窯跡出土遺物 4 (1/3)	51
図 38	勘介 1 号窯跡出土遺物 5 (1/3)	53
図 39	勘介 1 号窯跡出土遺物 6 (1/3)	55
図 40	勘介 1 号窯跡出土遺物 7 (1/3)	56

図 41	勘介 1 号窯跡出土遺物 8 (1/3)	57
図 42	勘介 1 号窯跡出土遺物 9 (1/3)	58
図 43	勘介 1 号窯跡出土遺物 10 (1/3)	59
図 44	勘介 1 号窯跡出土遺物 11 (1/3)	60
図 45	勘介 1 号窯跡出土遺物 12 (1/3)	61
図 46	勘介 1 号窯跡出土遺物 13 (1/3)	62
図 47	勘介 1 号窯跡出土遺物 14 (1/3)	63
図 48	勘介 1 号窯跡出土遺物 15 (1/3)	64
図 49	勘介 1 号窯跡出土遺物 16 (1/3)	65
図 50	勘介 1 号窯跡出土遺物 17 (1/3, 1/6)	66
図 51	勘介 2 号窯跡出土遺物 1 (1/3)	67
図 52	勘介 2 号窯跡出土遺物 2 (1/3)	68
図 53	勘介 2 号窯跡出土遺物 3 (1/3)	69
図 54	勘介 2 号窯跡出土遺物 4 (1/3)	70
図 55	勘介 2 号窯跡出土遺物 5 (1/3)	71
図 56	勘介 2 号窯跡出土遺物 6 (1/3)	72
図 57	勘介 2 号窯跡出土遺物 7 (1/3)	73
図 58	勘介 2 号窯跡出土遺物 8 (1/3)	74
図 59	勘介 2 号窯跡出土遺物 9 (1/3)	75
図 60	勘介 2 号窯跡出土遺物 10 (1/3)	76
図 61	勘介 2 号窯跡出土遺物 11 (1/3)	77
図 62	勘介 2 号窯跡出土遺物 12 (1/2, 1/3)	78
図 63	勘介 2 号窯跡出土遺物 13 (1/3)	79
図 64	勘介 2 号窯跡出土遺物 14 (1/3)	80
図 65	勘介 2 号窯跡出土遺物 15 (1/3)	81
図 66	勘介 2 号窯跡出土遺物 16 (1/3)	82
図 67	勘介 2 号窯跡出土遺物 17 (1/3)	83
図 68	勘介 2 号窯跡出土遺物 18 (1/3)	84
図 69	勘介 2 号窯跡出土遺物 19 (1/3)	85
図 70	勘介 1 号窯・2 号窯の匪鉢と窯印 (模式図)	86
図 71	分析試料と態度の偏光顕微鏡写真 (1)	92
図 72	分析試料と態度の偏光顕微鏡写真 (2)	93
図 73	北山窯跡構造図 (縮尺 1/100)	95
図 74	勘介窯跡構造図 (縮尺 1/250)	97

挿表 目次

表 1	北山・勘介窯跡周辺遺跡一覧表	4
表 2	北山窯跡出土遺物の文字・記号 (1)	42
表 3	北山窯跡出土遺物の文字・記号 (2)	43
表 4	北山窯跡床砂・製品の胎土分析試料	87
表 5	各試料の粘土中の微化石と砂粒組成の特徴記載	89
表 6	胎土中の粘土および砂粒の特徴	89
表 7	岩石片の起源と組み合わせ	90
表 8	北山窯跡出土遺物の重量	94
表 9	北山窯跡出土陶器の主要器種	96
表 10	北山窯跡出土磁器の主要器種	96
表 11	勘介窯跡出土遺物 (器種・重量)	98

写真図版 目次

図版 1	北山・勘介窯跡航空写真 (北山窯跡・勘介窯跡周辺風景 昭和 32 年撮影)	3. 遺跡付近全景 (北から 平成 29 年)
図版 2	北山窯跡・勘介窯跡より北東方向 上品野地区をのぞむ (平成 29 年) 北山窯跡・勘介窯跡全景 (平成 29 年)	4. 北山窯跡調査準備状況 (北西から 平成 29 年)
図版 3	北山窯跡・勘介窯跡 調査前風景 (平成 27 年) 北山窯跡 調査前風景 (平成 29 年)	図版 5 左 北山窯跡完掘状況 (南東から) 窯体完掘状況 (南から)
図版 4 左	1. 遺跡付近遠景 土岐市方面を望む (北方向) 2. 遺跡付近遠景 瀬戸市街方面を望む (南方向) 3. 調査前風景 (西から 平成 27 年) 4. 調査前風景 (南東から 平成 27 年)	図版 6 左 1. 窯体完掘状況 (南から) 2. 窯体西半完掘状況 (南から) 3. 窯体完掘状況 (北から) 4. 窯体煙道煙突検出状況 (西から)
図版 4 右	1. 遺跡付近遠景 (北西方向) 2. 遺跡付近遠景 (西方向)	図版 6 右 1. 窯体コド完掘状況 (東から) 2. 窯体東半完掘状況 (南から) 3. 窯体東半完掘状況 (北東から) 4. 窯体東半完掘状況 (南から)
		図版 7 左 1. 煙突・西煙道完掘状況 (北から) 2. 煙突裏込め石材検出状況 (西から) 3. 西煙道東壁完掘状況 (西から) 4. 西煙道西壁完掘状況 (東から)

図版 7 右

1. 煙突完掘状況 (南から)
2. 煙突完掘状況 (北から)
3. 煙突完掘状況 (西から)
4. 煙突完掘状況 (東から)

図版 8 左

1. 東煙道完掘状況 (西から)
2. 東煙道土管検出状況 (東から)
3. 東煙道暗渠天井部検出状況 (北から)
4. 窯体中軸断割り土層断面 (西から)

図版 8 右

1. 横軸 (窯体東脇) 断割り土層断面 (南から)
2. B7・C7 北壁土層断面 (南から)
3. A7・Z7 南壁土層断面 (北から)
4. 山ノ神現況 (南から)

図版 9 左

1. 調査区東半完掘状況 (東から 平成 27 年)
2. 調査範囲全景 (東から 平成 29 年)
3. 調査区東半完掘状況 (東から)
4. 南側断面 整地層・物原層 (南から)

図版 9 右

1. 通路状遺構完掘状況 (東から)
2. 平坦面完掘状況 (南西から)
3. 平坦面上石列検出状況 (北西から)
4. 南側断面 東部土層断面 (南から)

図版 10 右

1. 立会調査範囲断面 (北から)
2. 立会調査範囲断面 (北西から)
3. 立会調査作業風景 (東から)
4. 立会調査 体床面の一部 (東から)

図版 10 左

1. 窯体残存部断面 1 (北から)
2. 窯体残存部断面 2 (北から)
3. 窯体残存部断面 3 (北から)
4. 窯体残存部断面 4 (北から)

図版 11 左

- 1.1 試掘坑西壁土層断面 (南東から)
- 2.1 試掘坑南半西壁土層断面 (東から)
- 3.1 試掘坑南半東壁土層断面 (西から)
4. 勘介窯跡西半調査後全景
- 5.1 試掘坑完掘状況 (北から)

図版 11 右

- 1.2 試掘坑完掘状況 (南から)

2.2 試掘坑完掘状況 (北から)

- 3.2 試掘坑北壁土層断面 (南から)
- 4.2 試掘坑東壁土層断面 (西から)

図版 12 左

1. 勘介 1 号窯検出状況 (南東から)
2. 勘介 1 号窯検出状況 (北から)
3. 勘介 2 号二次窯完掘状況 (北から)
4. 勘介 2 号一次窯完掘状況 (北から)

図版 12 右

1. 勘介 2 号二次窯完掘状況 (北西から)
2. 勘介 2 号二次窯完掘状況 (東から)
3. 勘介 2 号二次窯天井支柱痕検出状況 (北西から)
4. 勘介 2 号一次窯焼台出土状況 (東から)

図版 13 左

1. 勘介 2 号窯横軸東半断割り土層断面 (北から)
2. 勘介 2 号窯横軸西半断割り土層断面 (北から)
3. 勘介 2 号一次窯完掘状況 (北西から)
4. 勘介 2 号一次窯天井支柱痕検出状況 (北西から)

図版 13 右

- 1.A7・Z7 区南壁土層断面 (北から)
- 2.ZT7 区西壁土層断面 (東から)
- 3.ZU6 区北壁土層断面 (南から)
- 4.ZV6 区北壁土層断面 (南から)

図版 14

- 北山窯の焼成品
(陶器・磁器 / 北山窯跡)
北山窯の窯道具類

図版 15

- 勘介第 1・2 号窯の焼成品
勘介第 1・2 号窯の窯道具類

図版 16

- 北山窯跡出土遺物 (陶器製品・磁器製品)

図版 17

- 北山窯跡出土遺物 (磁器製品)

図版 18

- 北山窯跡出土遺物 (磁器製品)

図版 19

- 北山窯跡出土遺物 (窯道具類)

図版 20

- 北山窯跡出土遺物

図版 21

北山窯跡出土遺物（銘・刻印など）

図版 22

北山窯跡・勘介窯跡出土遺物（1号窯）

図版 23

勘介窯跡出土遺物（1号窯）

図版 24

勘介窯跡出土遺物（1号窯）

図版 25

勘介窯跡出土遺物（2号窯）

図版 26

勘介窯跡出土遺物（2号窯）

図版 27

勘介窯跡出土遺物（2号窯）

図版 28

勘介窯跡出土遺物（2号窯）

図版 29

勘介窯跡出土遺物（2号窯）

図版 30

勘介窯跡出土遺物（窯道具類）

<<CD-ROM 収録データ>>

- ・ 報告書 PDF データ
- ・ 登録遺物一覧表
- ・ 『概要報告書』遺物観察表
- ・ 窯体残存部壁面写真（平成 29 年）

第1章 調査の概要

第1節 遺跡の位置と地形 (図1～3, 写真図版1)

瀬戸市は名古屋市の東部に位置し、東西12.8km、南北13.6km、周囲約50km、面積111.40km²である*1。旧尾張国の東北端に位置していて、周囲は岐阜県多治見市、土岐市および旧尾張国の春日井市、名古屋市、尾張旭市、長久手市、ならびに旧三河国の豊田市の7市と境を接する。

瀬戸市には、東部に位置する三国山(標高701m)、狼投山(標高629m)を頂点とする、北部山地および東部山地があり、西部にかけては標高100～200mの低丘陵地を形成している。これらの丘陵地は、水野川、瀬戸川、矢田川によって開析され、穴田丘陵、水野丘陵、菱野丘陵、幡山丘陵と呼称される。なお、各河川流域には、堆積物によって、盆地や沖積地が形成されている。

地質的には、瀬戸市域は、水野川以北では中・古生層、そのほかは花崗岩類を基盤とし、南西部の丘陵低地は堆積物に覆われる。新第三紀中新世の品野層が中央部から北部に分布し、さらに鮮新世の瀬戸層群に区分される瀬戸陶土層および矢田川累層が分布している。

品野層は、崖錐性の角礫岩層・凝灰質シルト岩層・砂岩層から成り、風化すると赤茶色になり、乾燥するとサイコロ状に割れて細くなる凝灰質シルト層と、巨石を含むホルンフェルスを主体とした角礫層から構成される*2。

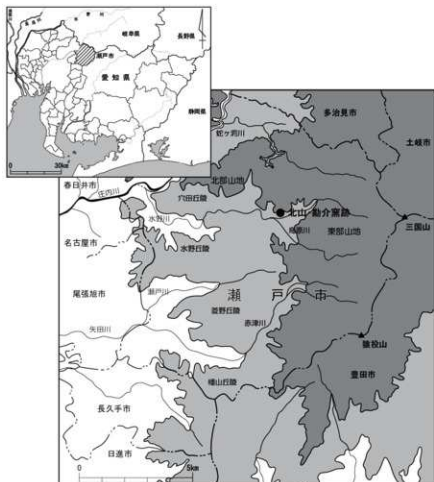
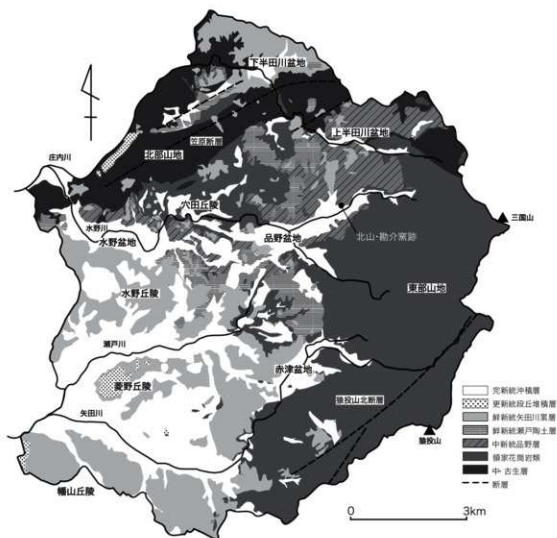


図1 瀬戸市の位置と地形

勘介窯跡と北山窯跡は、瀬戸市の中央部やや北寄りに位置し、水野川と鳥原川の合流点付近、品野盆地の北側にあたる水野川右岸丘陵に所在し、東側には支流の寺前川が南方へ流下する。この丘陵は品野層の分布域であり、崖錐性の角礫岩層・凝灰質シルト岩層・砂岩層により形成されている。

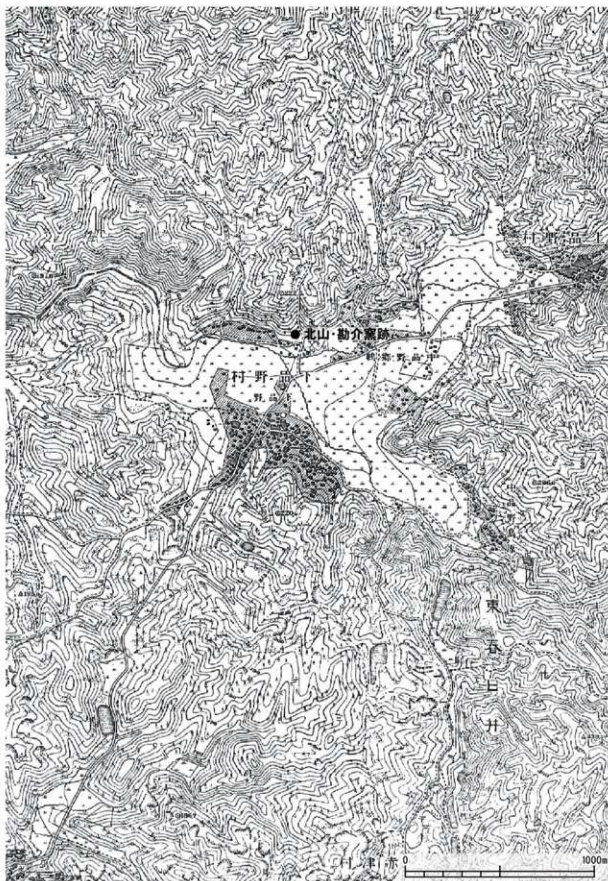
第2節 歴史的環境 (図4・5, 表1)

北山・勘介窯跡が位置する丘陵地は、水野川と支流の鳥原川との合流点付近、水野川右岸にあたる北部山地であり、南側には、水野川と鳥原川によって形成された品野盆地が広がる。盆地内の河川が形成した沖積地や周辺の丘陵地において、旧石器時代から近世にかけての遺跡が知られている^{※3}。水野川の上流左岸の上品野遺跡^{※4}において台形石器が出土し、旧石器時代後期まで遡ることが明らかになっている。また、縄文時代の遺跡は、水野川左岸には縄文時代の草創期の尖頭器のほか中期から晩期の土器が出土した品野西遺跡^{※5}、鳥原川右岸に縄文時代草・前期の岩屋堂遺跡^{※6}や中期の鳥原縄文遺跡^{※7}が知られ、水野川の上流域の上品野蟹川遺跡^{※8}では、縄文時代後期から弥生時代前期の土器が出土している。また、上品野遺



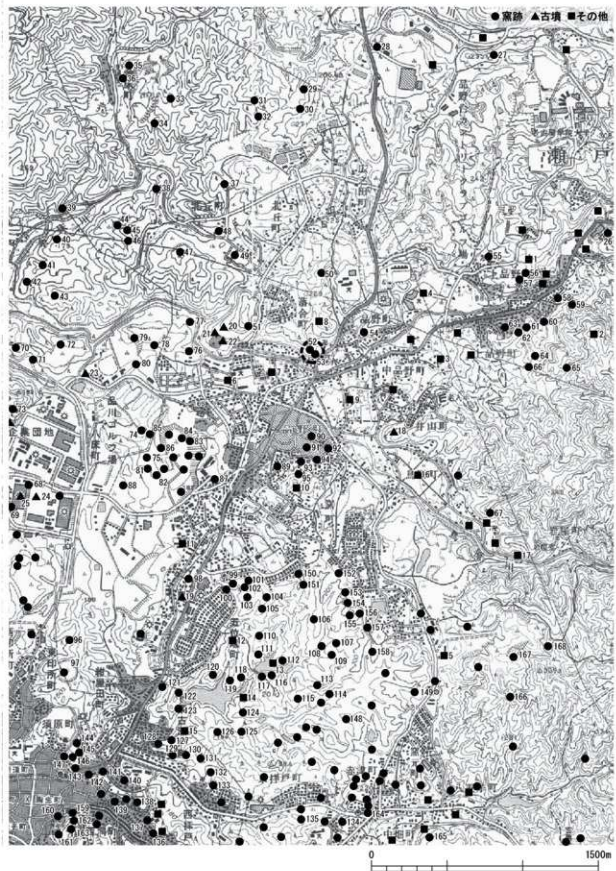
瀬戸市史編纂委員会1986『瀬戸市史』資料編二自然および
愛知県1997『愛知県活断層アトラス』を引用一部改編

図2 瀬戸市域の地質



「この地図は、明治24年測量 大日本帝國陸海軍部発行二分の一地形図「瀬戸」を使用したものである。」

図3 北山・勸介窯跡周辺の地形 (縮尺 1/20,000)



「この地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「高麗寺」「瀬戸」「多治見」「讃岐山」を使用したものである。」
 図4 北山・勘介窯跡周辺の地形（縮尺1/25,000）

跡⁹⁾でも、縄文時代晩期から弥生時代にかけて貯蔵穴群や古墳時代の集落跡が確認されたほか、古代から中世の集落跡が確認されており、品野地区の実態が明らかにされつつある。

また、水野川流域の丘陵地には、いずれも古墳時代後期に属すると考えられる円墳が分布する。市域には120余基の古墳があり、約半数がこの水野川流域に分布している。このうち、品野盆地では、3基の天白古墳群¹⁰⁾がわずかにまとまるものの、八床古墳¹¹⁾、井山古墳¹²⁾が確認されるにすぎず大変希薄である。

このほか、窯業生産遺跡である窯跡は盆地周辺の丘陵地から比較的多く確認されている。これらは、13世紀から14世紀にかけての山茶碗窯や古瀬戸前期から後期にかけての施軸陶器窯だけではなく、集落に近接する丘陵部の末端に窯跡が築かれるようになる古瀬戸後期終末の窯跡である、西窯2号窯跡¹³⁾や桑下窯跡¹⁴⁾が水野川上流部の右岸で確認されている。なお、続く大窯期の窯跡は西窯跡¹⁵⁾や桑下東窯跡¹⁶⁾のほか、水野川と鳥原川との合流点付近の水野川左岸の盆地に近接した丘陵地の末端部で落合窯跡¹⁷⁾、勘介窯跡¹⁸⁾が知られている。

また、盆地周辺の丘陵地には落合城・桑下城・品野城・山崎城などの中世城館¹⁹⁾が確認されており、このうち桑下城²⁰⁾で発掘調査が実施されており、大窯の桑下東窯跡との関連が指摘されている。

このほか、盆地南部に近接する丘陵地には窯町A～D窯跡²¹⁾が確認されており、連房式登窯のほか大窯の存在が推定されている。なお、磁器生産の窯跡²²⁾も確認されている。

註

- 1) 『瀬戸統計書』瀬戸市 2015
- 2) 『瀬戸市史 資料編二 自然』瀬戸市史編纂委員会 1986
- 3) 『瀬戸市詳細道路地図』瀬戸市教育委員会 1997
- 4) 『上品野遺跡』財団法人 愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター 2005
- 5) 『品野西遺跡』財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター 1997
- 6) 『岩屋堂遺跡』『瀬戸市詳細分布調査報告書』瀬戸市教育委員会 1997
- 7) 『鳥原縄文遺跡』『瀬戸市詳細分布調査報告書』瀬戸市教育委員会 1997
- 8) 『上品野蟹川遺跡』財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター 1998
- 9) 前掲註(4)
- 10) 『天白古墳』『瀬戸市詳細分布調査報告書』瀬戸市教育委員会 1997
- 11) 『八床古墳』『瀬戸市詳細分布調査報告書』瀬戸市教育委員会 1997
- 12) 『井山古墳』『瀬戸市詳細分布調査報告書』瀬戸市教育委員会 1997
- 13) 『西窯2号窯』『瀬戸市詳細分布調査報告書』瀬戸市教育委員会 1997
- 14) 『2. 桑下窯跡』『瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年—』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要X』瀬戸市教育委員会 1991
- 15) 『7. 西窯』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要V』瀬戸市教育委員会 1986
- 16) 『桑下東窯跡』(公財)愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター 2011
- 17) 『9. 落合窯』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要V』瀬戸市教育委員会 1986
- 18) 『10. 勘介窯』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要V』瀬戸市教育委員会 1986
- 19) 『中世城館跡調査報告Ⅰ(尾張地区)』愛知県教育委員会 1991
- 20) 『桑下城』(公財)愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター 2013
- 21) 『窯町A～D窯跡』『瀬戸市詳細分布調査報告書』瀬戸市教育委員会 1997
- 22) 稲荷神社窯跡など数カ所確認されている。『瀬戸市詳細分布調査報告書』瀬戸市教育委員会 1997

第3節 発掘調査に至る経緯・経過

(1) 公益財団法人 瀬戸市文化振興財団による調査

瀬戸市落合町地内の丘陵地において、「急傾斜地崩壊対策工事（防災・安全）」が愛知県尾張建設事務所により実施されることとなった。当該地には北山窯跡および勘介窯跡が所在していることから、この事業に伴う事前調査として北山窯跡と勘介窯跡の発掘調査が実施された。

現地調査は、公益財団法人瀬戸市文化振興財団が愛知県尾張建設事務所より受託した「急傾斜地崩壊対策工事（防災・安全）」の内埋蔵文化財調査業務委託により実施することとなった。

発掘調査は平成27年8月5日から9月30日まで実施し、工事着手とともに、引き続き平成28年3月11日までの期間で立会調査を実施した。

北山・勘介窯跡発掘調査は、平成27年7月より現地作業のための事前準備を開始し、現地調査は8月5日から開始した。（図6、写真図版3.5）

発掘調査では、北山窯跡の位置する北東丘陵斜面を中心に、工事前仮設道路建設予定地に調査区を設定した。調査区は当初地上に窯体の一部が露出する箇所を中心に設定した。ただし、調査開始時に伐採木が調査地の一部（東端）を被っており、現況地形を確認することが困難な部分も認められた。このため、東端部では伐採して除去したのち設定した。

調査はまず調査区南側の窯体の断面が露出をする崖面を精査したところ崖面に拡がる窯体の一部を検出した。この壁面を横軸として、5m×5mのグリッドを6カ所設定した。表土を除去したところ、窯体部分は北側へも遺構が続くことから、推定される窯体の中軸ラインを設定するとともに横軸を設定し窯体の調査を進めた。その後、窯体の末端部と推定した地点から煙突と思われる基礎も確認でき、本来の中軸とは異なることから、あらためて中軸を設定した。また、窯体部分の東側では通路状遺構や石垣および窯脇の平坦面を検出し、西側でも平坦面の一部を確認している。

また、勘介窯跡では2カ所において試掘坑を設定し遺構の確認調査を実施した。

これらの掘削作業はすべて人力で行い、表土層の除去から調査を進め、遺構検出ののち、平面図および断面図を作成し、写真撮影を実施した。その後、現況地形測量を実施するとともに9月30日発掘調査を終了した。10月1日工事が開始されたことから、引き続き立会い調査を進め、勘介窯跡では2基の窯体と灰原、北山窯跡の平坦面と物原を確認し、3月10日すべての現地作業を終了した。調査面積は約190㎡である。

現地調査終了後、概要報告書の作成作業を実施し、執筆および編集の作業を経て、平成28年3月18日概要報告書を刊行した。

(2) 公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターによる調査

同工事計画の変更に伴い、北山窯跡の隣接地に新たに調査の必要性が生じた。そのため、既に調査が終了した範囲の北側に隣接する斜面地形について、平成29年5月9日から26日にかけて100㎡の面積の調査を行った。追加された調査地点は物原（トチ層）と平坦面・通路に続く部分であり、物原層の掘削と排土処理等を機械掘削で行い、平坦面と通路部分の調査を中心に人力掘削を進めた。国土産権（世界測地系）を用いて記録（測量）を行い、立会調査の扱いとなった南側（民家側）に残る窯体の一部については、北側壁面の断面観察と記録を行った。調査による出土資料は磁器製品などを中心にコンテナ10箱程度と築窯時に形成された整地層よりコンテナ2箱の大窯製品を採集した。

参考文献

『瀬戸市詳細道路地図』瀬戸市教育委員会 1997

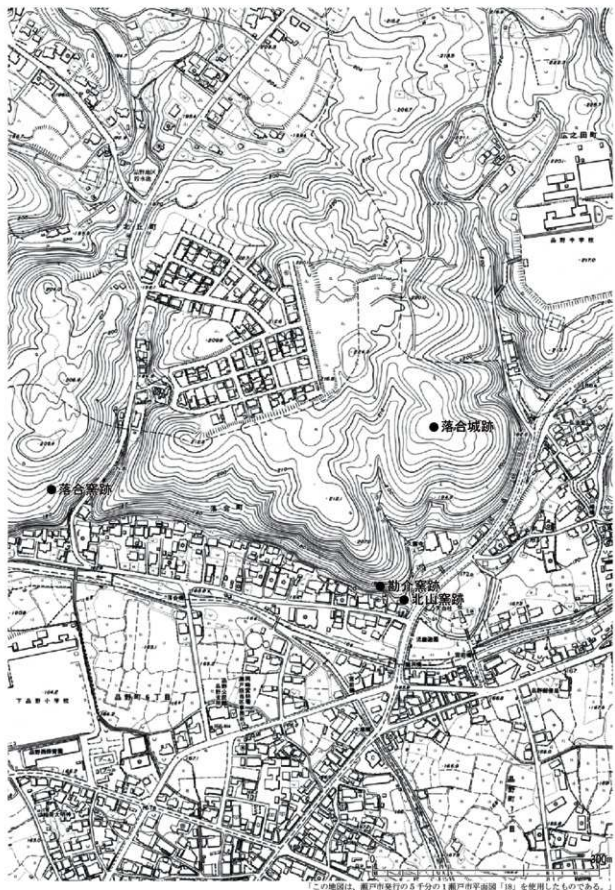


図5 北山・勘介窯跡調査地点位置図(縮尺1/5,000)

第2章 遺構

第1節 調査の方法 (図6,7)

平成27年8月5日から平成28年3月10日にかけて現地調査を実施した。調査地点は水野川の右岸の丘陵北斜面に位置しており、北山窯跡の窯体が所在する丘陵斜面とその西側にあたる勘介窯跡が位置する丘陵斜面である。

調査区は北山窯跡が露出する崖面地点を中心として、5m×5mのグリッドを設定している。グリッドは北山窯跡の窯体が露出する崖面に直交する方向を主軸とした5m×5mで設定した。グリッドラインは、斜面上方の北西方向から南東東方向へ6～8の数字、北西方向から南東方向へA～Eのアルファベットをあて、各グリッドの名称は、北端隅のポイント名称をあてた(図6)。調査面積は約190㎡である。グリッドの設定は5m×5mの範囲を標準としたが、工事用の作業道路部分として掘削される範囲としていることから、変形部分が多い。調査区の掘削は何れも表土からすべて人力で行い、上層の遺構面を確認した面で掘削をとどめている。すべての調査区で平面および土層断面の測量と写真撮影を実施した。その後、断割り調査を実施し、下層の遺構を確認するとともに、窯体の下層に堆積した物原の掘削を進め、平面および土層断面の測量と写真撮影を実施した。また、発掘調査後半において調査区の約190㎡について地形測量を実施して9月30日発掘調査を終了した。

なお、勘介窯跡では2カ所において試掘坑を設定し遺構の確認を実施している。

発掘調査を終了後引き続き10月1日から実施した立会調査では、勘介窯跡の2基の窯体と灰原を確認し、平成28年3月10日に終了した。

第2節 北山窯跡

(1) 調査区の概要・検出遺構 (図8～10, 写真図版2～10)

今回調査を行った調査区の基本層序は、窯体や平坦面造成に伴う大規模な盛土や改変がなされていて、地山が掘削された地点や盛土が認められる地点もある。概ね上層に腐植土(表土)があり、その下層では盛土を確認した。表土層は地点により若干色調が変化するものの、一般的に灰褐色を呈し粒位は細かく、小礫を含む。地山は砂礫層で、角礫が多く混在する。

調査区で確認できた遺構は、中央付近の窯体および西側と東側に分かれて分布する。調査区の中央では窯体をはじめ、東側隣接地点から窯体に付属する窯脇平坦面(写真図版5上)を検出した。西半では、窯体脇には石垣があり、この石垣の西側には平坦面1が確認でき、窯体に並行する石垣だけでなくこれに直交する石垣(石列)も確認した。また、東半では、調査区東端から南北にのびる通路状遺構1の一部とともに並行する溝(写真図版9左1)が確認されており、溝にかかる自然石の橋と北側へ続く通路状遺構2(写真図版9左1)のほか窯脇と通路状遺構2の脇、溝脇にそれぞれ石垣を検出した。なお、窯体の北側にあたる調査区北半では窯体奥側に堆積する物原および平坦面2の一部を確認している。

なお、立会調査において、北山窯の西側にかけて広がる平坦面1の西側部分の一部が検出でき、この平坦面の下に堆積する物原の下層にも新たに平坦面(写真図版8右3)が確認できた。

このほか、本窯の近接地である窯体北側の丘陵斜面中腹に山ノ神が祭られている(写真図版8右4)。

以下、各遺構について窯体、物原、平坦面、通路状遺構に分けて概要を解説する。

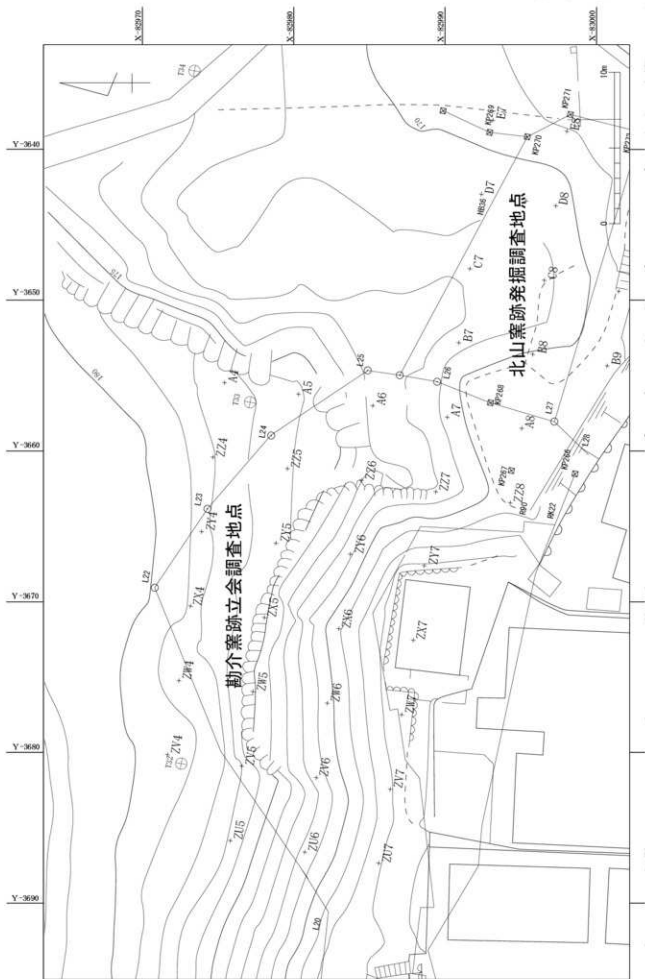


図 6 北山・勒介窯跡 調査範囲位置図 (縮尺 1/250)

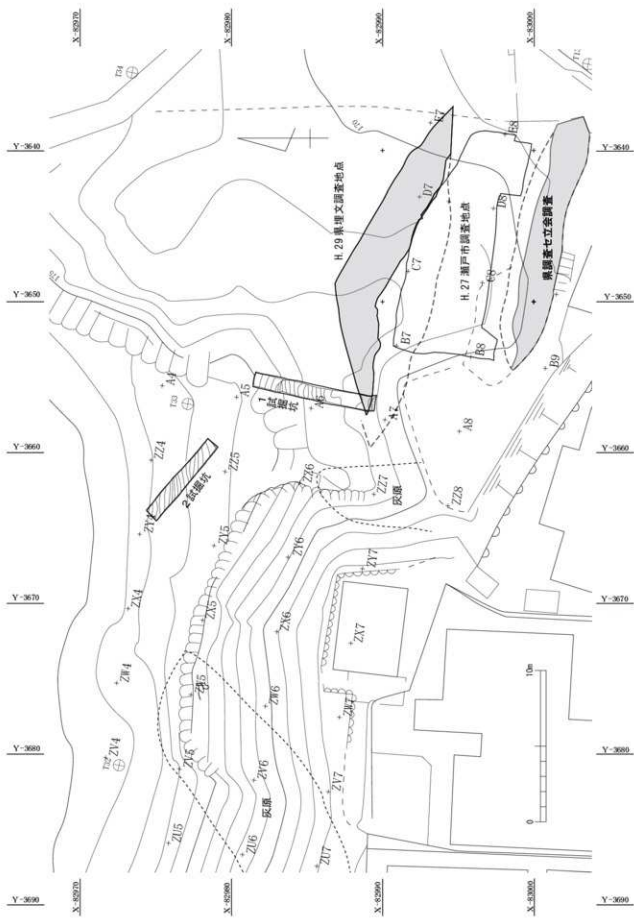


図7 北山・新介黨跡 調査区配置図 (縮尺 1/250)



図8 北山窯跡 窯体実測図 (1) (縮尺 1/40)

ア. 窯体 (図8～10、写真図版5～8)

調査区中央付近で確認できた窯体は連房式登窯の上方が残存しており、1房(室)の焼成室と、コクド、西煙道、東煙道、煙突がある(写真図版5下)。検出した窯体は残存長さ5.2m、最大幅4.3mが測られた。主軸はN 18.5° Wである。断割り調査により、煙道や煙突の下層には物原の堆積があり、焼成室の下層には堆積が認められないことから、煙道および煙突は窯体の改築に伴って新たに追加されたもので、窯体は二次に変遷することが確認できた。窯体は下端から焼成室、コクド、煙道があり上端に煙突がある。以下、部位ごとに解説する。

焼成室(写真図版5,6)は、床面が標高170.1mに構築されており、1房(室)のみ確認した。焼成室の大半がすでに削平されており、右奥側が部分的に残存するにすぎない。最大で幅2.6m、奥行き0.9mまで残存する。床面は砂床で上段床面との比高差は0.8mである。奥壁側は縦狭間構造で狭間が7ヵ所残存する。狭間柱は角クレあるいは棚板で構成されており、最大で0.6mの高さまで残存する。右壁は角クレで構築される。

コクド(写真図版6)は幅3.9m、奥行き1.2m。床面は砂床で左壁は残存しないが奥壁と右壁は角クレで構築される。中央に長辺方向の角クレ列があり中央付近では列の一部が空白となっている。奥壁の左右(東西)に煙道が接続する。右壁の手前側に出入口がある。

西煙道(写真図版6)は最大幅0.5m、奥行き1.7mで、高さ0.7mまで残存する。コクド奥壁の左(西)端にあり、窯体の中軸方向にほぼ直線的に伸びて端部が煙突に接続する。床面は砂床で、天井部は崩落して残存しないが埋土中に角クレが堆積することから、側壁とともに角クレで構築されたものであろう。端部はコクド側と煙突側ともに角クレがアーチ状に積まれている(写真図版7右2)。

東煙道(写真図版8)は中央付近で幅0.35m、高さ0.4m。コクド奥壁の右(東)端にあり、一旦中軸方向に伸び左(西)側へ屈曲して煙突に接続する。コクドから接続し中央付近は天井部と側壁は角クレで

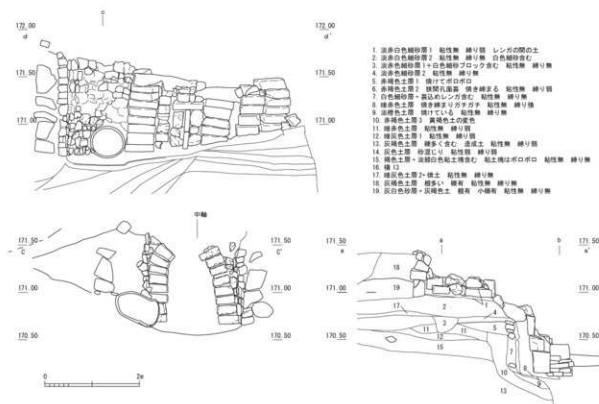


図9 北山窯跡 窯体実測図(2) (縮尺1/40)

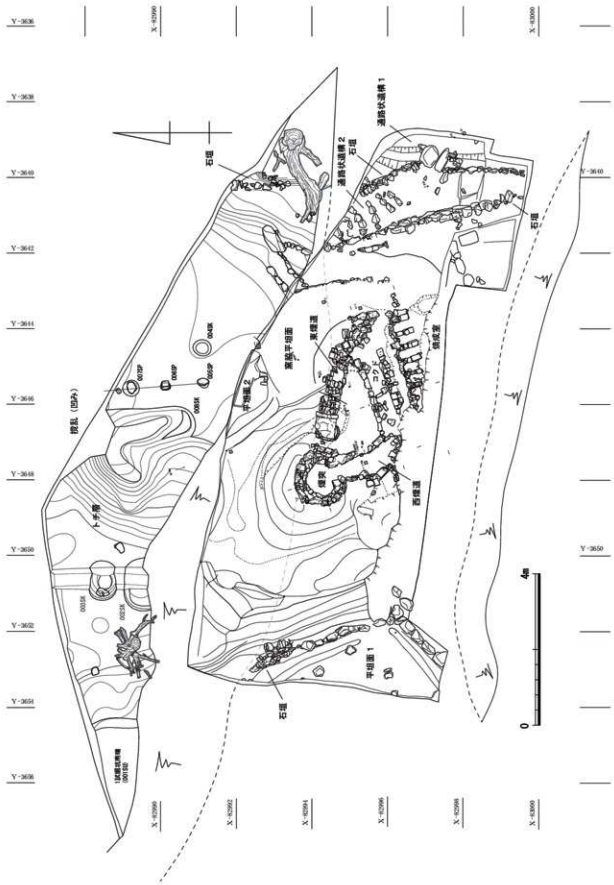


圖 10 北山・勒分窯跡調查區位置圖 (縮尺 1/100)

構築されており、煙突の手前が2連の土管となり、煙突脇に土管が挿入される構造（写真図版7右3）である。

煙突（写真図版6,7）床面は砂床で、径0.75m、高さ1.1mまで残存する。残存部は地下構造で、壁面は角クレで構築されており、その外側には自然石の石積みがある。周辺から筒状の陶器片が出土していることから、煙突の上方は筒状の陶器枠を重ねた構造と推定される。

イ、物原（写真図版8）

二次窯段階の物原は窠体の上方B7グリッド付近で確認できた。分布範囲は幅7m、奥行きは不明であるが北側調査区の外まで拡がることは明らかである。物原はほとんどすべてがトチで構成され、主として板トチで若干磁器片を含む。最大で1.2m堆積する（写真図版8右2）。

一次窯段階の物原は窠体の上方（北側）とその左右（東西）に分布する。7ラインの土層断面では幅11mにわたり分布し、北側は調査区の外へ続く。最大で0.8m堆積するが、その下層は地山ではなく盛土で、西側の一部で地山を確認している。（松澤）

平成29年度調査地点の南側壁面、上記の物原層を含む土層断面（7ライン付近）を図11に示す。注記番号no.1～6が大量の板トチ、磁器製品片を含む物原層（写真図版9左4）であり、さらに北側調査区外に向かって傾斜しつつ連続する。物原層の下層の整地層no.11には細片となった大窯期播鉢、匣鉢片が含まれる。さらに東側の平坦面下の整地層には近代の製品（陶器、播鉢）や匣鉢片、焼土が含まれる。（武部）

ウ、平坦面（図10）

平坦面は窠体西側の石垣の西に平坦面1、窠体の北側にあたるC7グリッドから平坦面2を確認している。平坦面1は南北方向で4.0m、東西方向で2.5mまで残存する。

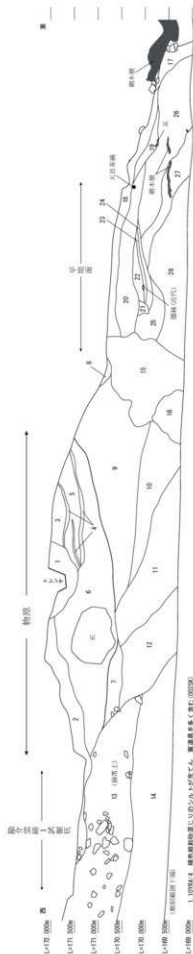
平坦面1は東側と南側に石垣があり、石垣下端に幅0.2m程度の浅い溝が石垣面に並行する（図10）。この平坦面の西側は、現況地形でも明らかに平坦な地形でありさらに西側へ続くものと推定される。平坦面2は南北方向で1.6m、東西方向で1.4mまで残存する。南側の斜面の下には並べられた角クレが残存する（図10）。この平坦面の北側は、現況地形が平坦な地形で、北側へ拡がるものと推定された。（松澤）

平成29年度の調査では、上記の平坦面2北側に接続する部分が4.0×3.0mの範囲で確認された。西側は物原堆積層に覆われ、その境目は大きく凹み物原堆積自体は調査区外北側にかけて傾斜して深くなる。平坦面2の全体の形状は不明ながら、少なくとも東西5.6m、南北4.4m以上の空間が広がるかと推定される。平坦面上では1.2m前後の間隔で並ぶ石列と浅い小土坑が検出された。石は平らな面を上にして検出されており、小規模な建物あるいは区画施設の痕跡の可能性が考えられる。（武部）

エ、通路状遺構（図10、写真図版5,9）

通路状遺構は現在の参道の下（通路状遺構1）とここから西側へ分岐するもの（通路状遺構2）がある。通路状遺構1は参道の下層0.7mで確認した。最大幅0.4m、延長2.4mで南北側と東側は調査区の外側へと続いている。北から南へ傾斜しており表面は平坦で硬く締まる。西端に素掘りの溝がある。溝の断面形はU字形、幅0.6m、延長2.6m、深さ0.15mの規模で、北から南へ傾斜する。この西側に石垣がある（写真図版9左1）。溝は南北側の調査区の外側へと続く。

通路状遺構2は通路状遺構1から西北側へ分岐する構造で、通路状遺構1脇の溝には自然石である花崗岩の板石が2枚架けられ石橋となる。最大幅1.2m、延長4.1mで北側は調査区の外側へと続いている。通路は傾斜しており、横方向に石材が並べられ階段状となる。この通路状遺構の側方は左右とも自然石の石垣である（写真図版9左1）。（松澤）



- 14 灰土、灰化土層を多く含む
 19 10903.1 黒褐色のシルト 灰土も、黒褐色を多く含む
 18 (埋入の層) 2.535.2 黒褐色のシルト、粘土、白色の塊状の層位に込る
 20 7.5396.4 褐色粘土が充ちる、層、黒化土層を多く含む、灰褐色層を含む
 21 白色層を多く含む 7.5397.4 にはい塊状シルト質砂
 22 10904.4 黒褐色のシルト、灰土、黒褐色を多く含む
 23 2.5395.6 褐色のシルト、灰土、黒褐色を多く含む
 24 5396.4 にはい塊状シルト、小礫が多く混入する
 25 7.5395.4 褐色粘土、黒化土層、黒褐色を多く含む
 26 10905.6 黒褐色のシルト、砂、黒化土層、黒褐色を多く含む、しまり強い

図 11 北山窯跡 調査範囲南壁土層断面図 (縮尺 1/80)



- 11 10903.1 黒褐色のシルト、塊状のシルト、塊状のシルト、しまり強い
 12 10902.3 黒褐色のシルト、塊状のシルト、白色の塊、粘土、灰化土層を多く含む
 14 10903.3 黒褐色のシルト
 15 灰土、少しを多く含む、しまり強い
 16 2.5393.1 白色の塊状の層位が混入する、少しを多く含む
 17 5396.4 にはい塊状シルト、黒褐色を多く含む
 18 2.5393.1 白色の塊状の層位が混入する、7.5396.4 にはい塊状の層位が混入する
 19 10904.4 黒褐色のシルト、灰土、黒褐色を多く含む
 20 7.5395.4 褐色のシルト、灰土、黒褐色を多く含む
 21 10904.4 にはい塊状シルト、小礫が多く混入する
 22 10904.4 にはい塊状シルト、小礫が多く混入する
 23 10904.4 にはい塊状シルト、小礫が多く混入する
 24 10904.4 にはい塊状シルト、小礫が多く混入する
 25 10904.4 にはい塊状シルト、小礫が多く混入する
 26 10904.4 にはい塊状シルト、小礫が多く混入する
 27 10904.4 にはい塊状シルト、小礫が多く混入する
 28 10904.4 にはい塊状シルト、小礫が多く混入する
 29 10904.4 にはい塊状シルト、小礫が多く混入する
 30 10904.4 にはい塊状シルト、小礫が多く混入する
 31 10904.4 にはい塊状シルト、小礫が多く混入する
 32 10904.4 にはい塊状シルト、小礫が多く混入する
 33 10904.4 にはい塊状シルト、小礫が多く混入する
 34 10904.4 にはい塊状シルト、小礫が多く混入する
 35 10904.4 にはい塊状シルト、小礫が多く混入する
 36 10904.4 にはい塊状シルト、小礫が多く混入する
 37 10904.4 にはい塊状シルト、小礫が多く混入する
 38 10904.4 にはい塊状シルト、小礫が多く混入する
 39 10904.4 にはい塊状シルト、小礫が多く混入する
 40 10904.4 にはい塊状シルト、小礫が多く混入する

図 12 北山窯跡 窯体残存部土層断面図 (縮尺 1/80)

平成 29 年度調査では、参道の下となる通路状遺構 1 の西側の石垣の一部と平坦面 2 と通路状遺構 2 を繋ぐ部分が検出された。通路状遺構 1 の石垣は北端付近で高さ 68 cm である。土手表面に石材が充てられている状態であり、石材の隙間には匣鉢片が含まれているのがみえる。通路状遺構 2 の続きは西北側からさらに西側へ振り、窯脇平坦面から平坦面 2 に繋がる。3 段の階段の両脇の境界は不明瞭であり、横方向に並べられている石材のみが確認された。(武部)

オ. 補足 (窯体断面 図 12, 写真図版 10)

平成 27 年度窯体調査地点の南側部分にあたる。民家に沿って残る長さ約 17m の土手状部分について、北向きの壁面の記録を行った。連房式登窯の焼成室とその間の狭間部分の確認できる。no. 6, 7 層と no. 19 ~ 21 層がそれぞれ焼成室床面に、no. 11, 12 付近のクレが狭間部分に相当する。なお、砂床を構成する白色砂層からサンプルを採取し、素焼(磁器製品未製品)片と比較して分析を行った。(第 4 章)(武部)

第 3 節 勘介窯跡

(1) 調査区の概要 (図 6, 7, 13 ~ 16, 写真図版 11 ~ 13)

勘介窯跡が存在する丘陵では、南斜面の末端部が現在宅地化されていて、丘陵裾部分はすでに削平され、斜面の大半は高さ 30 m 余の急峻な崖面となっており、崖下には住宅が密着する状況であった。なお、斜面上方と東側の斜面では崖面付近で試掘坑を設定して遺構の有無と堆積状況を確認しており、2 か所の試掘坑では遺構は確認されなかった(写真図版 11)。

今回調査を行った調査区の基本層序は、調査地点が丘陵であるため、地山は黄褐色の砂礫層の堆積が認められ、崖面にはさらに下層の地山である礫層や砂岩層が認められる部分もある。概ね上層に腐植土(表土)があり、その下層では灰褐色土層があり、その下層は直接黄褐色の砂礫層の地山を確認した。灰褐色土層は地点により若干色調が変化するものの、一般的に灰褐色を呈する粘質土で粒位は細かく、小礫を多く含む。地山は砂礫層で、角礫が多く混在する。

試掘坑では遺構は確認できなかったものの、立会調査では、崖面上端部にわずかに残る斜面に物原の一部が露出する状況が確認でき、調査区の中央付近から 2 号窯の窯体とその西側に広がる灰原、東側からは 1 号窯の窯体の痕跡とこれに伴う灰原を確認した。また、東端では、北山窯の西側にかけて広がる平坦面 1 の一部とその下層から新たな平坦面が検出でき、勘介 1 号窯の灰原の一部を削平して北山窯の平坦面が造成されたことが確認できた。

なお、調査区西端崖面では 2 号窯の灰原の断面が確認できたことから、2 号窯の灰原が調査区外にあたる西側へ続くものと推定される(写真 13 右 2)。

以下、試掘坑と各遺構の概要を解説する。

(2) 検出遺構

ア. 1 試掘坑 (図 7, 13, 写真図版 11)

1 試掘坑は北山窯の北西にあたる標高 173 m 前後の丘陵斜面に直交し、幅 1 m、延長 8 m に設定した。この斜面は試掘坑の中央付近から下方がすでに削平された状況が認められた。試掘坑上端部では表土直下の灰褐色土から大窯期の遺物が出土したが灰褐色土は薄く堆積するのみですぐに地山となる。削平された部分では褐色土が堆積しており、磁器製品に混じって大窯製品が出土した。この層の直下は角礫含む地山である。床面は比較的平坦ではあるものの、遺構ではなく盛土のための土砂を採掘した可能性が高い。

イ. 2試掘坑 (図7, 14, 写真図版11)

2試掘坑は1試掘坑の斜面上方、標高177m前後の丘陵斜面に幅1m、延長6.0mに設定した。試掘坑では表土の下には灰褐色土層が堆積しており大塚期の遺物を伴う。北端部分には白粘土層の堆積があり、斜面の上方からの流入土の可能性が高い。試掘坑の大部分では灰褐色土は薄く堆積するのみで、すぐに角礫を含む地山となる。遺構は確認できず丘陵の斜面の一部であったものと思われる。

ウ. 勸介1号窯遺構 (図7, 15, 写真図版12)

窯体 (図15, 写真図版12)

調査区東側部分の崖面掘削で被熱したと推定される赤褐色土が確認できた。このため、斜面部分の表土を除去したところ、被熱部分の拡がり確認できた。最大幅1.6m、延長4.3mの範囲が赤褐色に被熱していて、周辺の表土中から小分炎柱や焼台、窯壁片とともに遺物も出土したことから、この被熱部分が窯体の痕跡と推定できる (写真図版12)。

灰原 (図7, 写真図版13)

1号窯は窯体の痕跡と推定した赤化範囲の南東側、斜面の下方に位置している。赤化範囲の下方は崖面となっていて、灰原は東側よりの一部が残存する。東側の斜面は1試掘坑 (図13, 写真図版11) の堆積状況から北山窯の造成に伴って削平されたものと推定でき、さらに下方には北山窯の平坦面1が所在しており、灰原の東側部分も失われ一部が残存するにすぎない。地形的には西側へ大きく傾斜する斜面がありこの部分から灰原の堆積を確認した。8ラインの灰層では下層には炭粒を含む暗褐色土が堆積し、その上層に褐色土、表土が堆積する。暗褐色土は最大0.3mの厚さで堆積する (写真13)。

エ. 勸介2号窯遺構 (図7, 16, 写真図版12, 13)

窯体 (図16, 写真図版12, 13)

調査区中央部分の崖面掘削で被熱したと推定される赤褐色土が確認できた。このため、斜面上端において表土を除去したところ、窯体の一部が検出できた。検出した窯体は焼成室上方の一部分であり、最大幅1.3m、延長2.5mの範囲で確認でき、天井支柱の痕跡が残る (写真図版12, 13)。窯内や周辺の表土および褐色土から窯壁片や遺物が出土した。

灰原 (図7, 写真図版13)

2号窯の灰原は窯体を確認した斜面の西側の斜面上方から斜面の下端まで分布する。灰原の東側部分は崖面となっていて、灰原は一部が残存するにすぎない。斜面下端では下層には炭粒を含む暗褐色土が堆積し、その上層に褐色土、表土が堆積する。斜面上方では地山の上層には灰褐色土が堆積しており、多量のトチ片を含みその上層には斜面の下方と同様に褐色土、表土が堆積する (写真13)。



图 15 勘介1号窩被熱範圍実測図 (縮尺 1/20)

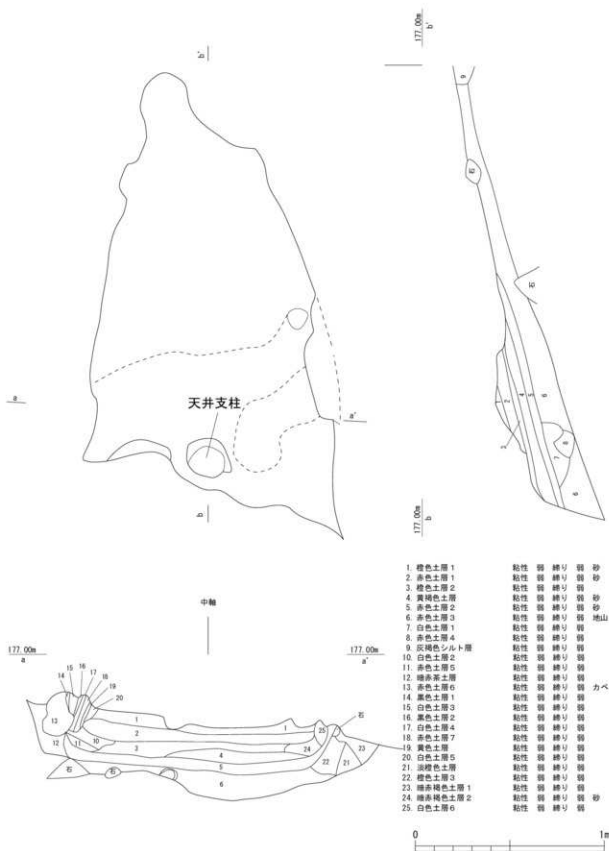


図 16 勘介 2 号窯窯体実測図 (縮尺 1/20)

第3章 遺物

第1節 北山窯跡(図17～33)

北山窯跡の遺物は、窯体に伴う遺物は多くはないものの、物原を中心に出土している。このほか、平坦面などから出土していて、製品と窯道具とがあり全体でコンテナ箱に110箱である。このほか、花崗岩製の柱状で端部にU字形のくぼみをもつ製品の干し棚の台石(S-1,写真図版20)がある。出土状況は概ね陶器は下層物原から、磁器は上層物原から出土している。窯道具の匣鉢はいずれの物原からも出土するが、下層ではロクロ製、上層は型製が大半を占める。(松澤)

製品には陶器の植木鉢・搦鉢・蓋・鉢・皿・片口など、磁器では碗・蓋・小杯・湯呑・皿・鉢・容器・徳利・花瓶・水滴などがある。窯道具ではトチオサエ・色見・乳鉢・エブタ・匣鉢・棚板・ツク・トチ・栓などがあり、煙突の部材に用いられた土管や築窯材であるハコグレも含まれている。

整理の段階では、陶器・磁器を器種ごとに分け、破片点数のカウントではなく、ほぼ全ての重量の計測を行った(第5章8～10)。平成29年度調査時には近代陶磁器類について、遺存状況の良い資料を物原から選択的に採取した。平面的な出土地点、層位の情報は平成27年度調査にしたがう。

(1) 陶器製品(図18～19/表8,9)

出土品のうちで主体を占めるのは**植木鉢**(1～5)であり、平面形が長方形のものと円形のものがある。タタラ成形、型打ち(外型)技法による長方形のタイプは、底部から体部が直線的に僅かに開いて立ち上がり、外面四隅にかき状の足がつく。釉薬は底面を除く体部外面と内面は口縁付近に施され、色は白、緑、茶(赤)、青などがある。ロクロ成形の円形タイプの口径・器高は多様であり、直線的な体部から口縁部が外折して縁帯を持つもの、口縁端がやや肥厚して玉縁状となるもの、体部が丸みをもって立ち上がるもの、輪高台や貼り付け高台など器形も数種がみられる。釉薬は底面を除く外面から内面の口縁部付近に施され、色は白、青などが目立つ。両者いずれも底面に円形の穿孔がみられる。

搦鉢(6～8)は口径に対して器高が低く体部が開く形状であり、口縁端部が肥厚して外面に浅い沈線がめぐる。口径が18cmと13cm前後の中・小型のものがあり、幅広の輪高台付近を除いて鉄軸が掛かる。内面底部から体部に密に播り目が施される。

小型の**片口**(9)体部は口径10cm、器高3.9cmと搦鉢と同様、開くやや浅い形状であり、高台付近を除き灰軸が施される。片口(25)は口径19.8cmの半球形の体部に削出輪高台が付く。高台付近を除き灰軸系の黄色軸が施される。内面に目録3ヶ所が残る。

刷毛目皿(26)はやや幅広の断面逆台形の削出高台のつく皿であり、内面には白泥で渦巻文様を描き、高台畳付を除き灰軸を施す。

白泥を用いた製品では、打ち刷毛目文様の蓋物は一定量があり、**蓋**(13,15～17)と**鉢**(18～22)は口径12cm、16cm、21.5cm前後と数種類の規格がある。他とは異質な暗灰色の胎土の皿(10)はこの1点のみであるが、全面に厚く鉄錆軸が掛かる焼成不良品である。このほかにも未掲載資料で布目痕の残る型打ちの小皿(小鉢)などがある。

(2) 磁器製品(図20～22/表8,10)

多くを占めるのは口径9.0cm前後の小形の碗・小杯類と口径10cm以上の中形碗類である。施文技法では小形碗類では手描き染付が多く、中形碗では手描き染付に加え、上絵付、型紙摺、銅版転写、吹き絵な

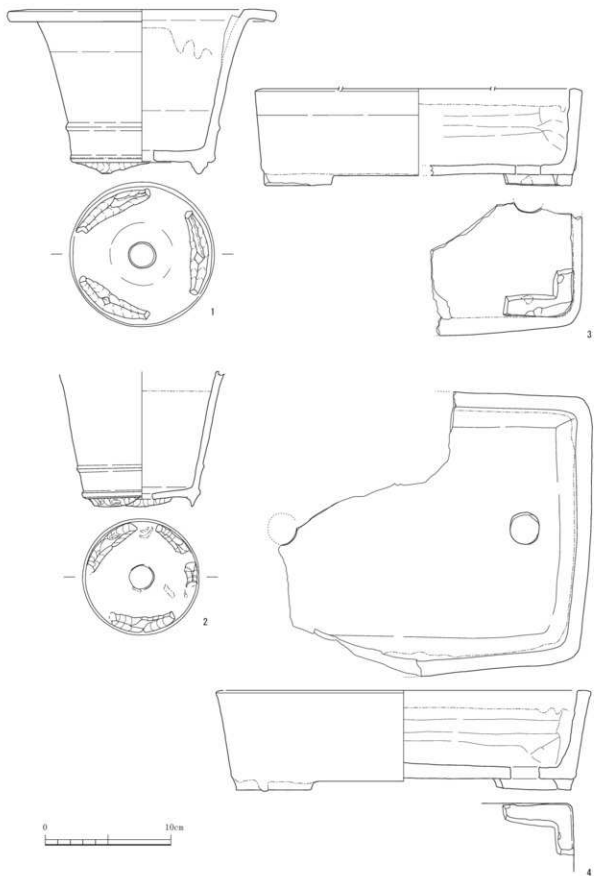


圖 17 北山窯跡出土遺物 1 (1/3)

どがあり、用いられる釉薬も青・赤・茶・黒・緑色などがある。透明釉のほかにはクロム釉を用いた青磁釉製品（写真図版19）がある。

小型碗類では、まず端反碗の形状をA類（30～35,46）、口縁端部が外反して腰に稜をもつB類（38）、その他に焼成時の変形であろうか体部が若干くびれるような小杯（39）をC類とした。D類（39～45）の体部は緩やかな丸みをもって立ち上がり、口縁にむかって少し開き気味になる。外傾する削り出し高台がつく。E類（36,37）は半球形に近い体部をもつ。特徴としては、D類の施文技法は手描き染付であり、高台の脇の器壁が最も厚い。E類は手描き染付が主体で転写技法もみられる。体部、高台ともに器壁を薄くつくるものが多い。44は紀年銘があり、高台内と内面に「明治四十一年四月」「水野」「品野記念」と筆書がある。いずれも高台畳付部分を除き透明釉が施される。

中形碗はほとんどが平碗（平丸碗）であり、腰が張り器高の高いもの、器高のやや低いもの、体部がやや直線的に開き器高がやや高いものがある。

そのほか大型の丸碗形を呈する鉢（61,62,63）や口縁部を輪花につくる小形の鉢などは、見込にも文様が描かれる。同規格のものが一定量が確認できる器種として、白磁無文の湯呑（69,70）、把手状の飾りの浮彫り文様を付けた白磁容器（67,68,70）などがあり、熔着関係により両者は重ね焼きで同時に焼成されたことがわかった。皿では銅版転写で紅葉と鹿の文様が描かれた口径11.5cm前後の丸皿（27,28）が多く、高台内に「北山精製」の銘がみられる。ほかに型打ちの染付小皿などが数種ある。わずかではあるが染付徳利（29）も出土している。

なお、最終段階の北山窯の窯体下の盛土（B7最下層や物原下層）で確認される製品のグループには小形碗D類、白磁湯呑、白磁容器などが含まれており、さらに古い段階の資料と位置付けられる。

(3) その他製品類

未製品の状態の資料も出土している。猫形貯金箱（66）や磁器製品の素焼段階のもの（37,47,51,61）の他に表面が無釉の状態の上絵付け用の花瓶素地（71）などがある。そのほか少量が少なく搬入品と考えられる器種がある。磁器丸皿（134）の文様は型紙摺りで、体部外面には「明治二年」と紀年銘（図版21）が認められる。磁器盃（135）は販促用のもの。磁器水滴（138）は天井部に浮彫りで交差する旗が表現され、その上に呉須で桜の文様が転写で描かれている。磁器染付小杯（136）の器形は希少であり、文様も転写技法。湯呑（137）は青、緑色釉で文様がプリントされている。陶器鉢（139）の内面文様は青色釉を用いた吹き絵技法。植木鉢（140）はタタラ成形・型打ち整形であり、胎土はここでは異質な緻密な朱泥が用いられている。141は鉄軸の掛かる甕で、胎土は白色でやや軟質の焼成。142は用途不明のロクロ成形の陶器製品であり、径31.6cmの底面となる側が開口している。接地面は内側に折り返されて幅広の面をなし、使用による摩滅が認められる。外面には鉄軸が掛かり、内面は露胎で楕円形枠に記号（「特殊」か）が捺されている。正円の環状の陶製品（144～147）は無釉の赤く焼締まったもので、上端の径は25cm前後、円周内面には縦方向に9.0cm程度の突起が3,4ヶ所につくとみられ、陶器製の五徳と想像される。143は磁器製の「陶丸」である。

(4) 窯道具（図23～31）

匣鉢は平面形が円形を呈し口径11cmと16cm前後となるものが最も多く、ロクロ製で器高が高く丸底のもの（98～103）、やや浅い丸底のもの（104）、ロクロ製で平底のもの（106～108）がある。型製では凸底のもの（64,65,109,110）、平底で浅い（105）ものがある。105,106は底面に円形の焼成前穿孔がある。111はタタラ成形・型打ちによる隅丸方形のもので、内面底面には径6.6cmの円形の置き跡4つが残る。

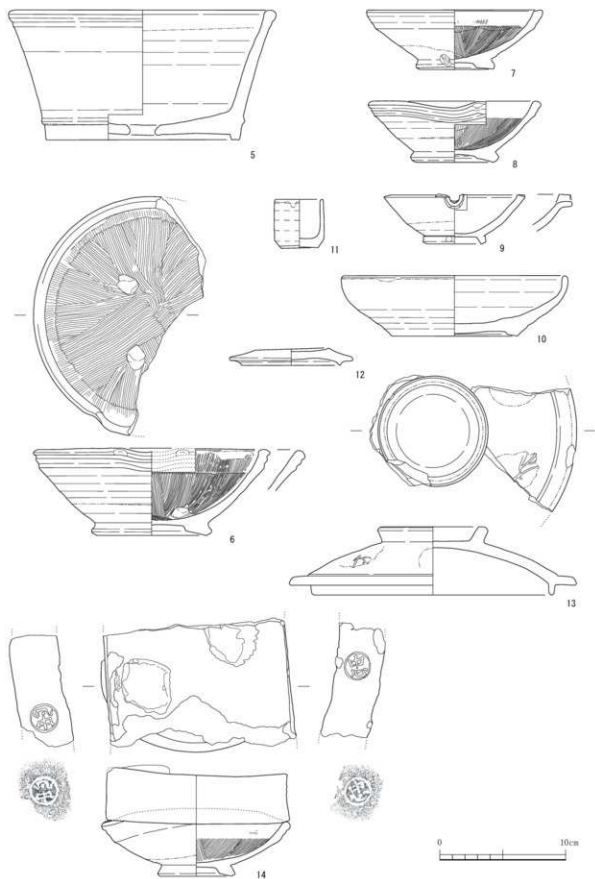


图 18 北山窯跡出土遺物 2 (1/3)

匣鉢蓋(113)と組み合わせると考えられる。大型の陶器円形板(114,115)の用途は不詳であるが、煙突用の土管の径に近似している。112は無軸の浅い長方形の箱で、胎土が粗雑でやや軟質の焼成である。

エプタ(88～93)はタタラ成形の円形板で、径11.0～13.0cm、厚さ1.0～1.4cmである。片面に鉄軸で「北山」など窯印が筆書されるものがある(88～90,93)。94は円形孔があるがエプタへの転用品と思われる。

トチは径6.0cm、厚さ0.6cm程度の磁器質の円形板、板トチ(86,87)が最も多く、物原では灰泥じりのトチ層を形成している。高さ1.2cm程度の円柱状の磁器質のトチ(75)は、高台内側に段をもつ中形碗(52,53,写真図版20)専用であり、これにより高台疊付もガラス質の皮膜に覆われることになる。同様の使用法は多治見市・根本焼にあり、「トチ焼」として明治33年に岐阜県陶磁器組合から専売権を得ている。こちらのトチは粘土製である。わずかであるが、96,97のようなトチもみられる。

トチオサエ(81～85)は磁器製で、径4.7cm(84)、6.2cm(85)の底面及び上端部に使用痕が明瞭に認められる。側面に文字が呉須で筆書きされており、紀年銘のあるものでは「明治卅〇落慶」(81)、「昭和七年四月」(85)がある。磁器製の**乳鉢**(79,80)は同一個体の可能性のある資料であり、内面は使用による摩滅が顕著である。内面口縁部付近から外面体部にかけて透明釉がかかる。外面に「北山 〇年五月」(80)、「〇念 昭和」(79)の呉須筆書きがある。**色見**は陶器製品片(72～74)と磁器製品片(77,78,写真図版21)を用いるものがあり、呉須で試し書きをした磁器片が圧倒的に多い。**ツク**は粘土を材料とし、径4.2～5.5cmの円柱状を呈する。116は長さ20cm以上、117は完形で長さ9.5cm、端部付近にかけて径が太くなる形状のもの(118)などがある。

色見孔を塞ぐための**栓**(125～127)は、粗い胎土の粘土を材料としている。全体の形状が判る個体はないが、125の一部で直線的な辺が確認でき、これは平面形は方形であった可能性が高い。被熱による影響の少ない平らな面の中央に径と深さが3.5cm程度となる円形の凹みをもつ。

棚板・ハコグレは硬く焼締まった長方形のレンガであり、様々に組み合わせられ狭間柱や煙道部の天井アーチなど窯材に利用されている。棚板(120～123,128)は長辺約30cm、短辺12～15cm、厚さは3.7～4.7cmであり、ハコグレ(129～131)は長辺約28cm、短辺17～19cm、厚さは9.6～10.3cmとおおよその規格が認められる。窯印の記号印が付くものがある。土管(132,133)は常滑窯産の製品である。径は42.1cm、56.6cmとそれぞれ異なるもので、計画的なセット関係ではなく築窯材として転用されたと考えられる。

実測図の掲載はないが、干し棚の台石(S-1,写真図版20)も採取している。石材は花崗岩であり、長さ1.04m、断面は一辺11.0cm～16.0cm程度の四角形で、側面には石材を割った時の欠穴の痕が残り、上端は丸太を支えるための短い二又状に加工・整形されている。

(5) 北山窯でみられた文字・記号

製品および窯道具類にみられた文字・記号を表2.3に示す。

紀年銘資料は4点がある。134の型紙摺りの染付丸皿には「明治二四年」とある。北山窯製品にはない施文技法であり搬入品と思われる。窯道具のトチオサエ(81)には「明治卅〇落慶」とあり、また別の個体(85)には「昭和七年四月」「北山」と呉須筆書きがあり、これらは北山窯で使用されたものと考えられる。44染付小形碗は同様の器形・文様のものが複数個体あり、北山窯での焼成品と考えられるものであり、「明治四十一年 四月」と記されている。

銘は磁器製品に集中してみられる。まず、北山窯に関連するものは5種類(「北山」「北山造」「北山精造」「北山精製」「陶古園北山製」)があり、このうち「北山」は焼成前に小判型の枠内に文字を入れた印を捺したもので、印の種類も複数が存在する。その他は筆書の文字である。以上は操業期間中の主力製品と思われる端反碗・小杯・湯呑など小形の製品と平碗の高台内に記されている。次に目立つものは「松風口口」

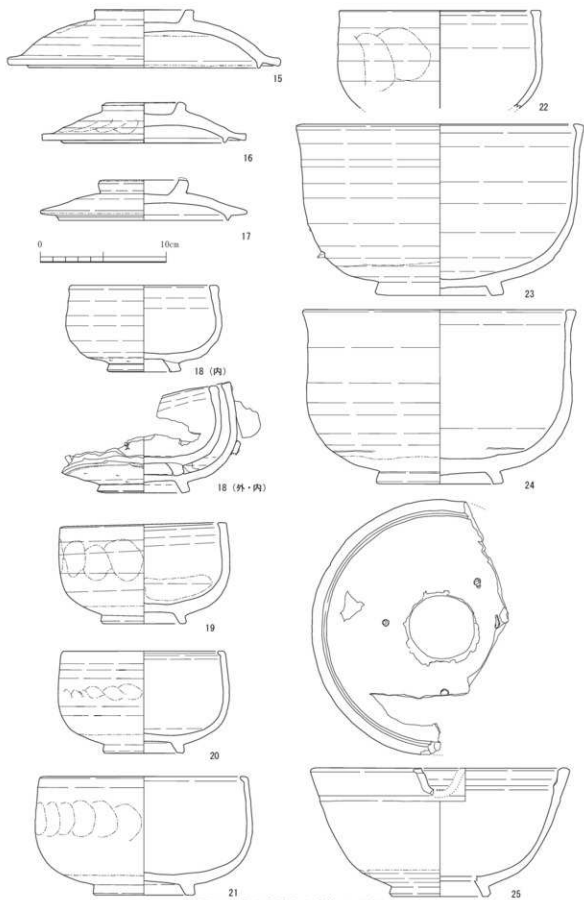


图 19 北山窯跡出土遺物 3 (1/3)



图 20 北山窯跡出土遺物 4 (1/3)



图21 北山窑出土遗物 5 (1/3)

(32)、「陶玉園松風製」(63)があり、これらと関係が深いものとして「陶玉園製」(42,62)、「陶玉精製」(61)があり、小杯とやや大型の深い碗形態の高台内に筆書されている。出土資料の中でこれらは染付文様の装飾性の高い一群に含まれる。そのほか窯元の銘には「曉山」(31)、「古白園製」(41)があり、北山窯以外の複数の窯元の製品がここで焼かれていたと考えられる。

59,60は統制番号「品147」印のある平碗類である。戦時中の操業を伝える資料と考えられる。

窯道具では、先述のトチオサエや乳鉢(79,80)などの磁器製の道具類は呉須筆書きされることが多い。その他にはエブタ・匣鉢の側面に鉄袖で筆書きされるものがあり、「北山」(88,89)をはじめそれ以外にも十数種類の記号がある。また窯材の棚板にも記号印があり、窯道具類の多様な器種に共通するものが存在する。例えば「忠」は植木鉢片(73)、平底のロクロ製匣鉢(108,759)、棚板(14,120)にみられる。「ク」はトチオサエ(82)、丸底のロクロ製匣鉢(98,99,102,760,761)にみられる。なお、「ヨ」(90)は「山」の回転したものか、ヤマに「ク」を省略した記号かもしれない。

棚板等には以上のものに加え「友」(119,124)や「金」(123)など計15種類の記号が確認されている。陶製植木鉢片を用いた陶片資料(73)の存在から、少なくとも「忠」は北山窯では相対的に古い時期の生産器種と見做される陶器生産との関連が推定される。

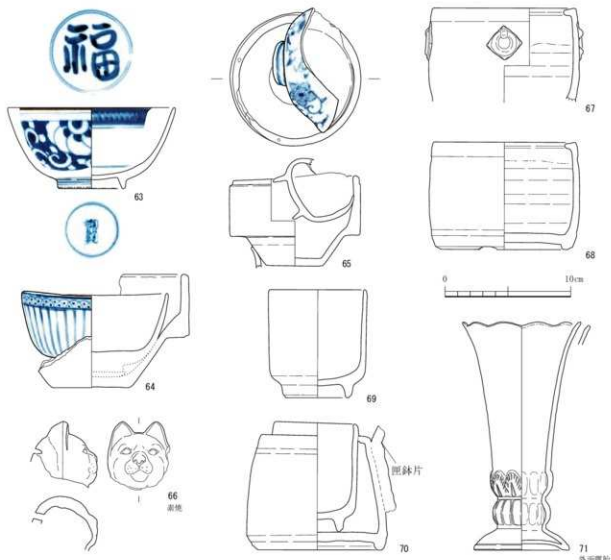


図22 北山窯跡出土遺物 6 (1/3)



图 23 北山窯跡出土遺物 7 (1/3)

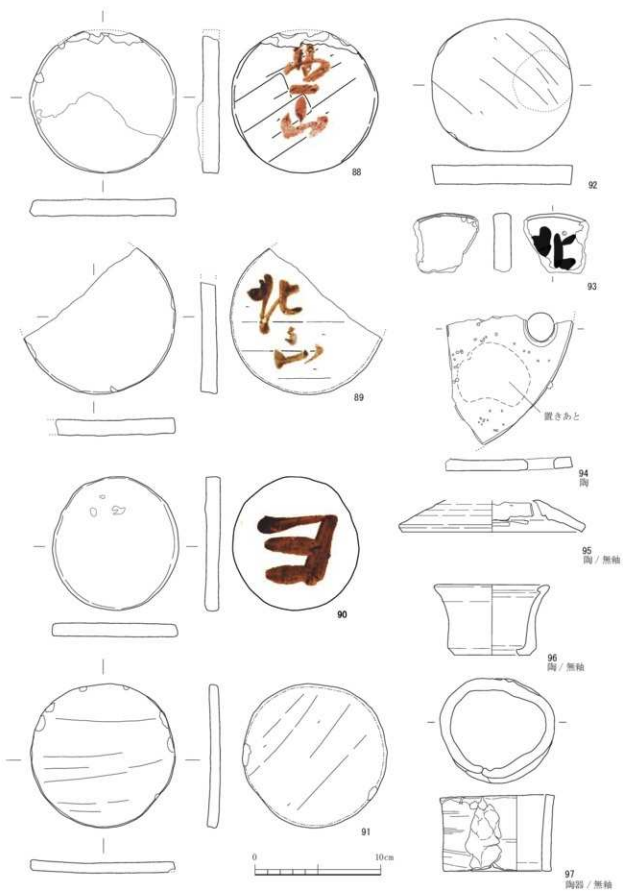


图24 北山窯跡出土遺物 8 (1/3)

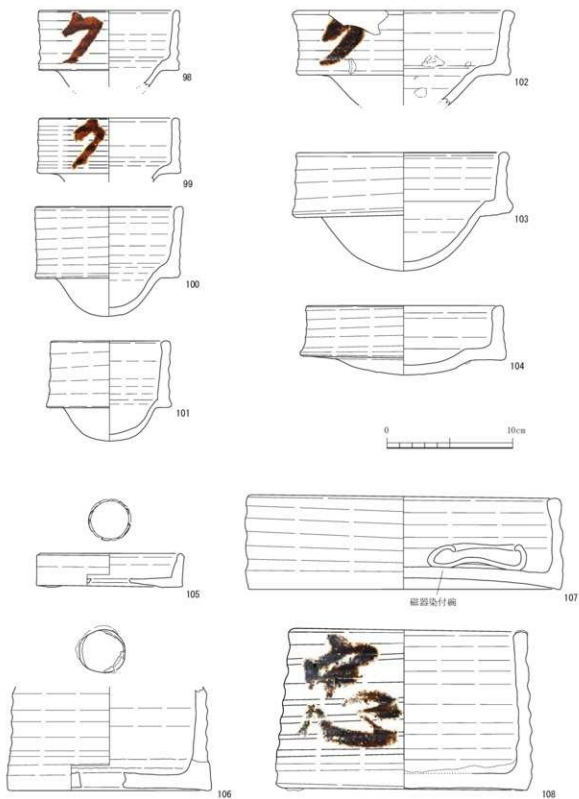


图 25 北山窯跡出土遺物 9 (1/3)

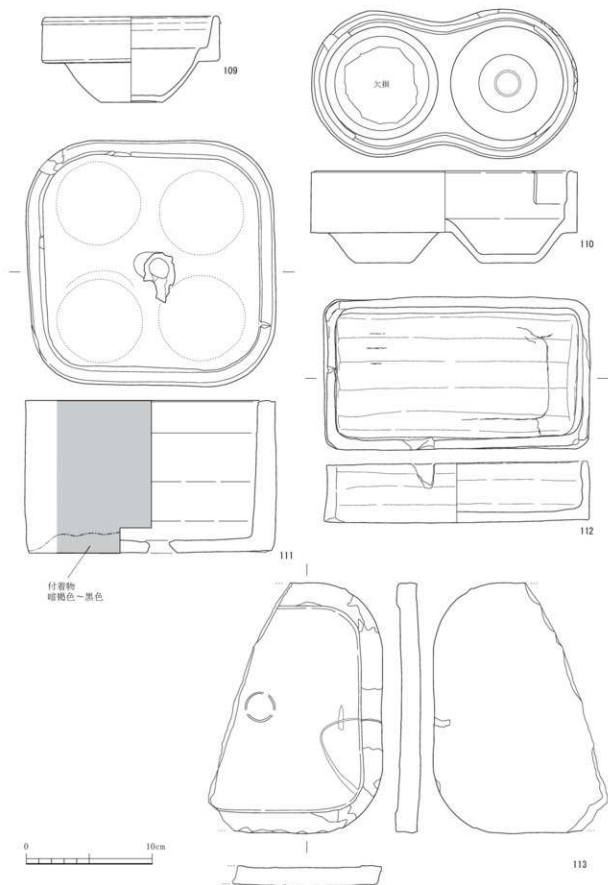


图 26 北山窯跡出土遺物 10 (1/3)

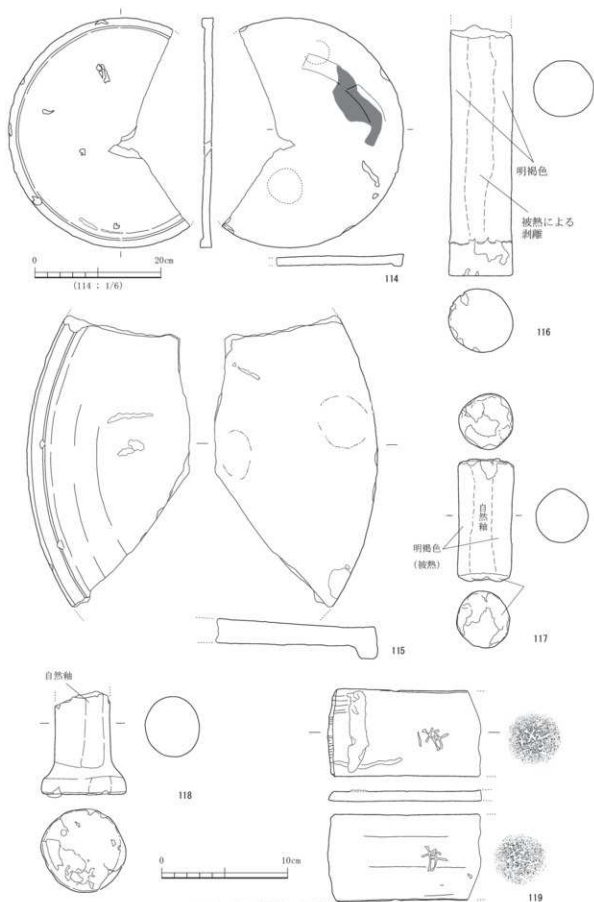


图 27 北山窯跡出土遺物 11 (1/3, 1/6)

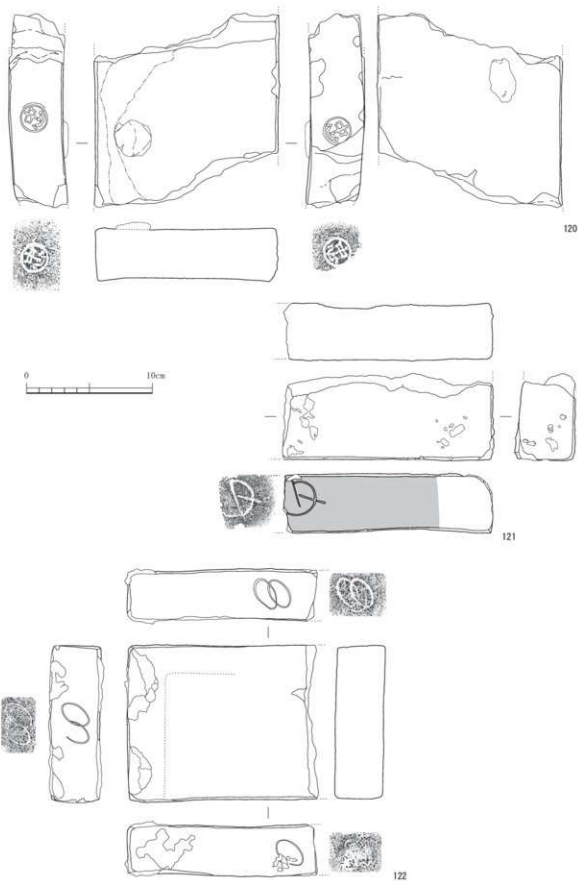


圖 28 北山窯跡出土遺物 12 (1/3)

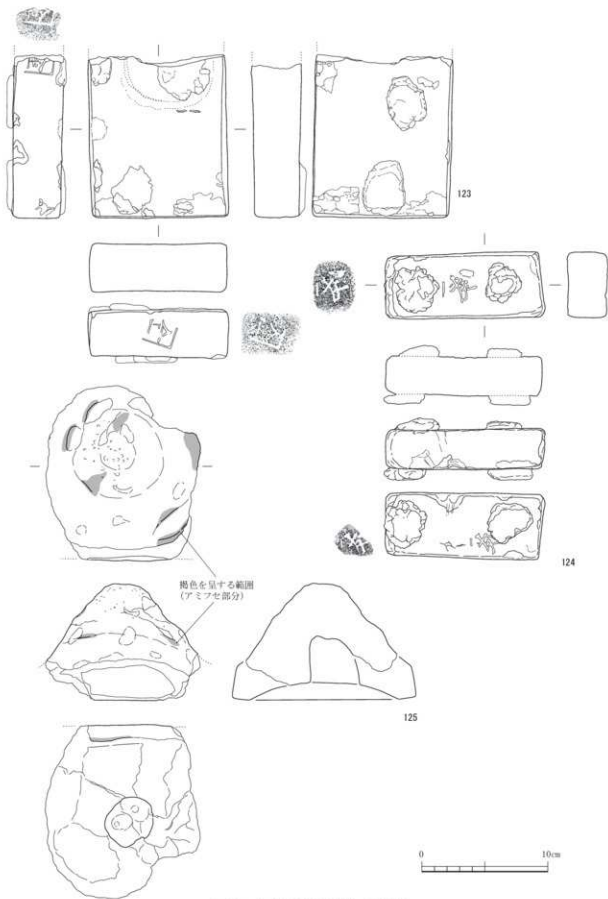


図 29 北山窯跡出土遺物 13 (1/3)

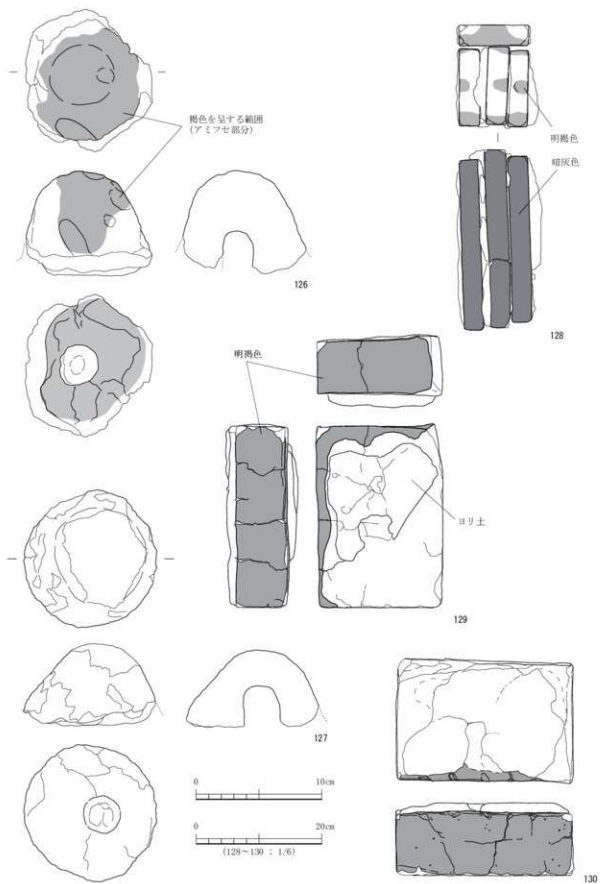


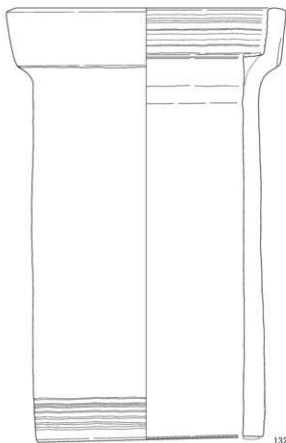
図30 北山窯跡出土遺物 14 (1/3, 1/6)



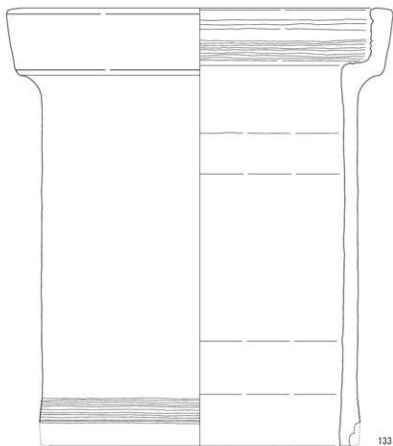
ヨリ土



131



132



133

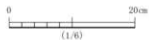


图 31 北山窯跡出土遺物 15 (1/6)

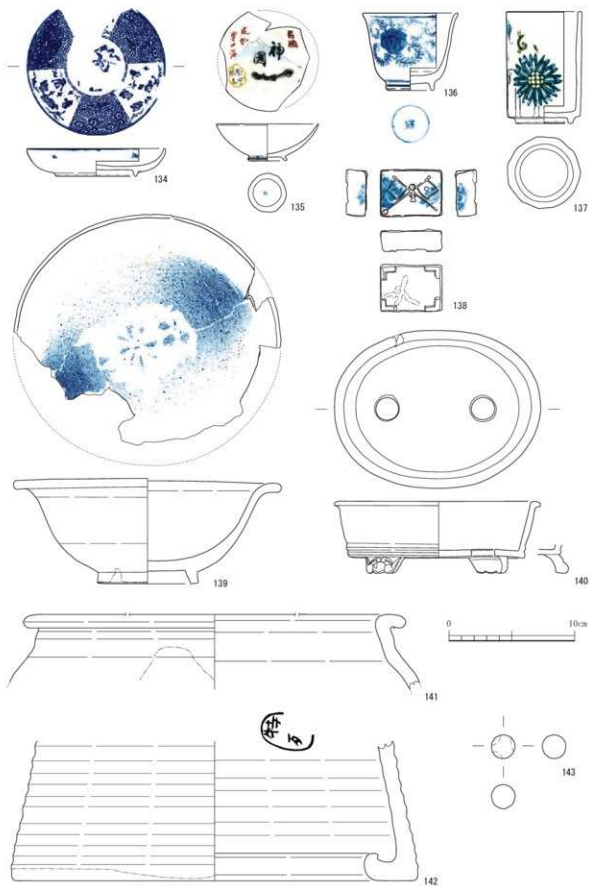


图 32 北山窑跡出土遺物 16 (1/3)

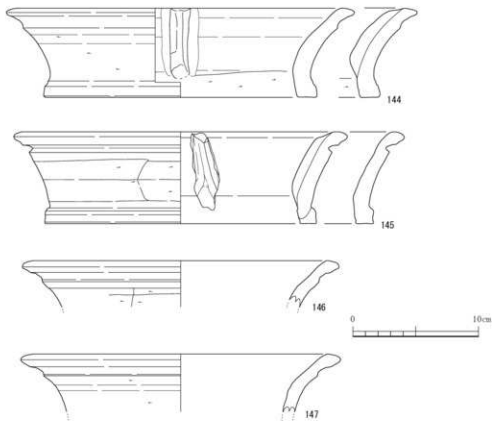


図33 北山窯跡出土遺物 17 (1/3)

表2 北山窯跡出土遺物の文字・記号(1)

登録番号	種別	器種	技法	文字等の部位	施薬/その他	グリッド・出土地点
27	磁器	皿	筆書文字	外面底部	「北山精製」	Z27
28	磁器	皿	筆書文字	外面底部	「北山精製」	Z27南壁
30	磁器	染付端反碗	筆書(呉須)	外面底部	銘あり	B7
31	磁器	染付碗	筆書(呉須)	外面底部	「嶺山」	東壁溝
32	磁器	染付端反碗	筆書(呉須)	外面底部	「松風□□」	Z27
33	磁器	染付端反碗	筆書(呉須)	外面底部	「□□□□」	C7
35	磁器	染付端反碗	筆書(呉須)	外面底部	「北山製造」	壺外
38	磁器	染付端反碗	筆書(呉須)	外面底部	「陶古園北山製」	B7
40	磁器	染付小形碗 (D型)	筆書(呉須)	外面底部	銘あり	Z27
41	磁器	染付小形碗 (D型)	筆書(呉須)	外面底部	「古白園製」か	C7
42	磁器	染付小形碗 (D型)	筆書(呉須)	外面底部	「陶玉園製」	A7
44	磁器	染付小形碗 (D型)	筆書(呉須)	高台内側/見込	「明治四十一年四月」, 「水野」	B7
45	磁器	染付小形碗 (D型)	筆書(呉須)	高台内側/見込	「品野記念」	B7
48	磁器	湯呑	筆書文字	外面底部	「北山造」, 黒色軸	B7北壁
50	磁器	平碗	陰刻	外面底部	「北山」	Z27-A7
51	磁器	平碗	陰刻	外面底部	「北山」	B8
56	磁器	蓋碗	陰刻	外面底部	「北山」	Z27
59	磁器	蓋碗	陰刻	外面底部	統制番号か	Z27
60	磁器	平碗	陰刻	外面底部	統制番号「品147」	Z27
61	磁器	鉢(新焼)	筆書(呉須)	外面底部	「陶玉精製」	A7
62	陶器	鉢	筆書(呉須)	外面底部	「陶玉園製」	B7
63	磁器	平碗	筆書文字	外面底部	「陶玉園松風製」	B7
134	磁器	染付丸皿	筆書文字	体部外面	型紙摺, 「明治二四年」	半, B7北壁, B9
135	磁器	茶	転写	内面	「名酒神国」	C7
142	陶器	器種不明(内面転)	スタンプ	内面	小判形枠に「特(梅?)」	B7西半
638*	磁器	平碗	筆書文字	外面底部	「平安竹葉」	9864V トチ層

表3 北山窯跡出土遺物の文字・記号(2)

登録番号	種別	器種	技法	文字等の部位	施薬/その他	グリッド・出土地点
79	磁器	乳鉢	筆書(呉須)	体部外面	「(記)念 昭和」	9865W, X
80	磁器	鉢鉢	筆書(呉須)	体部外面	「北山 □年五月」	9865X, Y
81	窯道具	トチオサエ	筆書(呉須)	体部外面	明治甲口落慶」	C7
82	窯道具	トチオサエ	筆書(呉須)	体部外面	ヤマ形に「ク」	B7
83	窯道具	トチオサエ	筆書(呉須)	体部外面	染付文字あり	B7東半
84	窯道具	トチオサエ	筆書(呉須)	体部外面	ヤマ形に「ク」と□「□山」	ZZ7
85	窯道具	トチオサエ	筆書(呉須)	体部外面	昭和七年四月」 「北山」	B7, 9864B, C, D, V, I
752*	窯道具	トチオサエ	筆書(呉須)	体部外面	「北山」か	C7
73	窯道具	陶片(榎木鉢)	筆書(鉄軸)	破片表裏面	「忠」/「文字」	A7
74	窯道具	陶片	刷削	破片裏面	「江山」	C7
88	窯道具	エブタ	筆書(鉄軸)	裏面	「□山」	C7
89	窯道具	エブタ	筆書(鉄軸)	裏面	「北山」	ZZ7~A7
90	窯道具	エブタ	筆書(鉄軸)	裏面	「ヨ」	B8社遺
93	窯道具	陶片(エブタ)	筆書(鉄軸)	裏面	「北」	B7
119	窯道具	方形厚鉢蓋か	焼製	裏面	記号印「友」	東庫下
754*	窯道具	エブタ	筆書(鉄軸)	裏面	窯印筆書あり	ZZ7
755*	窯道具	エブタ	筆書(鉄軸)	裏面	「ヨ」	D8壁
98	窯道具	底	筆書(鉄軸)	外面側面	「ク」	A7
99	窯道具	底	筆書(鉄軸)	外面側面	「ク」	B7
102	窯道具	底	筆書(鉄軸)	外面側面	「ク」	C7
108	窯道具	底	筆書(鉄軸)	外面側面	「忠」	B7トレンチ
756*	窯道具	底	筆書(鉄軸)	外面側面	窯印筆書あり	ZZ7
757*	窯道具	底	筆書(鉄軸)	外面側面	窯印筆書あり	ZZ7
758*	窯道具	底	筆書(鉄軸)	外面側面	「リ」?	ZZ7
759*	窯道具	控鉢(ロクロ)	筆書(鉄軸)	外面側面	「忠」	ZZ7
760*	窯道具	底	筆書(鉄軸)	外面側面	「ク」	C7
761*	窯道具	控鉢(ロクロ丸底)	筆書(鉄軸)	外面側面	「ク」	C7
762*	窯道具	控鉢(ロクロ平底)	筆書(鉄軸)	外面側面	「山」	C7
14	窯道具	標板+控鉢	焼製	側面	記号印(○に「忠」)	C7
120	窯道具	標板	焼製	側面	記号印(○に「忠」)	-
121	窯道具	標板	焼製	側面	窯印陰刻あり	C7
122	窯道具	標板	焼製	側面	記号印(○2つ重ね)	C8南壁
123	窯道具	標板	焼製	側面	記号印「カギに「金」)	-
124	窯道具	タレ(小)	焼製	側面	記号印「友」	D8壁
763*	窯道具	標板	焼製	側面	記号印(かまぼこ形)	ZZ7
764*	窯道具	標板	焼製	側面	記号印(○に「口」)	ZZ7
765*	窯道具	標板	焼製	側面	記号印○	ZZ7
766*	窯道具	標板	焼製	側面	記号印○	ZZ7
767*	窯道具	標板	焼製	側面	記号印(○に「一」)	ZZ7
768*	窯道具	標板	焼製	側面	記号印○	ZZ7
769*	窯道具	標板	焼製	側面	記号(かまぼこ形)	ZZ7
770*	窯道具	標板	焼製	側面	記号(かまぼこ形)	ZZ7
771*	窯道具	標板	焼製	側面	記号(○に「一」?)	ZZ7
772*	窯道具	標板	焼製	側面	記号印(○に「一」)	A7
773*	窯道具	標板	焼製	側面	記号印(ヤマ形)	A7
774*	窯道具	標板	焼製	側面	記号印○	A7
775*	窯道具	標板	焼製	側面	記号印○	A7
776*	窯道具	標板	焼製	側面	記号印○	A7
777*	窯道具	標板	焼製	側面	記号印○	B
778*	窯道具	標板	焼製	側面	記号印「七」	D8
779*	窯道具	標板	焼製	側面	記号印印(カギ形)	D8

*は実測図主記載

第2節 勘介窯跡 (図34～図69)

遺物はコンテナ箱で140箱が出土している。

出土地点は試掘坑と窠体および窠体の下方にあたる灰原であるが、試掘坑出土遺物を除き出土地点からそれぞれ1号窠および2号窠に伴うことが明らかである。なお、1試掘坑はその位置と出土状況から1号窠に伴う可能性が高い。また、2試掘坑の出土遺物は大半が試掘坑の北側に推定される平坦面(工房跡)あたりから転落した遺物である可能性が高く、斜面上方に推定した遺構の状況が明らかではないため、1号窠あるいは2号窠のどちらに伴うものかは不明である。(松澤)

資料の整理にあたり、勘介1号窠、2号窠の位置が明らかとなったことを受けて、調査範囲東方のグリッドZY6、ZZ6、ZY7、ZZ7、ZZ8にかけて広がる物原を1号窠、調査範囲西方のZV4、ZU5、ZV5、ZW5、ZU6、ZV6、ZU7、ZT7にかけて広がる物原を2号窠に伴う遺物として取り扱った。(以下武部)

(1) 勘介1号窠 (図34～図50)

勘介1号窠に伴う物原から出土した資料では、碗類では天目茶碗・丸碗・平碗があり、皿類には端反皿・稜花皿・腰折皿・丸皿・灯明皿・縁軸皿がある。鉢類では搦鉢がある。このほかに小杯・茶入・筒形容器がある。窯道具では銚鉢・挟み皿・トチ・焼台・小分炎柱がある。このうち縁軸腰折皿は多数の溶着資料があり、挟み皿としての使用法が想定できる。

天目茶碗 (148～173) は口唇部のくびれが比較的小さく、体部は若干の丸みをもって立ち上がる。浅い削り出し輪高台となるものが多く、高台の断面形状は方形あるいは逆台形を呈する。少量の内反高台のもの(171)も含まれる。高台脇の削り込み幅は小さく、外面体部下方向から高台にかけて濃い精軸が掛けられる。軸葉は内面および外面上方に鉄軸が掛けられる。

丸碗 (175～186) の体部は、下方から丸みをもって開きつつ上方は直立する。器壁は底部でやや厚みがあり、口縁にむかって薄くなり、端部は丸く調整される。高台は断面形状が方形となる貼り付け高台が主となる。175～179は外面体部には鉤形の印花文を連続して蓮弁文が表現される。軸葉は内外面全体に鉄軸が掛けられるものが多い。外面下方から底面にかけて露胎となるもの(186)は削り出し高台である。そのほか点数は多くはなく抽出できなかったものに鉄軸**平碗** (174)がある。

皿類では端反皿が最も多い。鉄軸**端反皿** (187～223) の体部は丸みをもって立ち上がり、口縁端部が緩やかに外反する。口径11.0～11.5cmを中心に、15.0～17.0cmの中皿(187～199)、8.0cm前後の小型の皿(217～223)がある。貼り付け高台の断面形状が逆三角形となり先端が尖るもの、方形に近いものがあり、後者は中皿に多く認められる。鉄軸は全面に施されるが、中皿では内面底部を露胎とするものがある。内面底部に印花文のある個体が多い。菊花の他にかたばみ(214)などの印一つを捺す場合がほとんどであるが、中皿(192)のように菊花3つを配置するものがある。削り込み高台の端反皿(225～227)は口径約10.0cm、体部は丸みをもって開き口縁端部が緩やかに外反する。こちらは全面に鉄軸が掛かり、口径(・器高)は鉄軸端反皿にはない中間の規格である。

鉄軸**稜花皿** (228～230) の体部は下方ではやや直線的に開き、口縁にかけて緩やかに外反する。口径11.0～12.0cmの口縁は輪花状をなし、内面底部に菊花の印花文がつく。228は全面軸輪で断面逆三角形の高台が付き、229は平底の底面に糸切り痕を残し、内面底部と共に露胎である。

腰折皿 (224) は口縁部が大きく外反する器形で、器壁は全体に薄く内面から外面口縁部付に鉄軸が掛かる。

丸皿 (231～234) は口径約11.0cm、全て削り込み高台であり、内外全面に鉄軸が掛けられる。231の高台畳付部分は軸が払い取られている。233内面には2ヶ所のトチ痕が残る。235は口径11.2cmの内丸皿

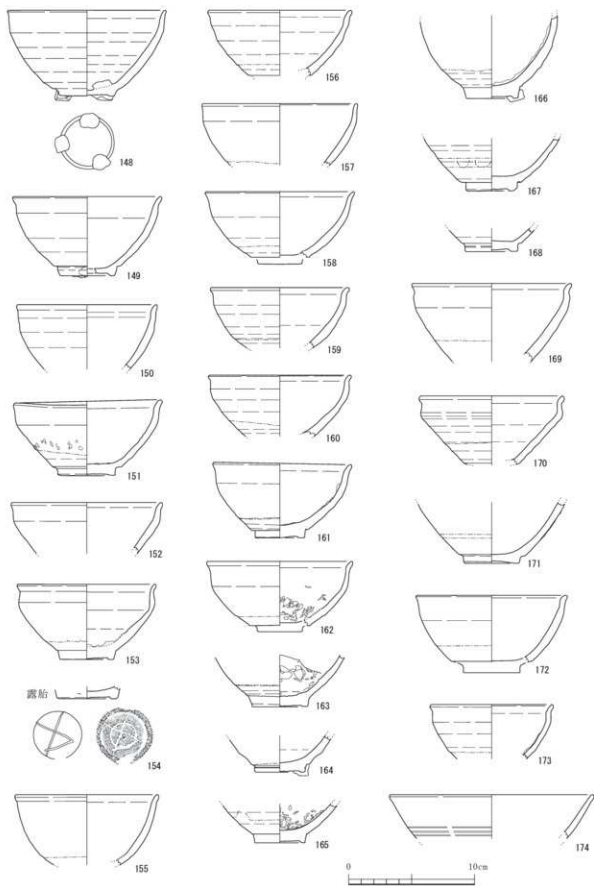


图 34 勘介 1 号窯跡出土遺物 1 (1/3)

の形態であるが、無軸の製品である。

灯明皿 (236～238)は口径約11.0cm、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁端部は細く尖る。内面に同心円状のナデの痕跡を残す。底部は平底で糸切り痕を残す。無軸、焼き締めの製品である。

そのほか、**鉄軸小坏**(239)は底面に輪トチが付着する。**仏納具**(240)は内外面に鉄軸が掛かる。**茶入**では、広口の壺形のもの(241, 242)は外面底部付近を除いて鉄軸が掛けられる。小瓶形のもの243は内外面に鉄軸、244は外面底部を除いて錆軸に灰軸が掛けられる。以上の資料の器壁はやや厚く、文琳形(245)の胎土は緻密で薄手のもので内外面に鉄軸が掛けられる。

鉢では**襦鉢**(246～263)がある。口縁部に縁帯を形成するI類であり、端部を内側に折り返すII類は含まれていない。口径28.0～30.0cmのものが中心で、平底の底部より体部は下方から直線的に開き、端部は屈曲して上方に短く立ち上がる。内面の底部から体部にすり目もち、口縁にユビオサエによる浅い注口がつく。口縁端部の形状により細分が可能である。端部上端に面を形成して尖る形状となるもの(249, 250)、先端を丸くするもの(264, 267)、屈曲部外面と口縁端部の先端をともに丸くするもの(251～254)、口縁端部がわずかに上方に引き上げられ、厚みをもち断面形状が三角形を呈するもの(248, 255～259, 263)、口縁端部下方が引き出されて縁帯を形成するもの(260, 261, 262)に分けられる。内外面に錆軸が掛けられる。内面と外面底部の周囲に重ね焼きに用いられたヨリ土のトチ付着痕が認められる。

筒形容器(264～270)には、内面は露胎で体部上方に鉄軸が掛けられた広口の容器類を含めた。形状として口頭部の区分が認められる(264～266)は**口広有耳壺**の可能性があり、267は**施軸範囲**が短い。268は自然軸か灰軸が部分的に掛かるもので、口縁部には焼成前に切り取られた部分が認められる。底部外面の処理は多くが糸切り後未調整であるが、回転ケズリするもの(269, 270)がある。

そのほかに**壺・瓶類**では**鉄軸徳利**(274)、**鉄軸壺**(275)、立会調査時に出土した**鉄軸耳付水注**(276)がある。古瀬戸後期段階の**鉄軸根来形瓶子**(271, 272)と**鉄軸花瓶**(273)や、尾張型第12型式に比定される**山茶碗**(277～279)は搬入品と考えられる資料である。

窯道具として使用された皿形態には、**挟み皿**(291～299)と製品と溶着関係が認められる**縁軸腰折皿**(280～290)がある。挟み皿は口縁成形、平底で糸切り後未調整であり、体部は下方からわずかに丸みもって開く。器壁の厚さがほぼ一定で口縁端部を丸くするもの(291, 297～299)、端部を面取りするもの(292)、先端部が細くなるもの(294)、端部が外反して端反となるもの(293, 295)がある。径11.0～12.0cm、器高約2.5cmに収まる。292, 295は口縁部付近に灰軸が掛かる。他は無軸であるが、内面底部中央に一条のクシ描きがつけられているものがある(296～299)。縁軸腰折皿は口径11.0～12.5cm、器高2.0～2.5cmであり、削り出し輪高台が付く。高台の幅や高台脇の削り幅もやや広く、成形・調整が全体に粗雑なものが多い。290は口径9.6cmと小振りで底面に端反皿(205)が溶着する。300は腰折皿の底部片で、周縁に打ち欠きが認められる。

皿鉢は全て口縁成形による平底、筒形の形態である。側面下端が面取される形であり、底部径は口縁部より若干小さくなる場合が多い。底面は糸切り後未調整であるが、底面に円形の窓が開くもの(305, 309)もある。口径11.0cm前後の小型のものでは、器高約4.0cmの広い平底となるもの(307, 317)、径6.0cm前後の底面が突出して器高が4.0～6.0cmとなるタイプ(302, 303, 319)がある。中型(310～314, 316, 329)のものは、口径15.0～17.0cmの間に複数の規格を含む。器高は9.0cm～10.5cmであり、底面に穿孔のある305, 309のタイプに限り、器高が7.0cm以下と低くなっている。より大型のものでは口径18.0cm～22.0cmのサイズがみられるが、器高は8.6cm～10.6cmと中型サイズのものを超えることは少ない。中型の皿鉢内部に横ピンの付着するもの、側面下端付近に2ヶ所程度の焼成前穿孔のある個体

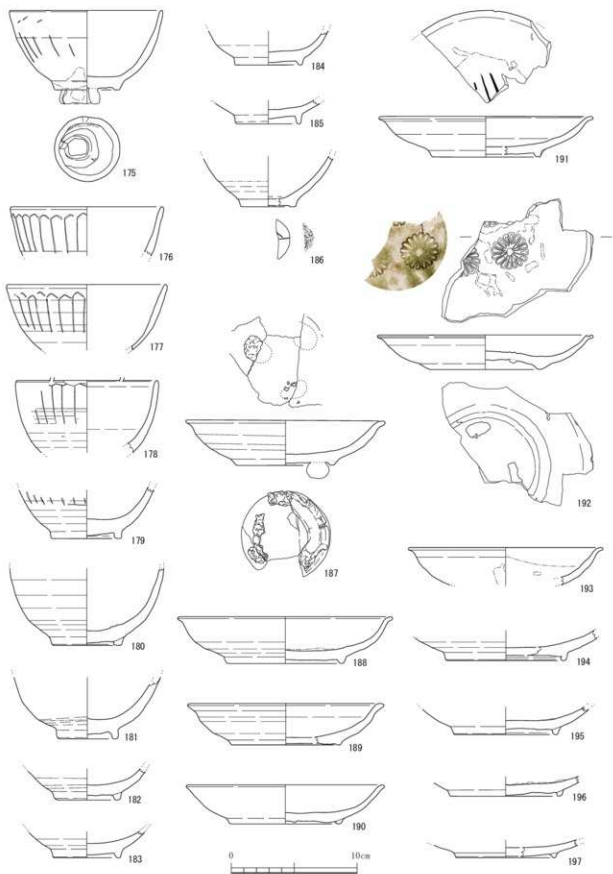


图 35 勘介 1 号窯跡出土遺物 2 (1/3)

(315, 333, 335) もみられる。

匣鉢として使用されたと考えられる径20.0cm～14.0cm程度の転用品がある。匣鉢の底部を利用したものは(337, 338)や大型の挟み皿のような形態(339)があり、いずれも周縁部を打ち欠いて整形し、片面には自然軸が厚く付着している。(340は溶着した3枚の円板状のもので、錆軸が厚く固着しているためこちらに提示したが、北山窯に関連する資料の可能性ある。) そのほかに匣鉢内で使われた**長脚ピン**(341～344)は長さ4.6cm～5.5cm、幅3.0cm弱である。**団子トチ**(345, 346)や様々な**輪トチ**(347～352)がある。断面形が長楕円になるやや高い347, 348のタイプが丸碗(175)に底面に付着している。**焼台**(353, 354)は径9.0cm～11.0cm、厚さ5.0cm～6.0cmで付着物も多く窯材に転用されていた可能性がある。**小分炎柱**の部材(355～359)は径9.9cm～11.5cm程度の円柱状のもので、残存長は最大で18.2cmであった。複数個を積み上げ、ヨリ土を用いて接着した。激しい被熱の痕跡は一方に偏って認められる。ハリ(360)は匣鉢の間を支持したようで、曲面の痕跡が残る。激しい被熱の痕跡は一方に偏って認められる。

なお、以上の窯道具類に認められる種々の窯印等については、勘介1・2号窯の両者を併せて後述することにする。

(2) 勘介2号窯(図51～図69)

勘介2号窯に伴う物原から出土した資料では、碗類では天目茶碗・丸碗・平碗があり、皿類には端反皿・稜花皿・ソギ丸皿・丸皿・灯明皿・稜皿・内禿皿・折縁皿・土師器皿がある。鉢類では搦鉢・焼締大皿・片口がある。壺・瓶類では徳利・有耳壺・壺・耳付水注がある。鍋・釜類では釜・内耳鍋がある。このほかに筒形容器・水指・桶・小坏・茶入・香炉・蓋・狛犬がある。窯道具では匣鉢・挟み皿・トチ・焼台・小分炎柱がある。

天目茶碗(361～397)には、口唇部のくびれが比較的小さく、削り出し輪高台のもの(364, 365)が含まれるが、主体となるのは体部が下方から緩やかな丸みをもって開き、上方が直立し、一旦くびれて口縁部がわずかに外反するものであり、体部下方はやや直線的となり高台脇を削りこむ。内反高台で高台下端を面取りするものがある。多くは外面体部下方から高台にかけて錆軸が掛けられるが、薄く掛かるもの(366, 367, 374, 389, 390, 394)、露胎となるもの(365, 391, 392, 393)がある。釉薬は内面および外面上方に鉄軸が掛けられるほか、銅緑釉の製品(385～387)がある。

丸碗(398～401)の体部は、下方から丸みをもって開きつつ上方は直立する。器壁は底部付近で厚みをもち、口縁にむかってやや薄くなり、端部は丸く調整される。高台は断面形状が方形となる貼り付け高台が主となる。398, 399は外面体部に鉤形の印花文を連続して蓮弁文が表現される。釉薬は内外面全体に灰軸が掛けられる。402は口縁端部が外反する**端反碗**の形態であり、削り出し輪高台が付く。体部外面には丸ノミによるタテ方向の削りが入る。内面および外面上方に黄瀬戸釉が掛かる。**平碗**(406～407)は口径15.0cm～17.0cm、405, 406は内外面に鉄軸、405は体部外面下方に錆軸が掛かる。407は無軸で焼締である。

端反皿(408, 409, 411～421, 441, 442)の体部は下方から丸みをもって立ち上がり、口縁端部が緩やかに外反する。口径8.2cm～9.2cmと11.0cm前後のものがある。内外面全体に灰軸が掛けられるもののほか、鉄軸の製品(409)、ほぼ無軸のもの(408, 415, 416, 418～421)、鉄軸・灰軸が掛かるもの(441)がある。内面底部中央に印花文が捺される。全体の形状が不明な灰軸皿422～424も含めると、菊花文、かたばみ文をはじめ7種ほどがある。

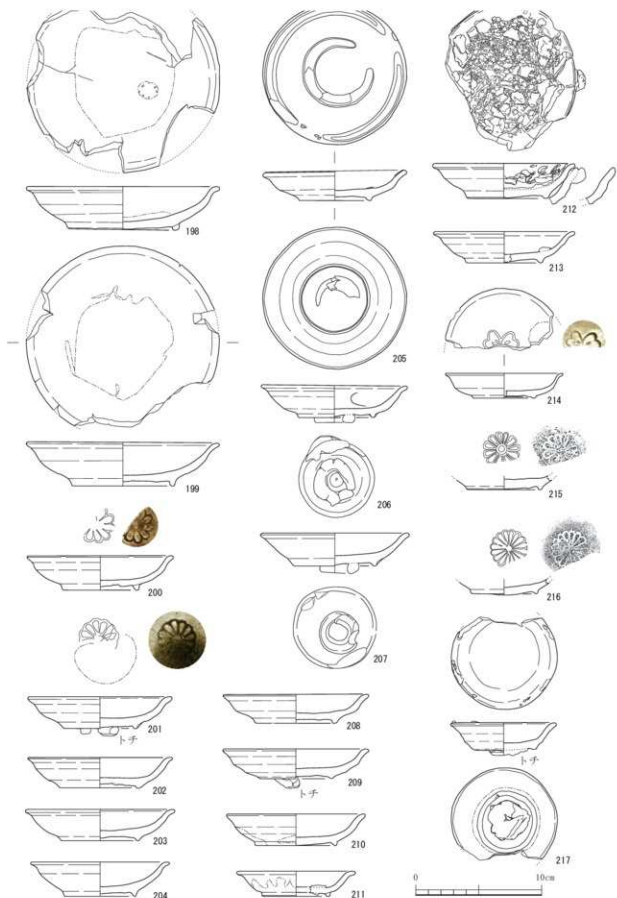


图 36 勘介 1 号窯跡出土遺物 3 (1/3)

稜花皿 (410) は口径 10.7cm、器高 2.5cm、体部は下方から丸みをもって立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部付近は器壁が薄くなり先端はやや尖る。口縁内面に波状文を描き、内面底部中央に菊花の印花文がつく。高台は断面形が逆三角形に近い貼り付け高台で、内外面に灰軸が掛かる。底面に輪トチが付着する。

ソギ丸皿 (425～432) 口径 10.0cm～11.0cm、器高 2.9cm 前後の丸皿の形態である。内面体部と底部の境を沈線でごく区切り、その間に丸ノミによる削りを連続して文様とする。内面底部は沈線による二重円の中央に菊花の印花文を配する。内外全面に灰軸が掛けられる。底面に輪トチ痕が残るものが多い。428 は体部外面にも刻文(ソギ)が入る。433 はソギ丸皿とは異なる施文技法で、体部内側に刻み目文様がめぐり、内外面に灰軸が掛けられる。

豆皿 (434) 口径 6.0cm、器高 1.3cm、削り込み高台で内外面全体に灰軸が掛けられる。内面底部に印花文(八輪文)が捺される。

丸皿 (443～459, 478) は断面形が逆三角形に近い貼り付け高台と削り込み高台 (448, 450) がある。釉葉は灰軸 (443, 447, 451, 453, 457)、鉄軸 (446, 448, 459, 458)、鉄軸に灰軸流し (454, 456) 銅緑釉 (449, 478) があり、444, 445, 452 は無軸である。内外全面に施軸されるもののほか、内外面の底部を露胎とするもの (453, 457, 458) がある。平均的な口径は、灰軸の製品で 10.0cm 前後、鉄軸の製品ではやや大きく 11.0cm 前後に分布するとみられる。457 は内面底部に、458 は外面高台内に窯印とみられるヘラによる十字の線刻がある。

灯明皿 (435～440) は口径 9.5cm 前後、器高 2.3cm 前後、糸切り後未調整の平底、無軸の焼締陶器である。体部は丸みをもって立ち上がり、内面にヘラまたはコテ状工具によるナデ痕が螺旋状に残る。

稜皿 (460～472) の口径は 10.5cm 前後、器高は 2.0cm～2.5cm、体部は下方から直線的に開き、口縁部はそのままのびて端部を丸くするもの、わずかに外反するものがある。削り込み高台であり、内外前面に鉄軸が掛けられる。ただし 465 は平底の形状であり、小型の口径 8.5cm の 466 は灰軸が掛けられる。

内壳皿 (455, 473, 474) は内面底部に凸部をもつ。473 は糸切り後未調整の平底で無軸。455, 474 は丸皿の形状で断面形が逆三角形の貼り付け高台がつく。内外面底部を除いて施軸する(鉄軸に灰流し)。

折縁皿 (475～477) の体部は下方からやや直線的に立ち上がり、口縁部は外面する。削り込み高台 (476)、貼り付け高台 (477) の両者がある。釉葉は灰軸 (475, 476) のほか、銅緑釉 (477) がある。このほか口クロ成形の土師器皿 (479) がある。

縞鉢 (482～504) 体部は下方からやや外反気味に開き、口縁部に縁帯を形成する I 類 (482～499) と端部を内側に折り返す II 類 (500～504) に分けられる。縞が内外全面に掛けられるが、底面部分は薄くなっている。口径は 27.0cm～29cm が多く、30.0cm を少し超えるもの、17.0cm 程度の小型のもの (504) などがある。I 類では口縁部形状から細分が可能であり、口縁部上端が上方に引き上げられるもの (482, 483)、口縁部断面形状が三角形になるもの (484～488)、口縁部縁帯の下端が引き出されたもの (490～492, 494)、口縁部縁帯の上下が引き出されたもの (496～499) などに概ね分けられる。II 類口縁部の折り返しの幅は 1.5cm～2.1cm 程度であり、上面が少し盛り上がるものとわずかに凹むものがある。

焼締大皿 (480, 481) 480 は口径 25.4cm の口縁部で丸みをもって開く体部から続き端部は面をもち断面方形となる。底部の 481 は底径 12.3cm、断面が方形となる削り出し高台であり、外面下半は回転ヘラ削り調整、高台脇を削り込む。無軸の焼締陶器である。

耳付水注 (505) は平底で、やや扁平な胴部がすぼまり口頸部が上方へ立ち上がる。口縁部は丸く玉縁状となる。双耳の位置を結ぶ方向に注口がつけられる。底面を除き鉄軸が掛けられる。508 は耳付き、509 は平底の小型の壺で底面を除き外面に鉄軸が掛けられる。

徳利 (506, 507, 510～512) 506 はラップ状に開く口縁部で内外面に鉄軸が掛けられる。507 は耳付きの

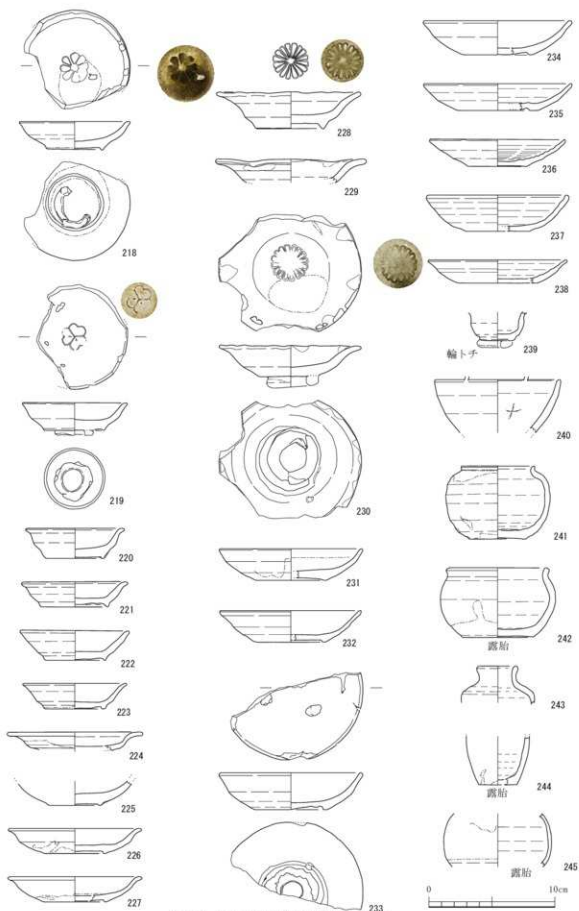


图 37 勘介 1 号窯跡出土遺物 4 (1/3)

徳利で体部上方に鉄軸が掛けられる。510～512は平底の徳利底部で底面を回転削り調整する。胴部下方まで鉄軸が掛けられる。

口広有耳壺（513～516）は口径に対して胴部径が若干大きく、短い口頸部と肩部をもつ。口縁端部がやや厚く、内側または外側に張り出し面をなす。513,514は口径13.2cm、耳付きで内面口縁部から外面にかけて鉄軸が掛けられる。515,516は耳の有無は不明で、内面口縁部から外面に掛けて錆軸が掛けられる。いずれも口縁部上端の軸は拭き取られる。水指（517）は口径11.0cm、断面方形の口縁部からつづく体部は一旦すぼまり、くびれる形状と思われる。外面に灰軸が掛かる。

筒形容器は、長胴の器形と口径に対し器高の低いものに分けられる。長胴の（518～530）は口径15.0cm～18.0cm、器高17.0cm～18.0cmのものが多い。口径と胴部最大径の差がほとんどなく、胴部中ほどから平底の底部にむかって若干径が小さくなる。口縁端部付近が厚みをもって面をなし、内側または外側に若干張り出すものがある。ロクロ成形で外面体部下半は回転ヘラ削り調整、外面底部は回転削り調整するものが多く、糸切り後未調整のもの（521）もある。内面と外面体部下から底部に錆軸、内面口縁部付近から外面下方近くまで鉄軸が掛けられる。口縁端部の軸は拭き取られる。器高の低い（531～547）は、口径11.0cm～13.0cm、器高8.0cm～9.0cmのものが中心であり、ほぼ同径の平底から体部が上方に立ち上がる形状である。口縁端部が若干厚みを増して面をなし、外側に若干突出するもの（533,537,543）がみられる。ロクロ成形、糸切り後未調整の平底であり、基本的な形状と調整は匣鉢とほぼ同様である。釉薬は、内面口縁部から外面体部上半にかけて鉄軸が掛けられる。口縁端部は拭き取られている。

片口は、体部が底面から直立するもの（548,549）、丸みをもって立ち上がり、口縁が上方へのびるもの（550,551）がある。548は口縁端部が外折して縁帯をなす。口縁に一ヶ所つく注口はヘラで撫で付けられている。内外面に厚く鉄軸が掛けられる。549は面をなす口縁端部が内傾する。口縁にはナデ調整により注口がつく。内面口縁部から外面体部に鉄軸が掛かる。口縁端部の軸は拭き取られる。550は口縁部がわずかに内傾する。口縁端部をのぞき鉄軸が掛かる。551は口縁にナデ調整により注口がつく。内外面に鉄軸が施され、口縁端部にヨリ土が付着する。555は陶製の鍋耳の部分。鉄鍋を模したような丁寧な作りで内外面に鉄軸が掛かる。

内耳鍋は内外面に錆軸が掛かる。半球形に近い体部の丸いもの（552）は内耳の痕跡があり、外面に煤が付着する。口縁部が内湾するもの（553）も内耳の痕跡が残る。**釜**（554）の錆軸のかかる胴部片は球形に近い。外面に煤が付着する。耳部分とその下側の火覆いの痕跡が認められる。

筒形香炉（556,557）は体部は下方からわずかに外反して立ち上がり、口縁部は内側に折れて張り出す。端部は丸く調整される。556は口径10.0cm、器高6.7cm、底部外縁に三足が貼り付けられる。体部には3条の楕円沈線がめぐり、内面口縁部から外面体部下方にかけて灰軸が掛けられる。558は底径5.0cm、底面は露胎で中央付近にかけて少し突出する。外縁に三足がつく。

茶入（559～564）では、559は白色の胎土の小壺で錆軸に灰軸が掛けられる。黄瀬戸軸か、560の播磨茶入は古瀬戸後期IV新段階に比定される。緻密な胎土が用いられている。561,562は肩衝、563は丸壺、564は内海と思われる。いずれも胎土は緻密であり外面に鉄軸が施される。565は鉄軸の小坏で底部に輪トチが付着する。

狛犬（566,567）手捏ね成形の2個体とともに呼行の像である。軟質の焼成不良品でタタラ成形の台座底面を除き全体に鉄軸が施されていたとみられる。像固定用の心棒の痕跡であろうか、台座底面にはそれぞれ約1.5cmの孔が焼成前に開けられ、本体内部に向かって細くなる深さ約5.0cmの凹みがつくられている。566は台座を含めた高さは9.7cmであり、台座前部、前足、左耳の部分を欠損する。567は同じく9.6cm、左目、前足、後足、尾の部分を欠損する。

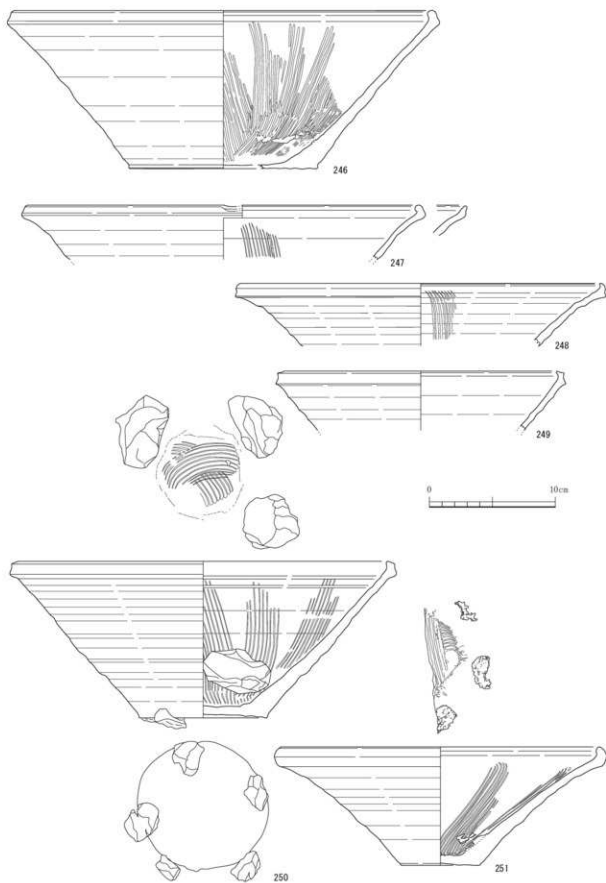


图 38 勘介 1 号窯跡出土遺物 5 (1/3)

桶 (568～571) としたものは、口径約 34.0cm に対して器高約 11.0cm となるロクロ成形の浅い筒形の容器であり、直立する体部外面に 3 条の箍の表現がめぐらされている。568 は外面底部を除き濃い鉄釉が掛けられ、口縁端部は拭き取りされている。569～571 はやや軟質の焼成で錆軸である。これまでに桶として知られている器種の形状と異なり器高が低く、壺と呼ぶべき形である。572 は甕の口縁部である。口縁が外折して幅 1.8cm 程度の縁帯を形成する。内外面に鉄釉が掛けられる。

そのほか、用途不明製品 (574) は径 15.0cm、高さ 4.0cm の蓋のような陶器製品であり、ただし器壁は厚く中央に径約 2.0cm の円形孔が開いている。上面となる側は蓮弁と端部付近にも装飾的な表現が加えられ、黄釉が掛けられている。165 は御深井軸の丸皿で貼り付け高台、高台付近のみ露胎で裏面に製品が溶着している。

575～579, 583, 584 は溶着資料である。575 は上から灰釉ソギ丸皿・輪トチ (2 重)・挟み皿 (端反, 無釉) / 灰釉端反皿 (総釉)・輪トチ・匣鉢と重なっている。576 は天目茶碗・トチ・鉄釉丸皿 (削り込み高台, 総釉)・輪トチが重なったものである。577 は灰釉皿・輪トチ・挟み皿 (無釉) / 灰釉稜皿 (総釉)・輪トチ・匣鉢が重なっている。灰釉稜皿よりも上の挟み皿の径は大きい。578 は上面に灰釉皿の一部が付着している。579 は匣鉢底面に灰釉碗がつぶれて付着している。583 の匣鉢口縁上端にはひも状のヨリ土が付着する。匣鉢の内側体部には灰釉皿口縁の一部が付着し、底部には輪トチが付着する。匣鉢の外面底部には、灰釉皿 / 縁釉皿 (灰釉) / 灰釉端反皿 (総釉)・輪トチが重なっている。584 は匣鉢内面底部に多数のトチを配置したもので、トチ上端はそれぞれ傾きが異なり、小型の製品を置いたと考えられる。匣鉢には器壁の薄い製品の一部分が付着が認められる上、トチの間隔は狭く小瓶や茶入などを置いた可能性が考えられる。

挟み皿 (580～582) はロクロ成形、糸切り後未調整の平底の皿で、体部は下方から丸みをもって開き、口縁部はわずかに外反して先端を丸くする。口径は約 11.5cm、やや小型のもので 9.0cm を測る。

匣鉢蓋 (585～587) も基本的には挟み皿と同様の成形・調整技法である。585 は口径 16.7cm の匣鉢蓋であり凹面にユビナデによる窯印がある。586 の口径は 18.8cm、587 の口径は 14.2cm で下面に灰釉皿が付着する。

匣鉢 は全てロクロ成形による筒形の形態を基本とし、底面は糸切り後未調整の平底である。側面下端が面取される形であり、底部径は口縁部より若干小さくなる場合が多い。小型のもの (588～602) は、口径 10.0cm～12.0cm、器高約 4.0cm で腰は丸く、底部がやや突出して径 6.0cm～7.0cm の底面を形成する。ただし 602 は口径 12.2cm、器高 5.2cm で体部下半が丸く器高の高いタイプであり、底面に 1ヶ所穿孔がある。中型以上のものでは複数の規格があり、口径・器高の差が小さく側面形が正方形に近いものでは、口径 12.0cm 前後、器高 8.0cm のもの (603, 604) と、口径 14.0cm～17.4cm、器高 9.6cm～10.7cm のもの (607～611, 622) に分けられ、後者では内面に横ビン、長脚ビンの付着または痕跡のある個体が認められた。器高が相対的に低く側面形が長方形に近いものでは、口径約 14.0cm～15.0cm、器高 5.0～6.0cm のもの (605, 606)、口径約 17.0cm～21.0cm、器高 6.8cm～9.2cm のもの (613～618) に概ね分けられる。

焼台 (623, 624) は径 9.0cm～10.0cm、高さ 4.3cm～6.2cm であり、降灰、ヨリ土などが付着する。626 は匣鉢間を支持するハリは、採取されたのはこれ 1 点のみである。長さ 6.3cm、中央付近の径は約 2.5cm。トチ類では**団子トチ** (625)、**輪トチ** (627～631) がある。**長脚ビン** (632～635) は長さ 4.7cm～6.3cm である。以上の窯道具類に認められる種々の窯印等について、勘介 1・2 号窯の両者を併せて後述する。

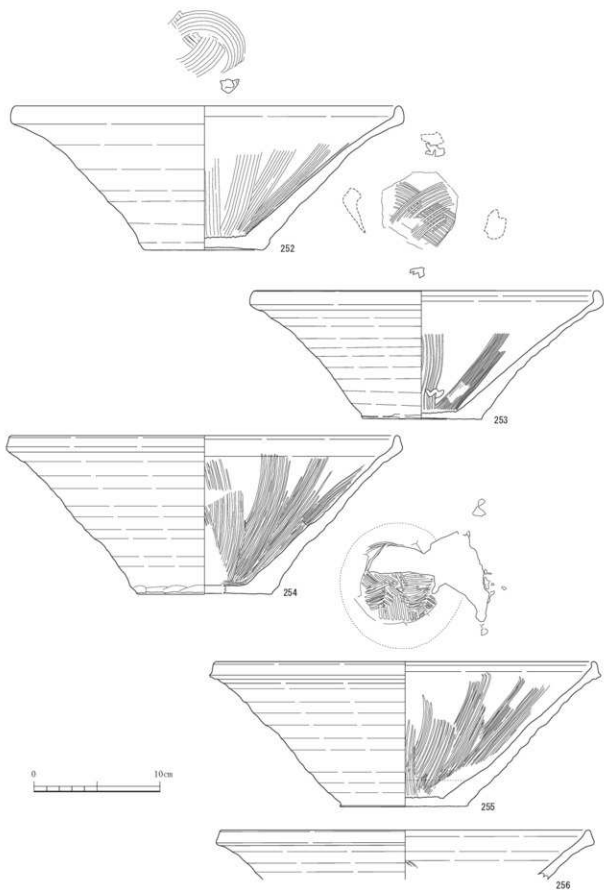


图39 勘介1号窯跡出土遺物 6 (1/3)

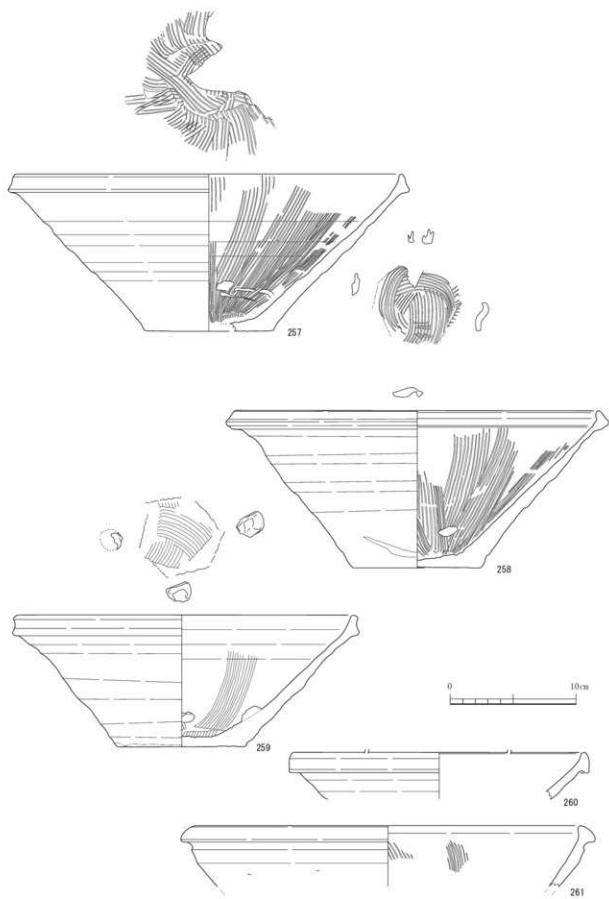


图 40 勸介 1 号窯跡出土遺物 7 (1/3)

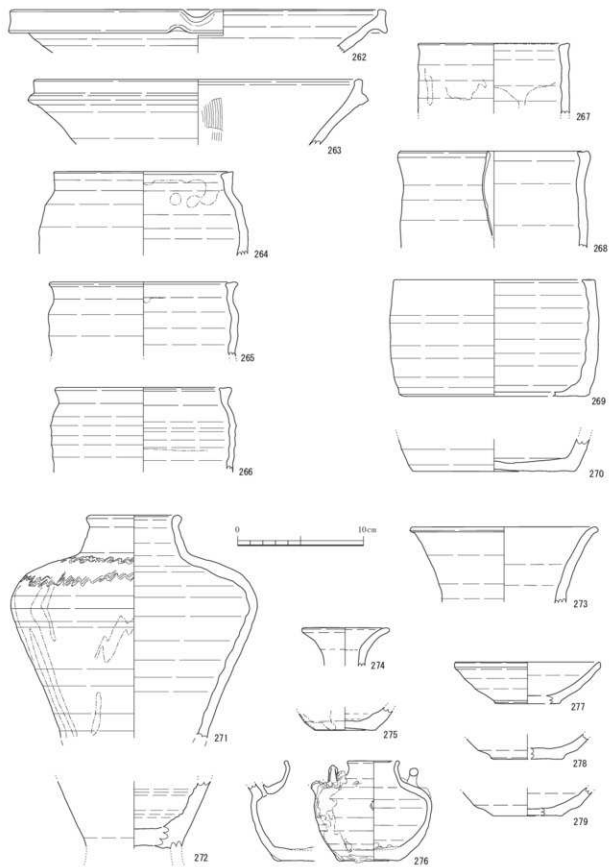


图 41 勘介 1 号窟跡出土遺物 8 (1/3)

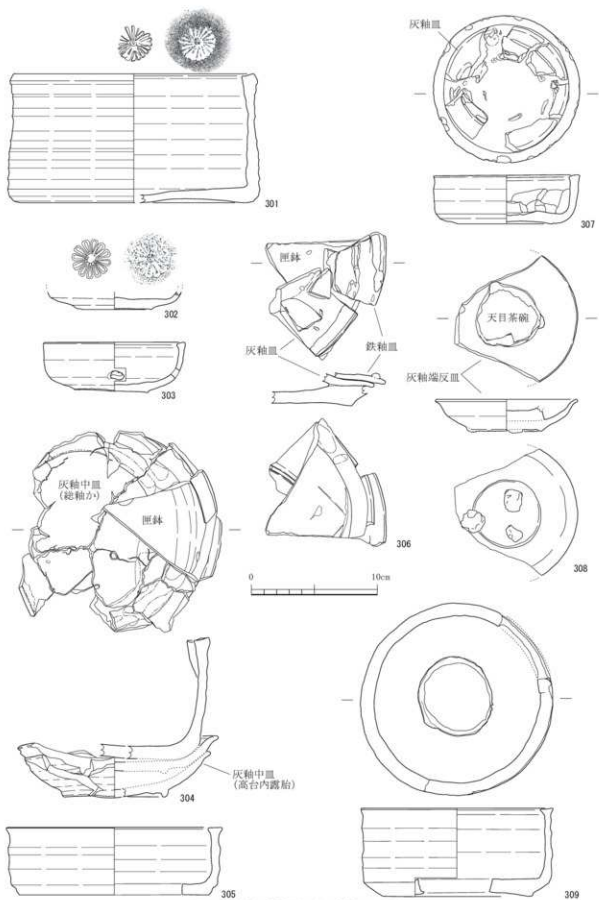


図 43 勘介1号窯跡出土遺物 10 (1/3)

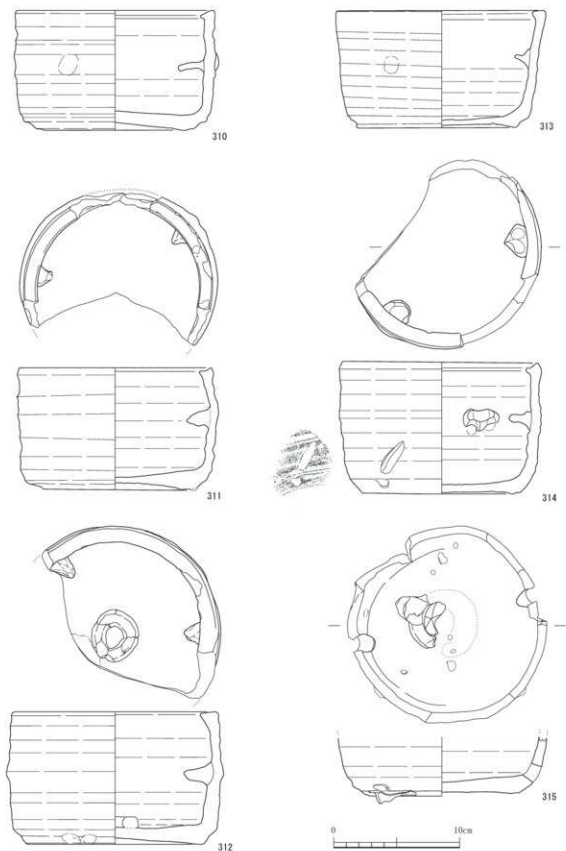


图 44 勘介 1 号窟跡出土遺物 11 (1/3)

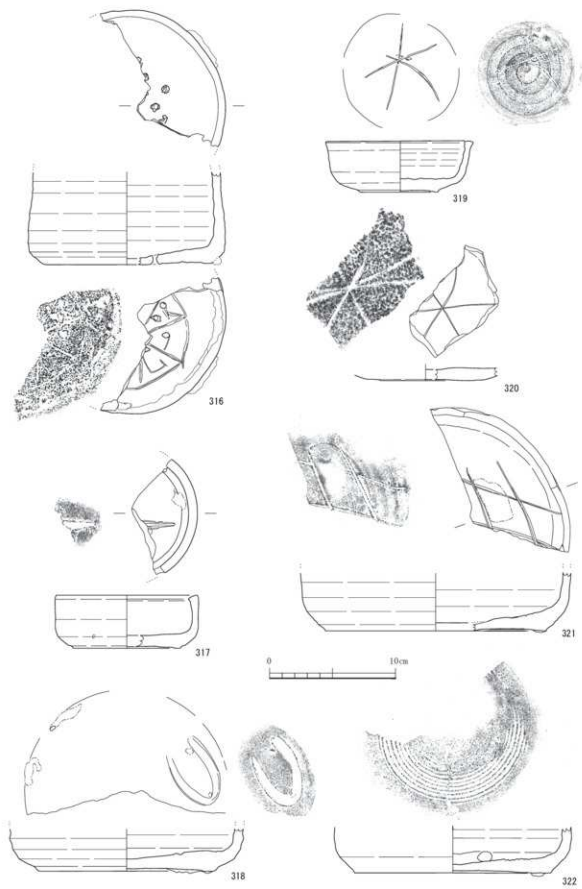


图 45 勘介 1 号窑跡出土遺物 12 (1/3)

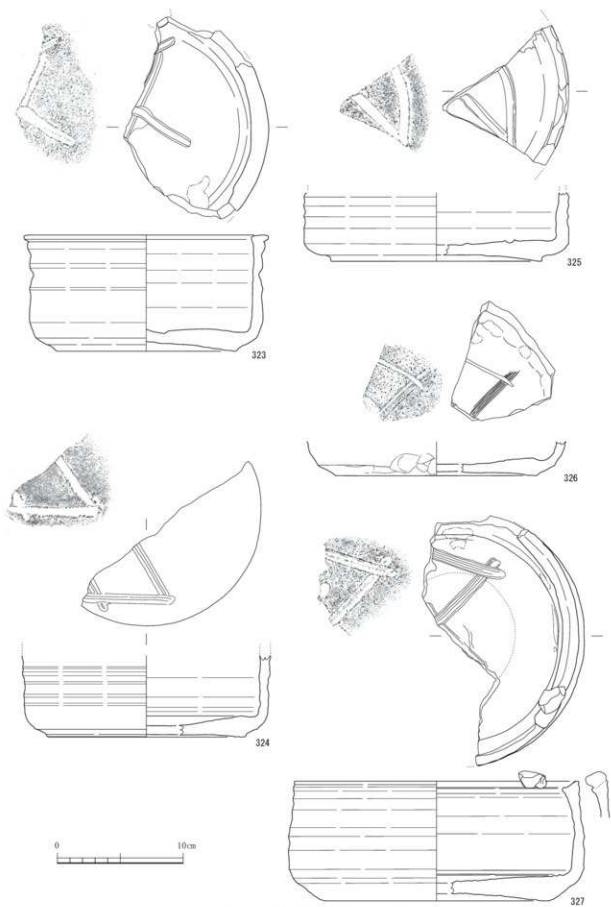


图 46 勘介 1 号窯跡出土遺物 13 (1/3)

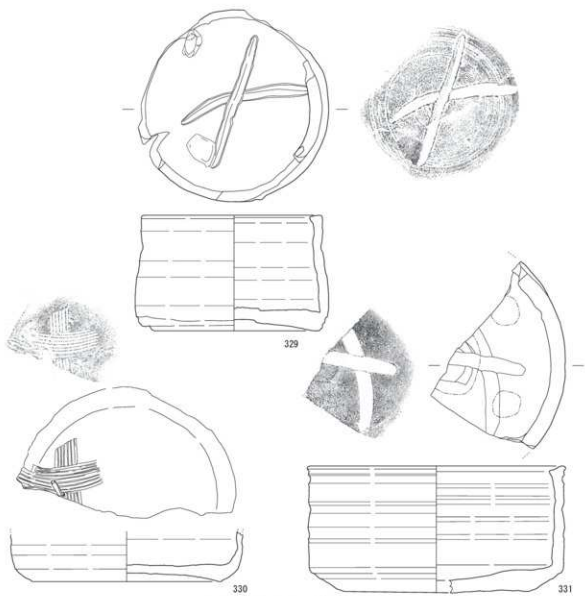
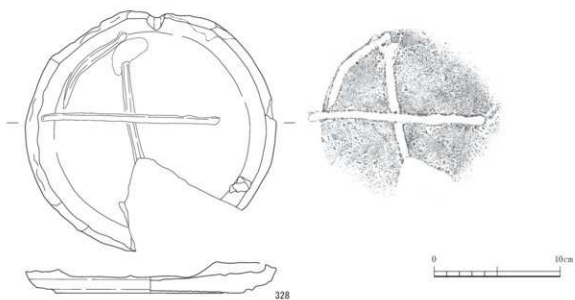


圖 47 勘介 1 号窯跡出土遺物 14 (1/3)

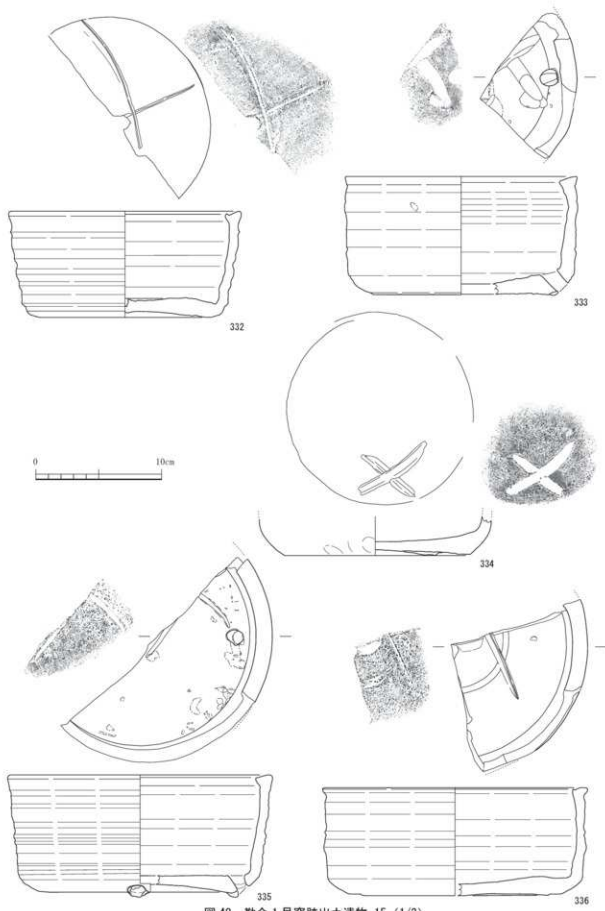


图 48 勘介 1 号窯跡出土遺物 15 (1/3)

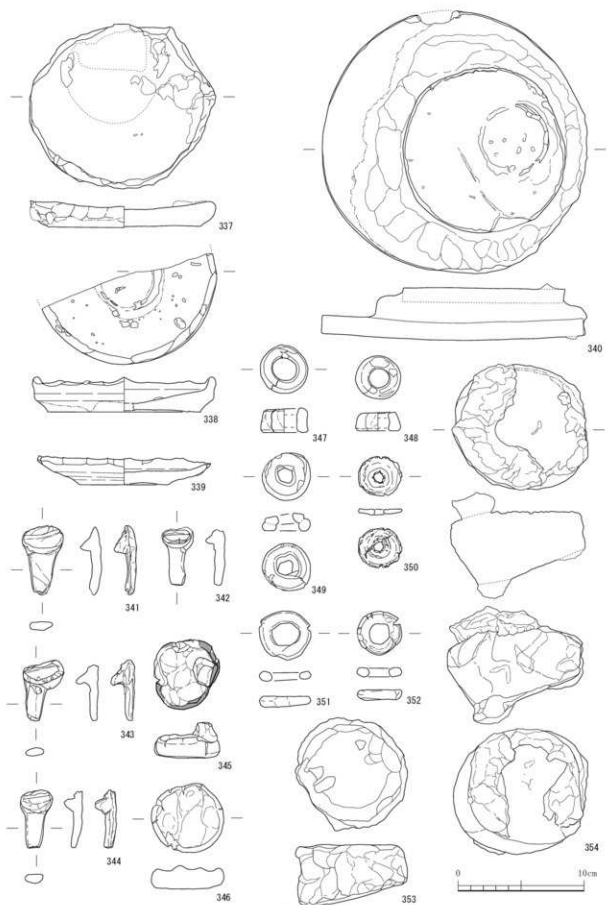


圖 49 勘介 1 号窯跡出土遺物 16 (1/3)

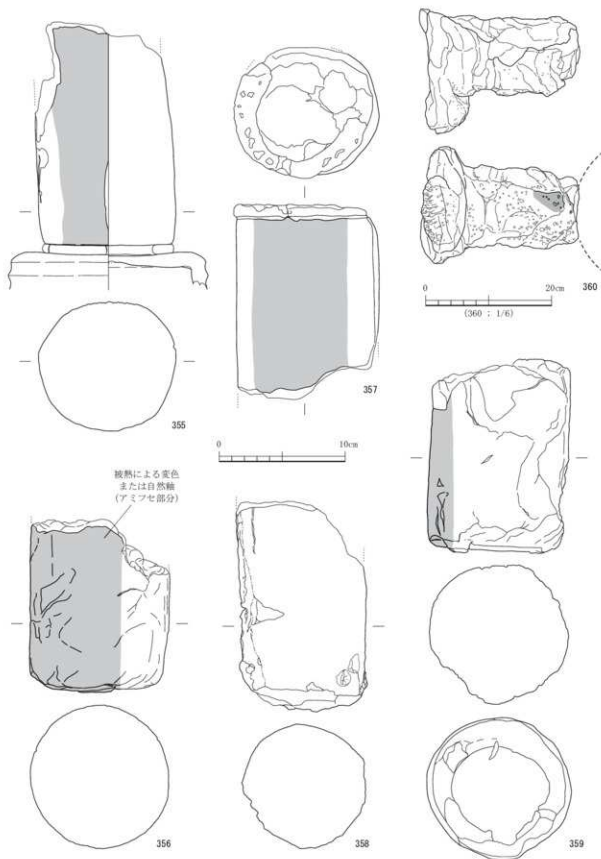


図50 勘介1号窯跡出土遺物 17 (1/3, 1/6)

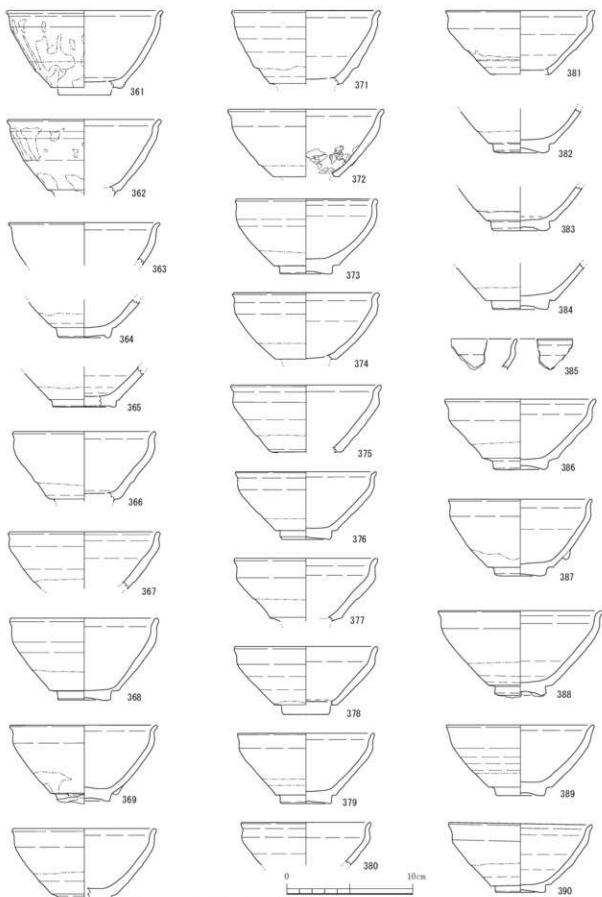


图 51 勘介 2 号窯跡出土遺物 1 (1/3)



图 52 勘介 2 号窯跡出土遺物 2 (1/3)

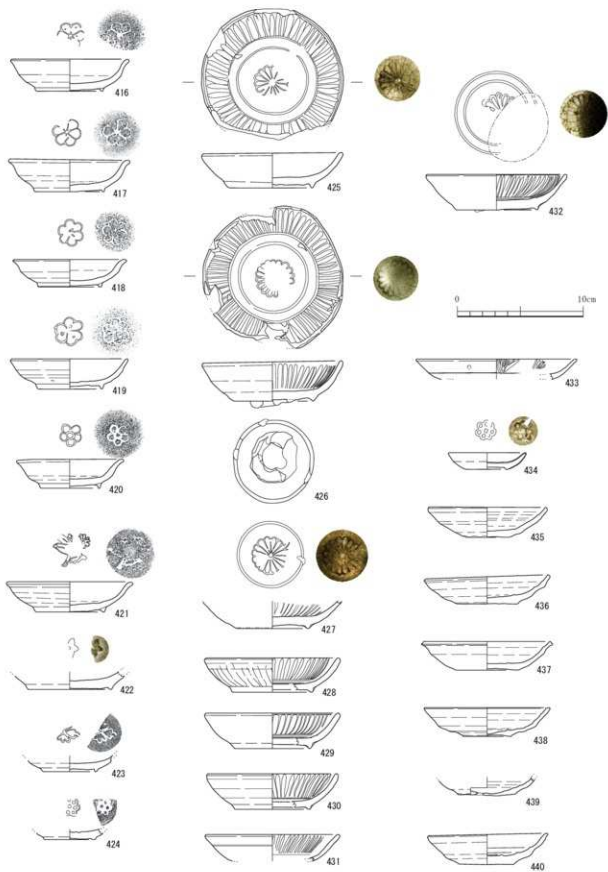


图 53 勸介 2 号窯跡出土遺物 3 (1/3)

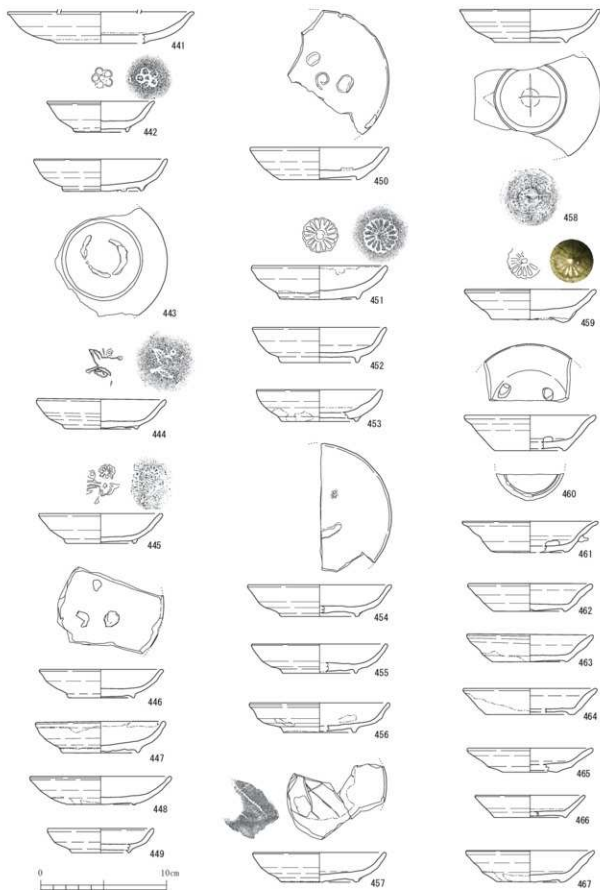


图 54 勘介 2 号窯跡出土遺物 4 (1/3)

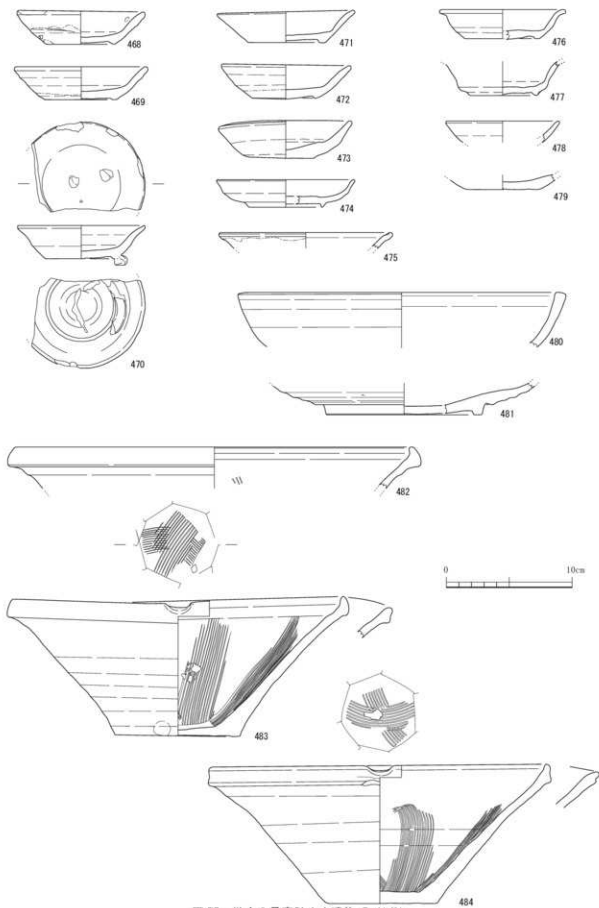


图 55 勘介 2 号窯跡出土遺物 5 (1/3)

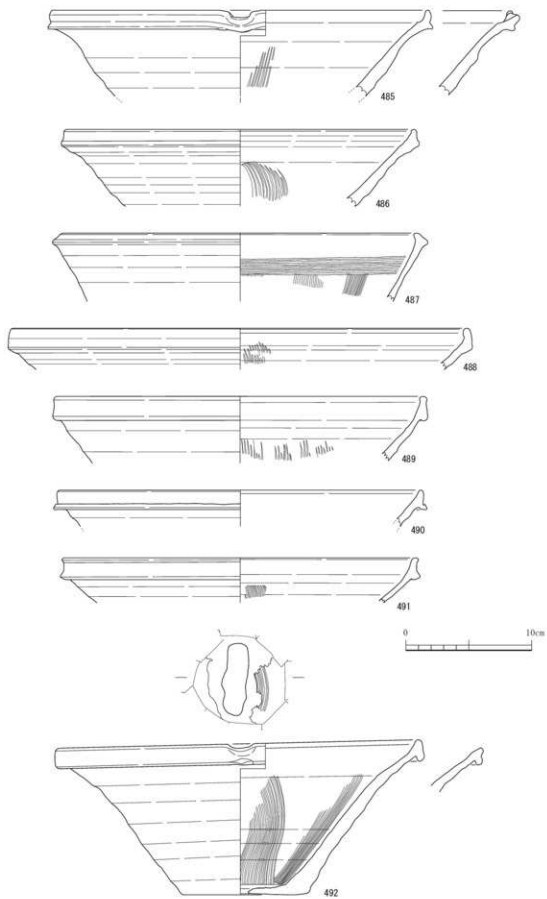


图 56 勘介 2 号窯跡出土遺物 6 (1/3)

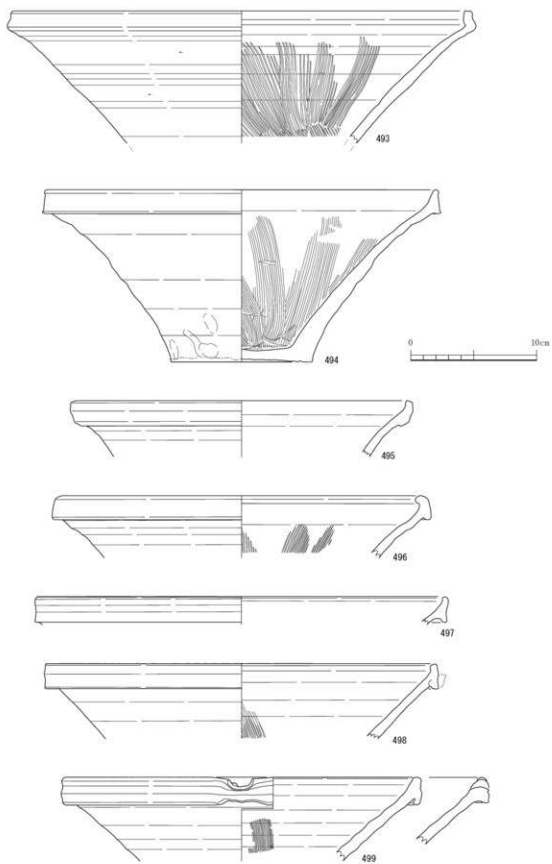


图 57 勘介 2 号窟跡出土遺物 7 (1/3)

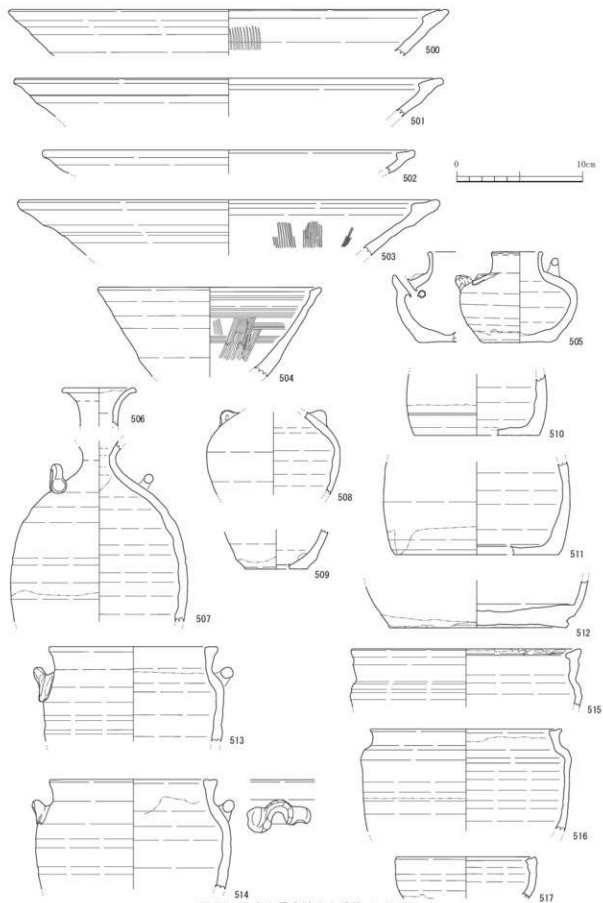


图 58 勘介 2 号窯跡出土遺物 8 (1/3)

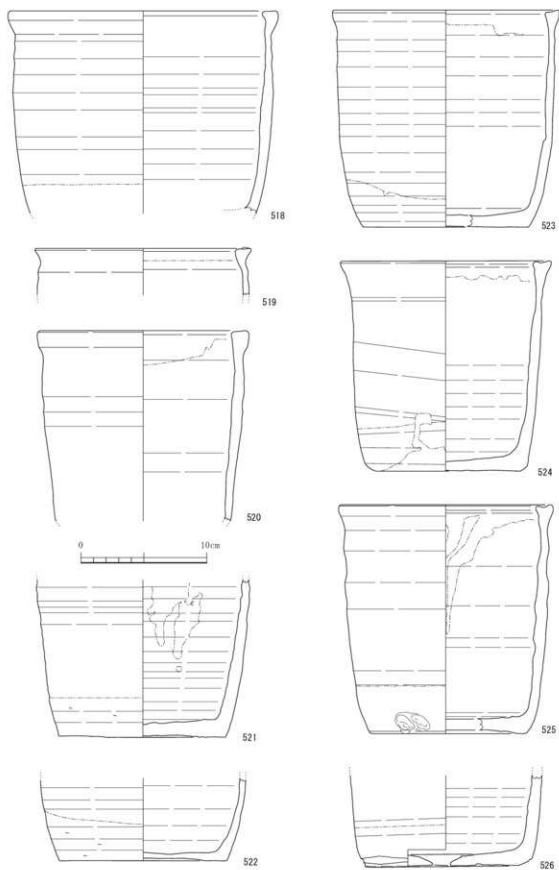


图 59 勘介 2 号窟跡出土遺物 9 (1/3)

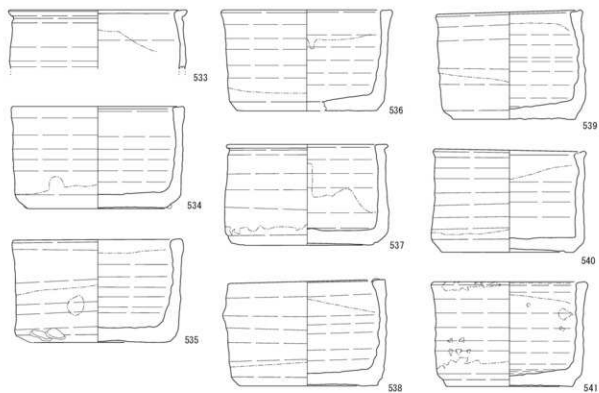
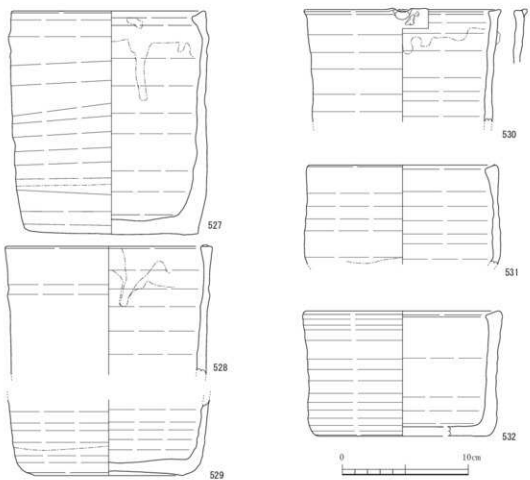


图60 勘介2号窯跡出土遺物 10 (1/3)

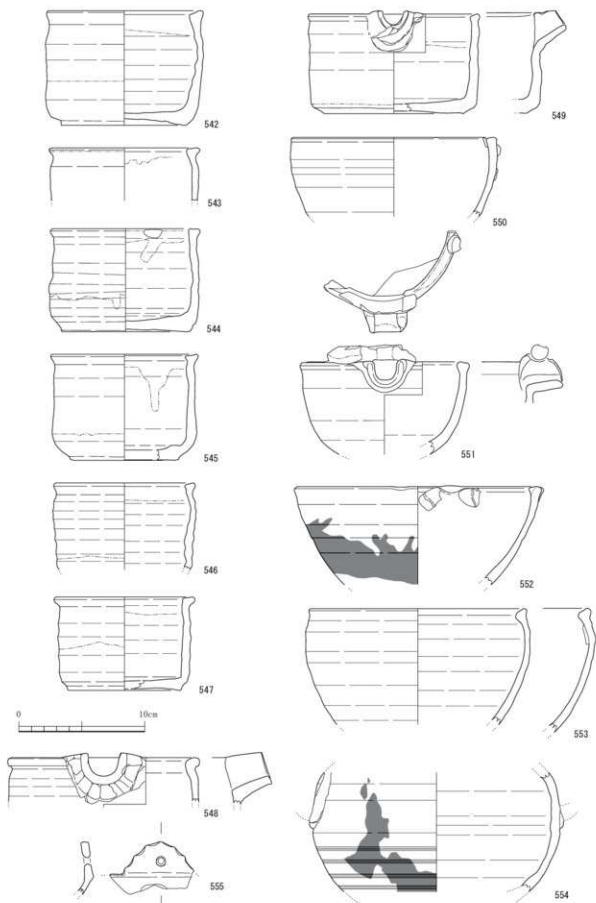
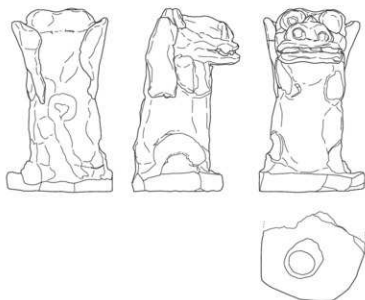
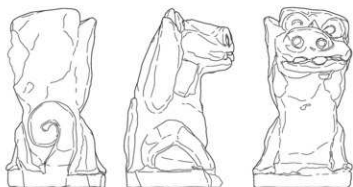
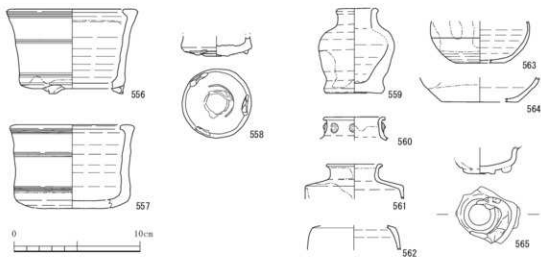


圖 61 勘介 2 号窯跡出土遺物 11 (1/3)



567
 图 62 勘介 2 号窯跡出土遺物 12 (1/2, 1/3)

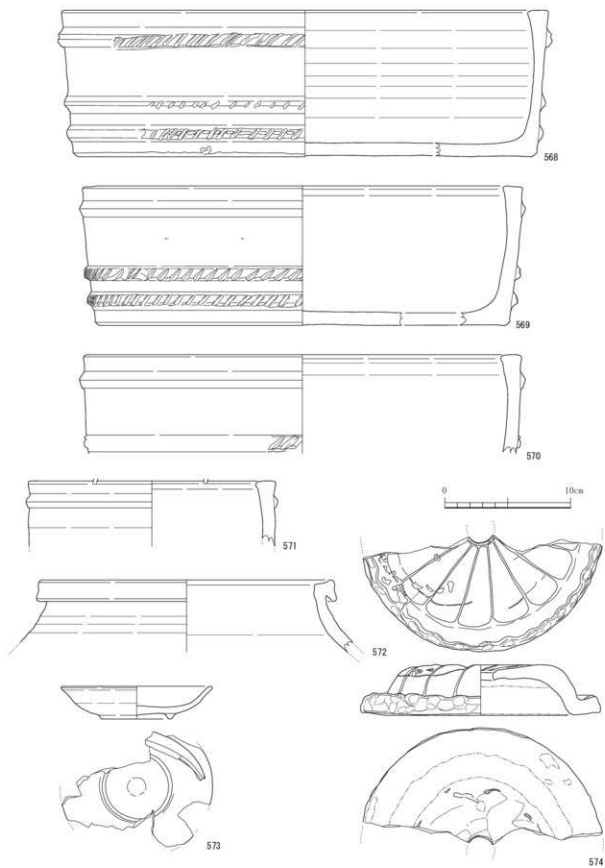


图 63 勘介 2 号窯跡出土遺物 13 (1/3)

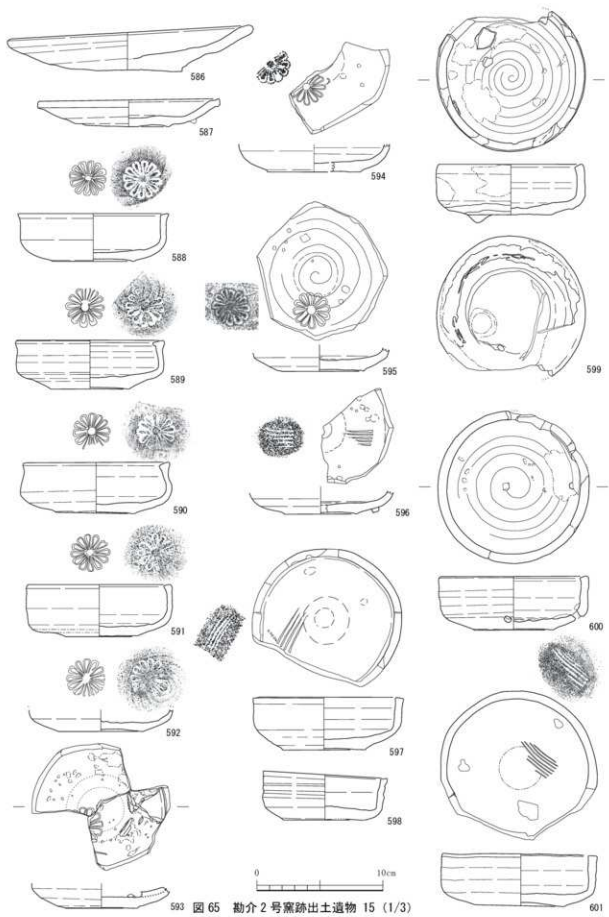


圖 65 勸介 2 号窯跡出土遺物 15 (1/3)

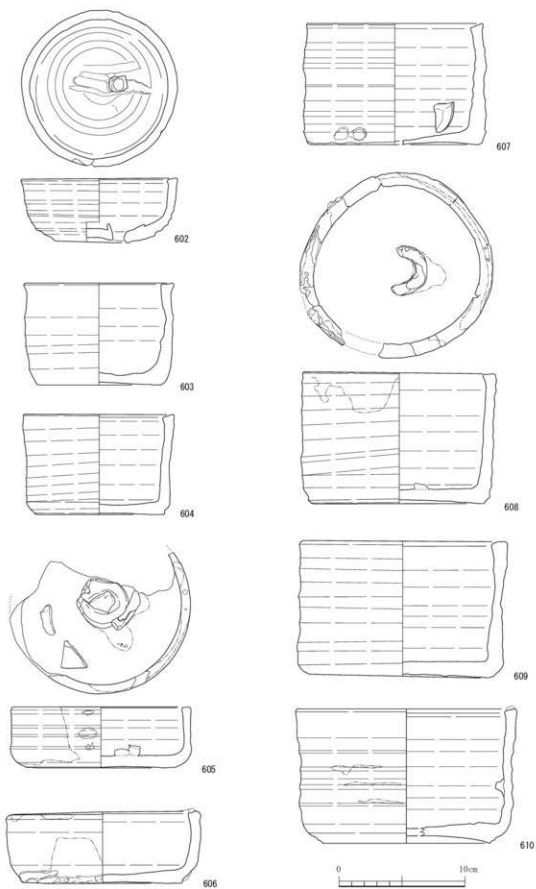


图66 勘介2号窯跡出土遺物 16 (1/3)

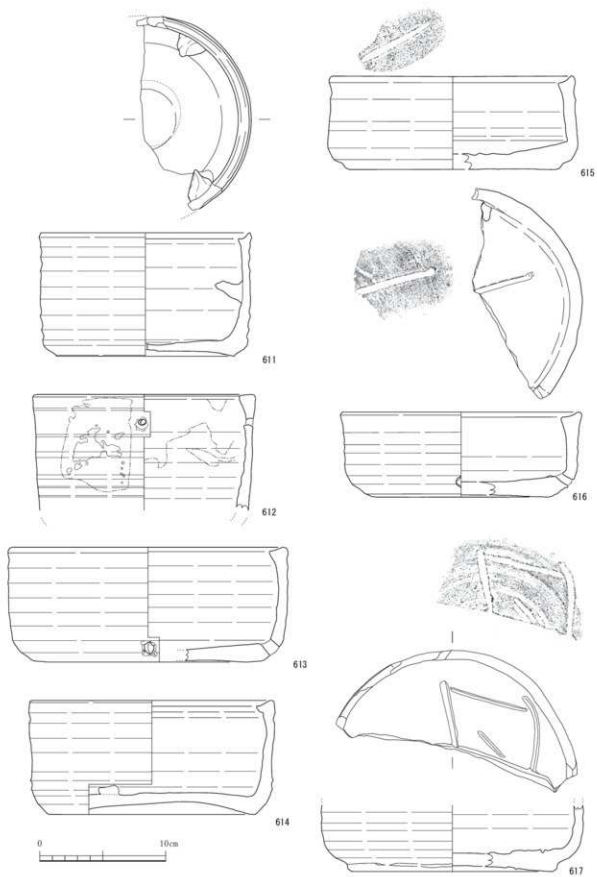


圖 67 勘介 2 号窯跡出土遺物 17 (1/3)

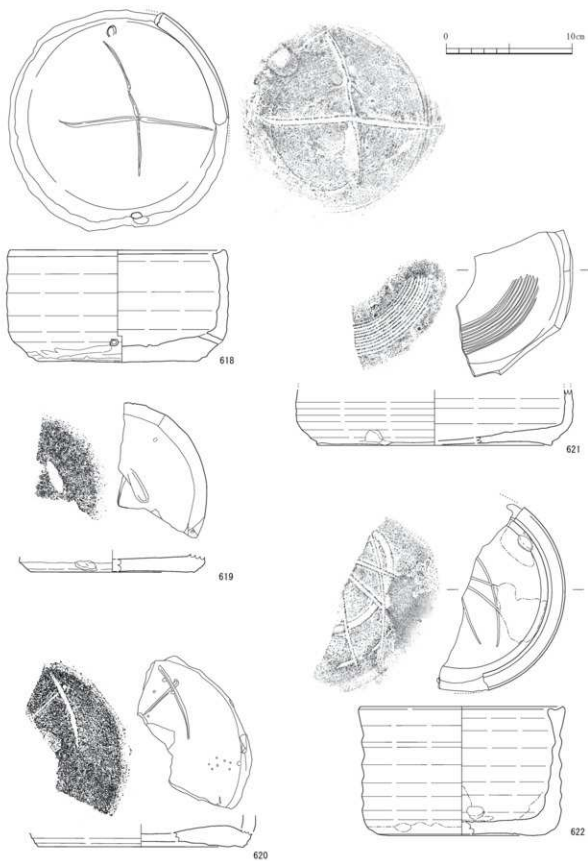


图 68 勘介 2 号窯跡出土遺物 18 (1/3)

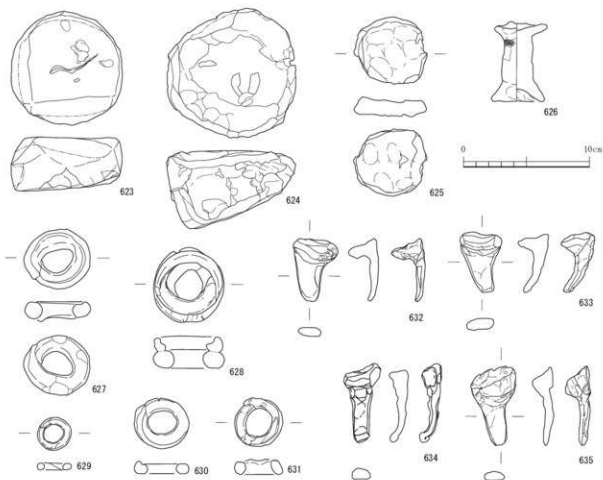


図 69 勘介 2 号窯跡出土遺物 19 (1/3)

(3) 勘介窯跡出土資料の窯印について

ここでは製品と窯道具に刻まれた標識（記号）について取り上げる。勘介 1 号窯の製品に刻まれたものは少なく、焼成後の線刻のある天目茶碗（154）も高台部分は錆釉の掛からない無釉のものが用いられている。挟み皿（296～299）は内面に一文字の櫛描きがある。匣鉢では、内面底部に菊花の印花文を捺すもの（301）、ヘラ状工具で線刻、あるいはユビナデして描くもの、櫛描きで十字（330）や半円を描くもの（322）がある。このうち線刻は数種類があり、ヘラとユビナデでは十字と菱形が共通する。線刻などの位置は小型の匣鉢を除くと底部の中央ではなく、周縁寄りであることが多い。匣鉢（316）は特異なものであり、複数の小孔が穿孔されている上にヘラによる線刻がおそらく底部外面全体に及び、内容も文字を含む複雑なものとなっている。勘介 2 号窯の製品では、天目茶碗高台（394～397）にみられる線刻は 3 種類がある。ほか灰軸丸皿（457）の内面底部と鉄軸内禿皿（458）の高台内に十字の線刻がある。窯道具では匣鉢蓋（585）の降灰のない凹面側に一文字のユビナデがある。小型の匣鉢では、内面底部に菊花の印花文（588～595）が捺されるほか櫛描きされるもの（596, 597, 601）がある。中型以上の径の匣鉢では、内面底部にヘラ状工具で線刻、あるいはユビナデして描くもの、櫛描きで 1/4 程度の円弧を描くもの（621）がある。線刻類は 4 種類があり、ヘラとユビナデで共通する記号がない。位置は底面を広く使うものと周縁に偏るもの両者がある。

参考文献

藤澤良祐編 2018『大塚窯跡群 弥七田窯跡第 1・2 次発掘調査概要報告書』愛知学院大学文学部歴史学科

第4章 自然科学分析

北山窯跡の焼成室床材の材料分析

藤根 久・米田恭子（パレオ・ラボ）

1. はじめに

北山窯跡は、愛知県瀬戸市落合町地内に位置する近代～現代の連房式登窯跡である。ここでは、この連房式登窯の床土の材料について、薄片の偏光顕微鏡観察を行い、粘土の種類と砂粒組成等の特徴を調べた。

なお、比較試料として、窯跡から出土した製品素焼き資料についても同様に分析を行った。

2. 試料と方法

試料は、北山窯跡の床土1点と、比較試料として陶器製品素焼き5点の、合計6点である（表4）。

表4 北山窯跡床砂・製品の胎土分析試料

分析No.	種別	試料No.	時期	遺構等	グリッド	位置	層位
1	窯の床土	—	近代～現代	北壁（民家側）	2SHZ17	—	第19層（20層直上）
2	陶器製品素焼	225	近代～現代	北壁	B8	T-26	下層
3	陶器製品素焼	300	近代～現代	物原	B7	T-27	最下層
4	磁器製品素焼	67	近代～現代	表土	D7（参照）	—	最下層
5	磁器製品素焼	275	近代～現代	物原	C7	—	下層
6	磁器製品素焼	449	近代～現代	物原	Z27	—	—

薄片の作製では、まず岩石カッターを用いて2×3cm程度を切り出し、恒温乾燥機により乾燥させた。次に、全体にエポキシ系樹脂を含浸させて固化処理を行い、スライドガラスに接着した。薄片作製面を平滑にして、エポキシ系樹脂で再度、固化処理を行い、精密岩石薄片作製機およびガラス板を用いて研磨した。その後、厚さ0.1mm程度に切した後、さらに研磨して、厚さ0.02mm前後の薄片を作製した。最後に、仕上げとしてコーティング剤を塗布した。

作製した薄片は、偏光顕微鏡を用いて観察し、薄片全面に含まれる微化石類（放散虫化石、珪藻化石、骨針化石など）、鉱物、大型砂粒の特徴、その他の混和物等について記載を行った。記載した微化石類や岩石、鉱物の各分類群の特徴は、以下の通りである。

[珪藻化石]

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、大きさは10～数百 μm 程度である。珪藻は、海水域から淡水域に広く分布する。小杉（1988）や安藤（1990）は、現生珪藻に基づいて環境指標種群を設定し、具体的な環境復原を行っている。ここでは、種や属の同定が可能な珪藻化石（海水種、淡水種）を分類した。

[骨針化石]

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状である。海綿動物の多くは海水産であるが、淡水産も23種ほどが知られ、湖や池、川の底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。したがって、骨針化石は水成環境を指標する。

[植物珪酸体化石]

主にイネ科植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、長径約10～50 μm 前後である。一般にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本やスゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在する。

[胎子化石]

胎子は、直径約10～30 μm 程度の珪酸質の球状粒子である。水成堆積物中に多く見られるが、土壌中

にも含まれる。

[石英・長石類]

石英および長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち、後述する双晶などのように、光学的な特徴をもたないものは石英と区別するのが困難な場合が多く、一括して扱う。

[長石類]

長石は、大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）に見られることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石は、花崗岩などケイ酸分の多い深成岩などに産出する。

[雲母類]

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で、風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状に割れやすい。薄片上では、長柱状や層状に見える場合が多い。花崗岩などケイ酸分の多い火成岩に普遍的に産し、変成岩類や堆積岩類にも産出する。

[輝石類]

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼ではビール瓶のような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。ケイ酸分の少ない深成岩類や火山岩類、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩類に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼では緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてケイ酸分の少ない火山岩類や、ケイ酸分の最も少ない火成岩類や変成岩類中にも産出する。

[角閃石類]

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は、細長く平たい長柱状である。閃緑岩のような、ケイ酸分が中間的な深成岩類や変成岩類、火山岩類に産出する。特に、斑れい岩で多く含まれる。

[ガラス質]

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄く湾曲したガラス（バブル・ウォール型：記載ではバブル型と略す）や、小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山噴火により噴出した噴出物（テフラ）である。

[片理複合石英類]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、片理構造を示す岩石である。雲母片岩や結晶片岩、片麻岩、粘板岩などと考えられる。

[砂岩質・泥岩質]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、基質部分をもつ。構成粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質、約0.06mm未満のものを泥岩質とした。

[複合石英類]

複合石英類は、石英が集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は、粗粒から細粒までさまざまである。ここでは便宜的に、粒径が0.01mm未満の粒子を微細、0.01～0.05mmの粒子を小型、0.05～0.10mmの粒子を中型、0.10mm以上の粒子を大型と分類した。微細結晶の集合体である場合には、堆積岩類のチャートなどに見られる特徴がある。

検討した床土および素焼き陶器製品の胎土は、粘土中に含まれていた微化石類により、a) 淡水成粘土、b) 水成粘土、c) その他粘土、の3種類に分類された(表3)。以下では、それぞれの粘土の特徴について述べる。

a) 淡水成粘土 (1 試料：分析 No. 1)

分析 No. 1 の床土中には、淡水種珪藻化石が特徴的に多く含まれていた。なお、陸域指標種群の珪藻化石も含まれていた。

b) 水成粘土 (2 試料：分析 No. 2、分析 No. 3)

これらの陶器製品素焼の胎土中には、少ないものの骨針化石が含まれていた。また、陸域指標種群の珪藻化石も含まれていた。

c) その他粘土 (3 試料：分析 No. 4～No. 6)

これらの陶器製品素焼の胎土中には、水成環境を示す微化石類は含まれていなかった。

3.2. 砂粒組成による分類

本稿で設定した分類群は、構成される鉱物種や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域の地質を特徴づける源岩とは直接対比できない。したがって、胎土中の鉱物と岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。特に、深成岩類を構成する鉱物は粒度が大きいため、細粒質の砂粒からなる胎土の場合には、深成岩類の推定が困難な場合が多い。

ここでは、比較的大型の砂粒と鉱物群の特徴により、起源岩石の推定を行った(表6)。岩石の推定では、片理複合石英類が片岩類(A/a)、複合石英類(大型)が深成岩類(B/b)、複合石英類(微細)などが堆積岩類(C/c)、斑晶質・完晶質が火山岩類(D/d)、凝灰岩質や結晶度の低い火山岩が凝灰岩類(E/e)、流紋岩質が流紋岩類(F/f)、ガラス質がテフラ(G/g)である。

検討した床土および陶器製品素焼の粘土中の砂粒組成は、表4の組み合わせに従うと、6 試料すべてが、1) 主に深成岩類(B群)、に分類された。以下に、B群の砂粒組成の特徴について述べる。

1) 主に深成岩類からなる砂粒組成 (B群：6 試料)

これらの床土および陶器製品素焼の粘土中には、複合石英類(大型)または複合石英類が含まれ、他起源の堆積岩類などの岩石片が非常に少ないか、あるいは全く含まれていなかった。また、斜長石(双晶)やカリ長石(パーサイト)、ジルコンなどを伴っており、深成岩類と推定された。

3.3. 床土および陶器製品素焼の粘土の特徴

検討した床土および陶器製品素焼の粘土は、粘土中に含まれていた微化石類により、淡水成粘土(1 試料)、

表7 岩石片の起源と組み合わせ

		第1出現群						
		A	B	C	D	E	F	G
		片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ
第2 出現 群	a	片岩類	Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
	b	深成岩類	Ab	Cb	Db	Eb	Fb	Gb
	c	堆積岩類	Ac	Bc	cc	Ec	Fc	Gc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd	dd	Ed	Gd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De	EE	Ge
	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef	Gf
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Eg	Fg

水成粘土（2 試料）、その他粘土（3 試料）、の 3 種類に分類された。また、砂粒組成の組み合わせでは、6 試料すべてが、主に深成岩類（B 群：6 試料）に分類された。

連房式登窯跡の床土には、 $250\ \mu\text{m} \sim 750\ \mu\text{m}$ （最大 2.78mm）の粗い砂粒物が多く含まれていた。一方、陶器製品素焼の胎土は細粒物からなり、分析 No. 2 の砂粒物が $60\ \mu\text{m} \sim 220\ \mu\text{m}$ （最大 0.98mm）、分析 No. 3 の砂粒物が $50\ \mu\text{m} \sim 200\ \mu\text{m}$ （最大 0.83mm）で、類似した粒度分布を示す。また、分析 No. 4 の砂粒物は $50\ \mu\text{m} \sim 100\ \mu\text{m}$ （最大 0.16mm）、分析 No. 5 の砂粒物は $40\ \mu\text{m} \sim 80\ \mu\text{m}$ （最大 0.14mm）、分析 No. 6 の砂粒物は $50\ \mu\text{m} \sim 110\ \mu\text{m}$ （最大 0.25mm）で、分析 No. 4～6 は、分析 No. 2 や分析 No. 3 と比較してさらに細粒である。

連房式登窯跡の床土と陶器製品素焼の胎土では、粒度組成に違いがあるものの、砂粒の岩石組成は類似していると考えられる。

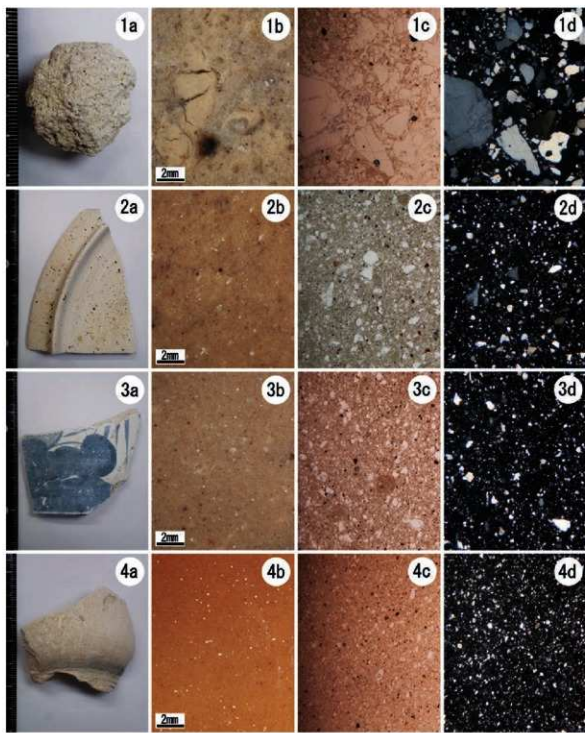
粘土については、淡水成粘土や水成粘土、その他粘土の違いが見られた。なお、分析 No. 1～3 はいずれも完形殻の陸域指標種群の珪藻化石を伴うため、採取された粘土が一時的に冠水したか、あるいはジメジメとした湿った環境に放置されたために、珪藻化石が繁茂した可能性が考えられる。

北山窯跡の周辺には、新第三紀中新世の品野層、新第三紀鮮新世の瀬戸層群瀬戸陶土層・矢田川累層が分布する。中新世の品野層は、凝灰質シルトとホルンフェルスや花崗岩からなる角礫岩で構成される。瀬戸陶土層では、下部から角礫層・珪砂層・粘土層が堆積する。矢田川累層では、下部からチャートや砂岩や花崗岩からなる砂礫層、粘土およびシルト、砂層が堆積する（瀬戸市史編纂委員会、1986）。

連房式登窯跡の床土と陶器製品素焼の胎土は、砂粒物の粒度組成に顕著な違いが見られたものの、砂粒組成には大きな違いが見られないため、同じ砂混じり粘土層が用いられたと推定される。陶器製品素焼の胎土の粒度が細かいのは、水籤が行われたためと考えられる。

引用文献

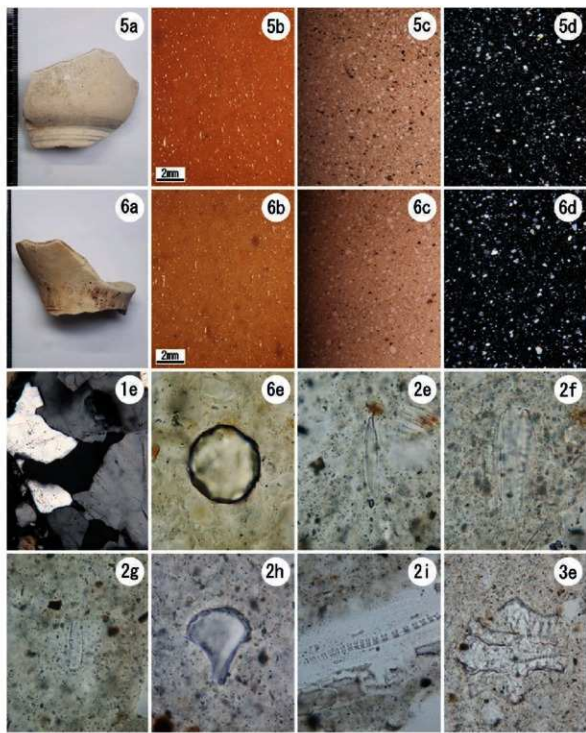
- 安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理。42（2）、73-88。
地学団体研究会・地学事典編集委員会編（1981）増補改訂 地学事典。1612p。平凡社。
小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用。第四紀研究。27。1-20。
瀬戸市史編纂委員会（1986）瀬戸市史 資料編二 自然。460p。瀬戸市。



1. 分析No.1、2. 分析No.2、3. 分析No.3、4. 分析No.4

a: 土器、b: 土器断面、c: 解放ニコル (スケール: 500 μ m)、d: 直交ニコル (スケール: 500 μ m)

図 71 分析試料と態度の偏光顕微鏡写真 (1)



a: 土器、b: 土器断面、c: 解放ニコル (スケール: 500 μ m)、d: 直交ニコル (スケール: 500 μ m)
 (スケール: 5c, 5d, 6c, 6d: 500 μ m、1e: 100 μ m、2i, 3e: 50 μ m、6e, 2e, 2f, 2g, 2h: 20 μ m)
 5a. 分析No. 5、5b. 分析No. 5 (断面)、5c. 分析No. 5 (解放ニコル)、5d. 分析No. 5 (直交ニコル)
 6a. 分析No. 6、6b. 分析No. 6 (断面)、6c. 分析No. 5 (解放ニコル)、6d. 分析No. 5 (直交ニコル)
 1e. 複合石英類 (大型)、6e. ザクロ石、2e. 珪藻化石 *Hantzschia amphioxys*、2f. 珪藻化石 *Surirella* 属
 2g. 珪藻化石 *Pinnularia borealis*、2h. イネ機動細胞珪酸体、2i. イネ型短細胞珪酸体列、
 3e. イネ粒殻の珪酸体

図 72 分析試料と態度の偏光顕微鏡写真 (2)

第5章 総括

(1) 北山窯跡

北山窯跡は愛知県遺跡地図（尾張地区）平成6年3月勘介窯（2）16C, 19～20Cと掲載されたもので、初めて調査が今回実施されたものである。調査では、窯体や平坦面の存在が確認でき、部分的ではあるものの物原の堆積も確認している。

調査地点にはすでに窯体の一部が露出しており、西側には現況地形からも平坦な区画が確認でき、窯体以外に平坦面も検出できるものと推定できた。また、窯体の上方にも平坦面と推定できる地形も確認されていた。今回の調査は急傾斜地崩壊対策工事のための工事に伴って仮設道路部分にあたる地点を対象とし、すでに一部露出する窯体とその周辺を対象としている。

調査では、調査区中央から窯体をはじめ、東側では窯脇の平坦面を検出した。さらにその東側では石垣とともに、上方（北側平坦面）への通路と推定される階段状の通路やさらに東側では道路遺構と区画溝も確認できた。また、窯体の西側にも石垣が残されており、石垣の西側では工房跡と思われる平坦面とその南側では区画と思われる石垣に直交する石列を検出した。調査区南端では断面から窯体の一部を確認した。なお、調査区北端の平坦面1の上層には、大量の板トチが堆積する物原がある。

窯体は1室（房）の焼成室とコクド・煙道・煙突を検出したが、本窯が連房式登窯であることから南側には複数の焼成室が埋没する可能性が高い。

また、調査区の北側にあたる未調査部分の現況地形を精査したところ、削平され複数の造成された平坦な部分が認められ、調査区北側にあたる地点にも窯道具や遺物の散布も見られ、通路状遺構2の北側にも複数の平坦面が認められることから、北側にあたる造成部分には物原のほか平坦面群が存在する可能性が高い（図73）。

通路状遺構1は現在の参道の下層で検出しており、地形図（図2）に本窯の東側に示された道が現在の久雲寺参道にほぼ一致しており、地図に示された道の一部と推定される。

出土遺物には、窯道具のタナイタ・ツク・ヘダテ・匣鉢があり、製品には陶器の片口・鉢・插鉢・植木鉢、磁器の碗・皿・鉢があり、いずれも近代に位置づけできる。このほかの遺物には、干し棚の台石がある。窯体は当初一般的な連房式登窯で、上端部にはコクドと呼ばれる煙道部（煙り出し）が付属していた構造と考えられ、末端部の窯体北側には下層の物原が堆積する。その後、操業期間の途中で物原の上に窯体の末端部を延長し、煙突が構築された可能性が高い。煙突の下層に堆積する物原には磁器が含まれていないことと、最終段階の物原には陶器が認められず磁器製品が堆積することから、煙突の構築は磁器の焼成とかわかる可能性もある。少なくとも本窯の上部の房室では、当初は陶器が製造され、その後磁器生産に転換した可能性が高い。（松澤）

北山窯跡の調査で持ち帰った遺物の総重量を表8に示す。さらに陶器・磁器・窯道具類の重量を表9, 10に示す。ここで焼成されていた陶器製品は、主に植木鉢・插鉢・蓋物で構成されている。磁器製品は平碗を中心に、小形碗・白磁湯呑・容器が多くを占めている。このうち明治41年の銘のある小形碗D類としたものと白磁の湯呑・容器は、いずれも窯体下の盛土層に含まれ、さらに古い段階の窯体で焼成された製品と位置付けられる。

表8 北山窯跡出土遺物の重量

	平成27	平成29	合計 (g)
	(瀬戸市調査)	(東洋文庫調査)	
陶器製品	196968.7	2736.6	199705.3
磁器製品	87536.2	34544.5	122080.7
磁器+窯道具	24575.4	7943.6	32519.0
窯道具・窯材	335169.5	14305.4	349474.9

表9 北山窯跡出土陶器の主要器種

器種\重量	重量合計 (g)	陶器片重量全体に占める割合 (%)
埴鉢	60172.0	30.13%
植木鉢 (方形)	63340.4	
植木鉢 (円形・楕円形)	13895.0	
植木鉢片	4824.2	
植木鉢合計	82059.6	41.09%
鉢 (刷毛目)	19530.5	
鉢 (素焼)	497.3	
鉢 (染付)	1525.9	
鉢類	2699.2	
鉢類合計	24252.9	12.14%
蓋 (刷毛目)	15038.2	
蓋類	546.6	
蓋類合計	15584.8	7.80%
以上の主要製品の合計	182069.3	91.17%

表10 北山窯跡出土磁器の主要器種

器種\重量	重量合計 (g)	器種別明分全体に占める割合 (%)
平碗	61595.5	58.43%
小形碗 (C,E類)	3954.6g	小形碗の28.5%
小形碗 (A,B類)	6915.3g	小形碗の49.8%
小形碗 (D類)	3017.5g	小形碗の21.7%
小形碗類合計	13887.4	13.17%
湯瓶	3024.0	2.87%
湯呑 ^{*注1}	2898.1	2.75%
碗蓋	1673.8	1.59%
鉢類	2334.3	2.21%
その他の器種 ^{*注2}	19998.8	18.97%
器種が分かるもの合計	105411.9	
		湯呑のうちの57.4%
*注1 無地白磁湯呑	1664.7g	
*注2 無地白磁容器	17442.2g	その他のうちの87.2%

(2) 北山窯跡に関する聞き取り調査

北山窯跡は聞き取り調査が実施されていて、明治34年に創業し、明治35年8月15日初窯火入れであったことがすでに知られ^{※1}、出土遺物からもその操業時期を肯定できる。同様に、本地点の陶磁器製造工場が稼働していたのは戦前までと言われており、出土遺物とも矛盾はないことから、本窯の操業期間は20世紀前半と推定できる。よって、今回検出した北山窯跡の最終段階の遺情詳は昭和初期あたりに位置付けられよう。(松澤)

その後の整理期間中に得られた北山窯の関係者からの聞き取り情報を追記しておきたい。

北山窯の操業開始は創業者の記憶によると明治35年という。当時の各施設の配置では、まず、創業者自宅近くにモロ(陶房、作業場となる建物)が建てられ、モロのすぐ前には素焼窯があった。登窯(連房式登窯)は自宅から少し離れた場所にあった。当初のモロは、スレート葺きの建物が新しく造られた昭和50年頃まで使用されていた。また登窯の東側には二階建ての木造建物があった。

モロでは、「粘土作り」「素地づくり」「素焼き」「絵付け」の作業が行われていた。「釉薬づくり」と「施釉」作業についての詳細は不明であるが、おそらく「施釉」作業までがモロで行われていた。施釉された素地は窯場へ運ばれ、エンゴロ(匣鉢)に入れて窯詰めされた。登窯の脇にあった二階建て建物は、4昼夜かかる窯焼き期間の休憩やその他の作業するために使われた。

北山窯の開窯時の名称は「北山陶古園」であり、のちに「北山陶製陶所」(昭和31年以降の年)に改称された。登窯は(焼成室が)4室あり、中央の2室が「北山窯」、前後の2室は別の製陶所に貸していた。戦時中は灯火管制などがあり、操業を自粛していた。燃料に薪が使用されていた登窯の窯焼きは昭和31年に行われたものが最後となり、これ以降に石炭窯に変わった。

戦前からの北山窯を知る女性の記憶では、窯焼きの前には小割した薪を束ね、窯焼きの最中には食事の支度として「ごもくごはん」を作った。窯出しの際には、窯場から自宅まで製品を運ぶ手伝いをしたという。

なお、かつて陶器生産を行っていたとの情報は、現在の関係者には伝わっていなかったようである。

(武部)

(3) 勘介窯跡

勘介窯跡はこれまでに発掘調査は実施されていないものの以前から知られており、水野川の支流寺前川右岸丘陵の東斜面に所在していて、2基の窯体が残存するものと推定されていた^{※2}。

今回の調査では、北山窯跡の盛土中に大窯期の遺物が含まれていたことから北山窯の造成に伴って、灰

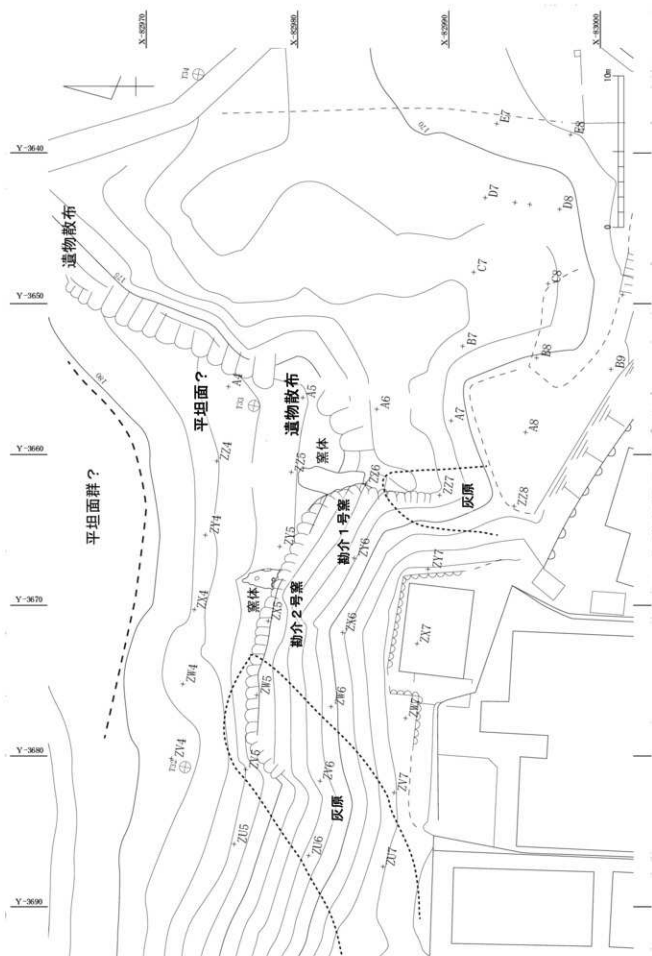


圖 74 勘介窠跡構造圖 (縮尺 1/250)

表 11 勘介窯跡出土遺物（器種・重量）

器種・窯体・重量	1号窯		2号窯		1号か2号
	重量 (g)	製品全体に占める割合	重量 (g)	製品全体に占める割合	重量 (g)
天目茶碗・小天目	3434.4	1.75%	9245.3	2.52%	
灰軸碗類	1194		1568.7		
碗類片	1033.21		843.3		
碗類合計	5661.61	2.89%	11657.3	3.18%	
灰軸皿	16716.3	8.50%	21761.5	5.94%	111.6
鉄軸皿	1363.2	0.69%	3002.4	0.82%	77.9
皿類片	19506.8		34382.5		327.0
皿類合計	43247.91	22.00%	70803.7	19.32%	189.5
大皿類	-		622.6		
播鉢	142541.9	72.66%	246668.2	67.32%	1119.3
壺（締軸）	2075.9		3410.0		
子の抱鉢類	110.1		1664.6		
瀧・釜類	559.2		4773.3		28.3
徳利・花瓶類	3424.1		7050.6		6.0
小瓶・小壺類	457.0		895.9		
筒形容器・片口・有耳意類	3171.4	1.61%	28862.3	7.33%	93.6
子の他の器種	576.3		3679.9		3.6
製品類合計	196163.81		366431.0		1767.3
罌鉢	217641.7		164649.3		635.4
製品・窯道具浴着	33335.6		44903.4		467.8
備台	12274.9		11113		
小分水柱	20385.6		2148.4		
長脚ビン	1856.6		1740.4		
輪トチ	2044.6		1066.3		
窯道具類合計	287539.0		225620.8		1103.2

原の一部が削平されたことが明らかとなった。調査では2カ所の試掘坑とも遺構は確認されず近接地に所在するものと考えていた。ところが、工事に入り立会調査の段階において斜面末端の崖下から灰原の一部を確認することとなり、崖面上端部には灰原の一部が露出することが明らかとなった。また、工事が進み立会調査が進むにつれて窯体の痕跡（1号窯）や別の窯体（2号窯）の一部を検出した。これによって、勘介窯跡には少なくとも2基の窯体があり、それぞれの灰原がわずかではあったが残存していて、これまで不明であった勘介窯跡の様相の一部が明らかとなってきた。

確認された遺構は2基の窯体と灰原であるが、2試掘坑の北側には現況地形でも比較的広い平坦面が認められる。試掘坑では堆積土に炭化物や白色粘土が含まれていて、近接地に工房跡の存在を推定した。また、東側斜面にも大窯期の遺物が散布しており、勘介窯跡の遺構が北側のみならず、さらに広範囲に分布する可能性が高い（図74）。（松澤）

窯体の位置関係から1号窯、2号窯それぞれの焼成品とした出土遺物について、大まかな器種ごとに計測した重量合計を表11に示す。1号窯と2号窯では播鉢・皿類・碗類（天目茶碗）の大窯の主要器種の割合が異なり、2号窯では筒形容器、徳利・花瓶類などその他の器種の割合の増加が目立つ。皿類の鉄軸・灰軸製品の重量比では、1号窯は1:12.3、2号窯では1:7.3であり、2号窯の方が鉄軸製品の割合が高くなっている。出土遺物全体は、大窯第1段階後半から第3段階前半までの遺物と位置付けられ、このうち特に皿類で顕著にみられる傾向として、1号窯では大窯第1段階後半、2号窯では大窯第3段階前半に比定される資料が多くなっている。したがって、1号窯→2号窯の順に操業を開始したものと推定でき、勘介窯跡の操業期間は16世紀初頭から中葉あたりに位置付けられよう。 （武部）

註・参考文献

- 1) 大瀬戸新聞社 1980『大瀬戸新聞 第3753号』
 - 2) 瀬戸市教育委員会 1997『勘介窯跡』『瀬戸市詳細分布調査報告書』
 - 3) 愛知県 2007『愛知県史 別編 窯業 2 中世・近世 瀬戸系』
- 春日美海 2010『近代の美濃陶磁-根本地の展開』多治見市文化財保護センター研究紀要 第10号
河合竹彦 2005『明治時代に焼かれたやきもの美濃印判の記年名について』瑞浪陶磁資料館研究紀要 11
瀬戸市文化振興財団企画展図録『瀬戸・美濃窯の近代』

掲載遺物一覧表 1

登録番号	種別	名称	グッド・認定		遺構・遺址	材質・その他	口径cm	底径cm	高さcm	保存率 / 1/2	
			時期-年代	出土地点						口縁部	底
1	海部	鉄ノ鉢	古代	藤上遺	%、204のF、%、207と同一期	円形小、白銅	18.0	11.0	13.0	5	12
2	海部	鉄ノ鉢	古代	藤上遺	%、204のF、%、207と同一期	円形小、白銅	-	7.8	130.7D	-	12
3	海部	鉄ノ鉢	古代	CT 1層	1層	銅胎	24.0	24.0	7.7	5	3
4	海部	鉄ノ鉢	古代	環状 (2)	1層	方形、鉄胎	縦横28.0	縦横28.0	6.0	5	3
5	海部	鉄ノ鉢	古代	CT 1層	1層	円形、白銅	20.3	15.25	10.3	10	12
6	海部	鉄鉢	古代	CT 1層	1層	円形、鉄胎	17.0	8.6	6.9	10	8
7	海部	鉄鉢	古代	1669P	惣堂 (平字面下)	円形、鉄胎	13.0	5.9	4.7	5	12
8	海部	鉄鉢	古代	CT 1層	1層	円形、鉄胎	12.0	6.1	6.05	5	12
9	海部	石口	古代	CT 1層	1層	方形	10.0	4.2	3.0	9	8
10	海部	土器	古代	CT 1層	1層	鉄胎鉄胎	17.2	10.9	6.9	3	12
11	海部	鉄胎鉄胎	古代	CT 1層	1層	円形、鉄胎鉄胎、内面の白銅	5.8	3.9	3.9	3	12
12	海部	蓋	古代	276 表上	1層	方形に鉄胎鉄胎	7.8	-	13.20	12	-
13	海部	蓋	古代	CT 1層	1層	外面に鉄胎、白銅	16.9	-	12.4	2	10
14	佐波長	銅胎・鉄胎	古代	CT 1層	1層	銅胎に鉄胎、鉄胎 (CN「志」)	縦19.5 14.2	縦14.6 4.3	10.7 7	-	12
15	海部	蓋	古代	CT 1層	1層	方形、鉄胎、白銅 (打ち銅)	21.6	-	12.6	12	4
16	海部	蓋	古代	CT 1層	1層	方形、白銅 (打ち銅)	16.1	-	12.6	3	12
17	海部	蓋	古代	208 表層	1層	方形、鉄胎、白銅	13.4	-	12.6	10	4
18	海部	鉢	古代	CT 1層	1層	方形、白銅 (打ち銅)	14	7.2	6.9	2	12
19	海部	鉢	古代	CT 1層	1層	方形、白銅 (打ち銅)	12.05	6.6	6.0	7	12
20	海部	鉢	古代	CT 1層	1層	方形、白銅 (打ち銅)	12.7	6.15	6.1	6	12
21	海部	鉢	古代	CT 1層	1層	方形、白銅 (打ち銅)	16.4	10.6	6.4	5	9
22	海部	鉢	古代	CT 1層	1層	方形、白銅 (打ち銅)	15.9	-	17.0	2.5	-
23	海部	鉢	古代	藤上遺	%、204のF、12のF1下1層	方形、白銅 (打ち銅)	21.4	8.2	13.8	3	12
24	海部	鉢	古代	CT 1層	1層	方形、鉄胎、白銅 (打ち銅)	21.6	10.6	13.9	3	12
25	海部	鉢	古代	CT 1層	1層	銅胎、鉄胎	19.9	7.6	10.2	6	12
26	海部	銅胎鉄胎	古代	CT 1層	1層	方形、白銅	13.1	5.9	3.05	3	3
27	海部	鉄胎鉄胎	古代	277 惣堂	1層	銅胎鉄胎、F、志、藤上遺 (惣堂)	11.9	7.8	2.4	6	12
28	海部	鉄胎鉄胎	古代	277 惣堂	1層	銅胎鉄胎、F、志、藤上遺 (惣堂)	11.35	7.35	2.5	7	12
29	海部	鉄胎鉄胎	古代	277-47 表上	1層	銅胎鉄胎	2.8	-	18.5	12	-
30	海部	鉄胎鉄胎	古代	CT 1層	1層	銅胎鉄胎、藤上遺	11.6	4.6	6.05	3	3
31	海部	鉄胎鉄胎	古代	惣堂遺	1層	銅胎鉄胎、「志」	12.3	5.8	3.0	12	12
32	海部	鉄胎鉄胎	古代、中前期	277 惣堂	1層	銅胎鉄胎、「志」	6.6	3.9	3.0	6	11
33	海部	鉄胎鉄胎	古代、中前期	CT 1層	1層	銅胎鉄胎、「志」	6.3	4.05	3.9	3	12
34	海部	鉄胎鉄胎	古代、中前期	CT 1層	1層	銅胎鉄胎、「志」	7.4	3.8	4.05	3	12
35	海部	鉄胎鉄胎	古代、中前期	276 表上	1層	銅胎鉄胎、「志」	6.2	3.95	3.1	2	11
36	海部	鉄胎鉄胎	古代、中前期	277 表上	1層	銅胎鉄胎	7.4	3.9	4.45	6	12
37	海部	鉄胎鉄胎	古代、中前期	CT 1層	1層	銅胎鉄胎、藤上遺	6.7	4.5	3.15	5	12
38	海部	鉄胎鉄胎	古代、中前期	CT 1層	1層	銅胎鉄胎、「志」	6.7	4.5	3.15	5	12
39	海部	鉄胎鉄胎	古代、中前期	CT 1層	1層	銅胎鉄胎、「志」	6.7	4.5	3.15	5	12
40	海部	鉄胎鉄胎	古代、中前期	277 惣堂	1層	銅胎鉄胎	7.6	4.6	4.3	6	12
41	海部	鉄胎鉄胎	古代、中前期	CT 1層	1層	銅胎鉄胎、「志」	6.9	4.4	3.1	3	9
42	海部	鉄胎鉄胎	古代、中前期	CT 1層	1層	銅胎鉄胎、「志」	7.7	4.9	4.6	10	12
43	海部	鉄胎鉄胎	古代、中前期	CT 1層	1層	銅胎鉄胎、「志」	6.5	4.4	3.6	3	12
44	海部	鉄胎鉄胎	古代、中前期	CT 1層	1層	銅胎鉄胎、「志」	8.8	4.4	3.3	3	12
45	海部	鉄胎鉄胎	古代、中前期	CT 1層	1層	銅胎鉄胎、「志」	6.2	4.0	3.1	3	12
46	海部	鉄胎鉄胎	古代	CT 1層	1層	銅胎鉄胎、「志」	10.9	4.0	6.1	7	12
47	海部	鉢	古代	277 表上 (惣堂)	1層	銅胎鉄胎、藤上遺、藤上遺	11.45	4.45	12.4	-	11
48	海部	蓋	古代	277 表上	1層	銅胎鉄胎、藤上遺	11.35	3.35	13.0	-	12
49	海部	平皿	古代	CT 1層	1層	銅胎鉄胎	13.1	4.9	6.3	10	11
50	海部	平皿	古代	277-47 表上	1層	銅胎鉄胎、「志」	13.5	4.9	6.3	10	9
51	海部	平皿	古代	208 表層	1層	銅胎鉄胎、「志」	-	-	13.45	-	1
52	海部	平皿	古代	CT 1層	1層	銅胎鉄胎、「志」	16.75	4.9	5.95	5	12
53	佐波長	銅トナリ	古代	藤上遺	(藤上遺)	銅胎鉄胎	11.7	3.2	12.5	-	10
54	海部	平皿	古代	CT 1層	1層	銅胎鉄胎	14.7	4.2	5.0	6	12
55	海部	銅蓋	古代	277 表上	1層	銅胎鉄胎	10.0	-	5.3	10	12
56	海部	平皿	古代	277 表上	1層	銅胎鉄胎、「志」	11.5	4.3	3.8	6	10
57	海部	平皿	古代	277-47 表上	1層	銅胎鉄胎、「志」	12.8	4.8	4.8	5	8
58	海部	銅蓋	古代	277-47 表上	1層	銅胎鉄胎	10.1	-	3.2	7	12
59	海部	平皿	古代	277 表上	1層	銅胎鉄胎	10.6	3.45	5.2	9	12
60	海部	平皿	古代	277 表上	1層	銅胎鉄胎	11.5	3.75	5.6	9	12
61	海部	鉢	古代	CT 1層	1層	銅胎鉄胎	11.5	3.75	5.6	9	12
62	海部	平皿	古代	CT 1層	1層	銅胎鉄胎	11.5	3.75	5.6	9	12
63	佐波長	平皿・鉄胎	古代	CT 1層	1層	銅胎鉄胎	11.1	3.9	6.2	9	12
64	佐波長	平皿・鉄胎	古代	CT 1層	1層	銅胎鉄胎	14.5	3.7	6.3	2	12
65	佐波長	銅胎・鉄胎	古代	CT 1層	1層	銅胎鉄胎	6.4	4.4	4.6	12	12

掲載遺物一覧表 2

資料番号	種別	名称	グッド・出土地		遺構・階位	用途、その他	口径cm	底径cm	器高cm	残存率 / 12	
			時期・発見状況	出土地						口縁部	底縁部
66	銅器	土人形 (銅製打金形)	277	表土	銅製	-	-	15.31	-	-	-
67	銅器	銅器	277	物置	白銅	11.25	-	17.11	5	-	-
68	銅器	銅器	277	物置	白銅	11.7	10.6	6.5	1	12	-
69	銅器	銅器	277	物置	白銅	7.5	6.8	6.45	9	12	-
70	銅器	鏡・土器	277	物置	白銅	11.9	6.9	10.01	9+11	12	-
71	銅器	銅器	277	物置	白銅	11.9	7.4	10.9	4	12	-
72	銅器	銅器 (編み織)	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
73	銅器	銅器 (編み織)	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
74	銅器	銅器 (編み織)	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
75	銅器	銅器 (編み織)	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
76	銅器	銅器	277	物置 (1層以上)	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
77	銅器	銅器	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
78	銅器	銅器	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
79	銅器	銅器	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
80	銅器	銅器	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
81	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
82	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
83	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
84	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
85	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
86	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
87	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
88	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
89	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
90	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
91	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
92	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
93	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
94	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
95	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
96	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
97	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
98	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
99	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
100	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
101	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
102	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
103	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
104	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
105	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
106	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
107	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
108	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
109	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
110	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
111	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
112	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
113	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
114	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
115	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
116	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
117	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
118	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
119	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
120	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
121	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
122	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
123	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
124	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
125	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
126	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
127	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
128	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
129	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
130	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
131	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
132	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製
133	銅器	土人形	277	物置	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製	銅製

掲載遺物一覧表 3

品目 番号	種類	器種	グッド 認定 時期・発見地	遺構・所在地	数量、その他	口径cm	底径cm	高さcm	残存率 P/2		
									口径部	底部	
134	磁器	染付八景	古代	87中層-6 ト、近東 中、近東 東、近東	物置(ガク)、中層北、上層、立 込	15.8	6.3	3.2	10	11	
135	磁器	藍	古代	87	立込、物置下層	6.3	3.05	2.9	3	12	
136	磁器	小鉢	古代	87(東遺)	中層(上層下層)	7.4	3.45	6.2	4	12	
137	磁器	磁器	古代	87(近遺)	立込	5.6	4.3	6.9	1	12	
138	磁器	水罐	古代	87	物置上層	高4.9	幅1.75	1.8	12	12	
139	陶器	鉢	古代	777	物置	26.65	6.8	6.4	5	12	
140	陶器	緑水鉢(型)	古代	87	表上(表上)	15.6	15.8	5.7	12	12	
141	陶器	壺	古代	87	下層	器類	(28.0)	-	16.45	1	-
142	陶器	器類不明(内筒部?)	古代	87西中	表上	-	15.8	(11.1)	3	-	
143	土器	不明製品	古代	87	表上	幅1.85	幅1.85	101.85	12	12	
144	陶器	瓦器	古代	87西中 下	表上	無釉、赤褐色	15.7	15.6	7.65	3	3
145	陶器	瓦器	古代	87西中	表上	無釉、赤褐色	25.4	18.2	7.2	1	1
146	陶器	瓦器	古代	87西中	最終層下	23.4	-	(3.7)	-	1	
147	陶器	瓦器	古代	87東-5カト	赤褐色	23.4	-	(4.4)	-	1	
148	陶器	瓦片瓦面	大塚1	777	表上	無釉、輪高台	15.45	4.4	6.8	2	12
149	陶器	瓦片瓦面	大塚3	777	褐色	無釉、輪高台	14.6	4.3	6.3	6	4
150	陶器	瓦片瓦面	大塚3	777	表上	-	-	(5.2)	-	-	
151	陶器	瓦片瓦面	大塚3	777	表上	無釉、輪高台	15.5	4.2	6.8	12	12
152	陶器	瓦片瓦面	大塚3	777	シャレット面北寄り、コム	-	-	(4.1)	12	-	
153	陶器	瓦片瓦面	大塚3	777	赤褐色	無釉、輪高台	16.9	4.3	(5.8)	12	12
154	陶器	瓦片瓦面	大塚3	777	灰褐色	無釉、輪高台、刷印	-	4.4	(5.4)	-	11
155	陶器	瓦片瓦面	大塚3	777	褐色	無釉	11.2	-	(5.2)	3	-
156	陶器	瓦片瓦面	大塚3	777	褐色	無釉	11.2	-	(5.2)	3	-
157	陶器	瓦片瓦面	大塚3	777	立込	無釉	12.4	-	(4.8)	3	-
158	陶器	瓦片瓦面	大塚3	777	表上	無釉	14.8	-	(5.2)	3	2
159	陶器	瓦片瓦面	大塚3	777	赤褐色	無釉	16.5	-	(4.8)	3	-
160	陶器	瓦片瓦面	大塚3	777	赤褐色	無釉	11.2	-	(4.8)	3	-
161	陶器	瓦片瓦面	大塚3	777	物置	無釉、輪高台	16.8	5.8	5.4	1	12
162	陶器	瓦片瓦面	大塚3	777	赤(下層)	無釉	11.2	-	(5.1)	1	-
163	陶器	瓦片瓦面	大塚3	777	赤褐色	無釉、輪高台	-	4.3	(4.1)	-	12
164	陶器	瓦片瓦面	大塚3	777	表上	無釉、輪高台	-	5.7	(2.4)	-	12
165	陶器	瓦片瓦面	大塚3	777	赤褐色	無釉、輪高台	-	4.9	(5.1)	-	12
166	陶器	瓦片瓦面	大塚3	777	表上	無釉、輪高台	-	4.9	(6.4)	-	12
167	陶器	瓦片瓦面	大塚3	777	表上(下層/東層)	無釉、輪高台	-	5.45	(4.2)	-	12
168	陶器	瓦片瓦面	大塚3	777	灰褐色	無釉	-	4.85	(1.8)	-	12
169	陶器	瓦片瓦面	大塚3	777	表上	無釉	11.6	-	(6.3)	2	-
170	陶器	瓦片瓦面	大塚3	777	表上-褐色	無釉	15.3	-	(5.4)	3	-
171	陶器	瓦片瓦面	大塚3	777	シャレット面北寄り、コム	無釉、内底面付	-	4.3	(4.8)	-	12
172	陶器	瓦片瓦面	大塚3	777	灰褐色	無釉	11.8	-	(5.3)	2	-
173	陶器	小瓦片瓦面	大塚3	777	褐色	無釉	9.6	-	(4.3)	2	-
174	陶器	中層	大塚	777	表上	灰褐色	15.9	-	(3.5)	3	-
175	陶器	瓦器	大塚1中層	777	灰褐色、表上	灰釉、朝朱文	12.9	5.1	6.3	2	12
176	陶器	瓦器	大塚1	777	表上	灰釉、朝朱文	11.9	-	(3.9)	3	-
177	陶器	瓦器	大塚1	777	立込	無釉、朝朱文	12.3	-	(5.2)	2	-
178	陶器	瓦器	大塚1	777	灰褐色	無釉、朝朱文	(11.1)	-	(5.7)	1	-
179	陶器	瓦器	大塚1	777	表上	無釉、朝朱文	-	5.5	(4.1)	-	12
180	陶器	瓦器	大塚1	777	表上(下層/東層)	灰褐色	-	5.2	(6.1)	-	12
181	陶器	瓦器	大塚1	777	表上	灰褐色	-	4.5	(4.8)	-	12
182	陶器	瓦器	大塚3	777	灰褐色	灰褐色	-	4.9	(2.8)	-	12
183	陶器	瓦器	大塚3	777	灰褐色	灰褐色	-	5.7	(2.1)	-	5
184	陶器	瓦器	大塚3	777	灰褐色	灰褐色	-	5.2	(2.7)	-	12
185	陶器	瓦器	大塚3	777	灰褐色	灰褐色	-	4.9	(1.8)	-	12
186	陶器	瓦器	大塚3	777	褐色	蓋形、蓋印	-	4.2	(4.4)	-	5
187	陶器	磁器中層	大塚3	777	表上	灰褐色	15.65	7.6	5.4	2	16
188	陶器	磁器中層	大塚3	777	灰褐色	灰褐色	16.8	9.9	5.7	4	6
189	陶器	磁器中層	大塚3	777	表上(下層/東層)	灰褐色	14.8	8.6	5.3	1	4
190	陶器	磁器中層	大塚3	777	表上	灰褐色	15.4	8.5	(5.1)	2	6
191	陶器	磁器中層	大塚3	777	表上(下層)	灰褐色	16.7	8.4	5.2	2	2
192	陶器	磁器中層	大塚3	777	灰褐色	灰褐色、内面付	16.8	8.6	2.7	1	4
193	陶器	磁器中層	大塚3	777	表上(下層/東層)	灰褐色	15.2	-	(3.4)	2	-
194	陶器	中層	大塚1カ2	777	赤褐色	灰褐色	-	9.4	2.3	-	3
195	陶器	中層	大塚1	777	褐色	灰褐色	-	8.2	(2.2)	-	3
196	陶器	中層	大塚1カ2	777	灰褐色	灰褐色	-	8.9	-	-	12
197	陶器	中層	大塚1カ2	777	赤褐色	灰褐色	-	7.8	(1.4)	-	3

掲載遺物一覧表 4

登録番号	種別	名称	グッド・再生地点	遺種・部位	数量、その他	口徑cm	底径cm	器高cm	保存率 / 12		
									口縁部	底面	
190	陶器	陶器(中)	大塚1	277	赤褐色	灰緑緑釉	14.9	6.45	2.5	4	13
199	陶器	陶器(中)	大塚1	277	赤褐色	灰緑緑釉	15.0	6.0	3.5	7	12
200	陶器	陶器(中)	大塚1	276	褐色	灰緑、黒印迹	11.4	6.0	2.7	2	2
201	陶器	陶器(中)・輪リキ	大塚1	277	灰褐色	灰緑、黒印迹	11.2	5.8	2.5	3	11
202	陶器	陶器(中)	大塚1	277	シャモット面 黒漆 赤土	灰緑	11.3	6.2	2.4	9	12
203	陶器	陶器(中)	大塚1	277	赤土下層(黒層)	灰緑	11.4	6.2	2.5	4	6
204	陶器	陶器(中)	大塚1	277	赤土	灰緑	10.8	5.6	2.7	2	10
205	陶器	陶器(中)	大塚1	277	灰褐色	灰緑	11.05	5.6	2.4	12	12
206	陶器	陶器(中)・輪リキ	大塚1	277	赤土下層(黒層)	灰緑	11.3	5.9	2.8	9	9
207	陶器	陶器(中)・輪リキ	大塚1	277	焼出、立台	灰緑	11.4	6.2	2.6	3	10
208	陶器	陶器(中)	大塚1	277	赤褐色	灰緑	11.4	6.1	2.3	2	4
209	陶器	陶器(中)	大塚1	277	灰褐色	灰緑	11.15	5.75	2.25	1	7
210	陶器	陶器(中)	大塚1	277	赤土下層(黒層)	灰緑	10.8	6.2	2.5	5	6
211	陶器	陶器(中)	-	277	赤土下層(黒層)	中堅、灰緑	8.9	5.3	2.0	4	7
212	陶器	陶器(中)・付着物	大塚1	277	赤土	灰緑	10.9	5.9	2.8	6	10
213	陶器	陶器(中)	大塚1	277	赤土	灰緑	10.9	5.8	2.5	2	4
214	陶器	陶器(中)	大塚1	277	赤土	灰緑、印迹	9.2	4.8	2.0	4	5
215	陶器	皿	大塚1か2	277	赤土下層(黒層)	-	5.7	(18.1)	-	3	-
216	陶器	皿	大塚1か2	277	褐色	灰緑、黒印迹	-	5.05	(18.1)	-	9
217	陶器	陶器(小)	大塚1	277	赤土	灰緑	8.6	4.7	2.2	9	12
218	陶器	陶器(小)	大塚1	276	赤土	灰緑、印迹	6.7	4.3	2.2	6	12
219	陶器	陶器(小)	大塚1	277	赤土	灰緑、印迹	6.2	4.8	2.2	3	12
220	陶器	陶器(小)	大塚1	277	灰褐色	灰緑	7.3	4.8	1	12	-
221	陶器	陶器(小)	大塚1	277	灰褐色	無釉	8.1	5.2	2.0	12	12
222	陶器	陶器(小)	大塚1	277	灰褐色	灰緑、印迹	3.6	4.7	2.4	10	12
223	陶器	陶器(小)	大塚1	277	赤褐色	灰緑	7.8	4.8	2.05	5	12
224	磁器	磁器(小)	大塚1 / (大塚1) 後1期	277	赤土	磁釉	10.6	-	(18.4)	2	-
225	陶器	皿	大塚1か2	277	赤褐色	灰緑	-	4.0	(18.95)	-	5
226	陶器	陶器(中)	大塚1か2	277	赤土	磁釉、赤黄漆	10.2	4.6	2.0	2	5
227	陶器	陶器(中)	大塚1か2	277	赤土	磁釉、赤黄漆	10.2	4.6	2.0	3	4
228	陶器	磁器(中)	大塚1か2	277	赤土	灰緑、黒印迹	11.2	5.25	(18.9)	5	11
229	陶器	磁器(中)	大塚1	277	赤土	灰緑	11.8	-	(18.9)	2	-
230	陶器	磁器(中)・輪リキ	大塚1	277	灰褐色	灰緑、黒印迹	10.95	4.2	2.45	4	12
231	陶器	大塚	大塚2	277	褐色	赤釉、赤黄漆	11.2	5.6	2.5	1	6
232	陶器	大塚	大塚2	277	褐色	赤釉、赤黄漆	11.0	5.4	2.5	2	4
233	陶器	大塚	大塚2	277	褐色	赤釉、赤黄漆	11.0	5.8	2.9	0	5
234	陶器	大塚	大塚2(大塚2 / 大塚2) 後1期	277	褐色	赤釉、赤黄漆	11.6	5.0	2.7	4	6
235	陶器	内丸蓋	大塚3	277	赤土	無釉	11.2	5.9	(21.1)	3	3
236	陶器	磁器(中)	大塚1	277(赤層)	赤土	10.8	4.6	2.15	2	12	
237	陶器	磁器(中)	大塚1	277	灰褐色	-	10.9	5.1	2.85	8	6
238	陶器	磁器(中)	大塚3	277	赤土	10.7	6.3	4.85	2	3	
239	陶器	小鉢・輪リキ	大塚2か3	277	赤土	赤釉	-	2.9	(21.1)	-	12
240	陶器	土器(小)	大塚1	277	赤土	赤釉	10.61	-	(41.2)	1.5	-
241	陶器	土器	-	277	灰褐色	外・内面に鉄釉	5.8	4.5	5.8	3	12
242	陶器	土器	-	277	赤褐色	外・内面に鉄釉、正口	7.8	5.5	5.5	5	0
243	陶器	土器	-	276	赤土	外・内面に鉄釉	5.9	-	(21.4)	12	-
244	陶器	土器	-	277	赤土	正口(鉄釉)	-	2.0	(19.9)	-	4
245	陶器	土器	-	277	赤土	赤釉	-	-	(41.3)	-	-
246	陶器	磁器	大塚1	277(赤層)	赤土	赤釉	11.15	4.75	12.25	2	4
247	陶器	磁器	大塚1	277	褐色	磁釉	11.2	-	(41.3)	2	-
248	陶器	磁器	大塚1 / (後1期) ~ 大塚1	277	赤土	磁釉	10.1	-	(19.0)	2	-
249	陶器	磁器	大塚1 / (後1期) ~ 大塚1	277	赤土	磁釉	11.6	-	(41.7)	1	-
250	陶器	磁器	大塚1	277	赤土	磁釉	10.2	6.2	12.4	3	12
251	陶器	磁器	大塚1	277	赤土下層(黒層)	磁釉	11.4	5.8	6.4	1.5	5
252	陶器	磁器	大塚1	277	赤土	磁釉	10.3	6.4	11.4	2	12
253	陶器	磁器	大塚1	277	灰褐色	磁釉	11.0	6.45	10.2	1	12
254	陶器	磁器	大塚1	277	赤土	磁釉	10.6	10.6	12.6	2	3
255	陶器	磁器	大塚1	277	赤褐色	磁釉	10.6	10.1	14.8	2	6
256	陶器	磁器	大塚1	277	赤土	磁釉	10.2	7	(21.9)	2	-
257	陶器	磁器	大塚1(輪)	277	赤土下層	磁釉	10.5	10.2	12.45	1	6
258	陶器	磁器	大塚2	277	赤土	磁釉	10.75	10.1	12.5	2	12
259	陶器	磁器	大塚2	277	赤土	磁釉	10.6	10.1	10.45	1	12
260	陶器	磁器	大塚2	277	赤土	赤釉	(23.4)	-	5.7	1	-
261	陶器	磁器	大塚2(大塚2) 後1期	277	赤土	磁釉	10.4	-	4.95	1	-
262	陶器	磁器	大塚2(前半)	277	赤土	磁釉	(20.9)	-	(19.4)	1	-
263	陶器	磁器	大塚2(後半)	277	赤土	磁釉	(25.8)	-	(19.2)	2	10
264	陶器	磁器(中)	-	277	赤土	赤釉、内面磁釉	11.2	-	-	3	-
265	陶器	磁器(中)	-	277	赤土	赤釉、内面磁釉	11.4	-	(19.9)	1	-

掲載遺物一覧表 5

発物 番号	種別	器種	時期・発見年代	グッド 出土地点	遺構・用途	材質、その他	口径cm	透径cm	高さcm	残存率 / 1/2	口径部	底面
266	陶器	埴手器	-	227	赤土	鉄丸、内面透孔	13.6	-	16.71	2	-	-
267	陶器	埴手器	-	227	褐色	外面に内面に緑褐色に鉄丸、土線装飾に灰赤色	11.8	-	15.41	-	3	-
268	陶器	埴手器	-	227	赤土	鉄丸(自然焼成)	-	-	17.71	1.5	-	-
269	陶器	埴手器	-	227	赤土(まぎり)	外面に鉄丸	15.9	15.1	9.2	2	2	-
270	陶器	埴手器	-	-	赤土	外面に鉄丸・鉄丸、透孔付 ぎり	-	13.0	12.41	-	3	-
271	陶器	埴子	赤土焼成IV期	227	赤褐色、赤土	鉄丸、鉄質	6.9	-	117.401	2	-	-
272	陶器	埴手器片	赤土焼成IV期	227	赤土	鉄丸	-	-	15.11	-	-	-
273	陶器	埴土	赤土焼成IV	27	赤土	鉄丸、口縁部	11.6	-	-	1	-	-
274	陶器	埴土	大塚まがら	227	灰褐色	鉄丸	6.8	-	-	7	-	-
275	陶器	埴土	大塚	227	赤土	鉄丸	-	4.8	13.11	-	12	-
276	陶器	埴手器片	大塚Ⅱ	土庫正倉	西側	鉄丸、埴子付書	5.9	4.4	6.1	1	12	-
277	陶器	山系陶	伊奈型2型式	225	赤土	鉄丸	11.4	4.4	2.3	4	4	-
278	陶器	山系陶	伊奈型2型式	227	赤土	鉄丸	-	5.5	2.8	-	3	-
279	陶器	山系陶	伊奈型2型式	227	赤土	鉄丸	-	5.4	12.11	-	4	-
280	陶器	埴輪付埴手器	大塚Ⅰ	227	赤土(土庫遺物)	鉄丸	11.0	4.1	2.6	3	12	-
281	陶器	埴輪付埴手器	大塚Ⅰ	227	赤土	鉄丸	11.6	5.0	2.45	6	12	-
282	陶器	埴輪付埴手器	大塚Ⅰ	227	赤土(土庫遺物)	鉄丸	12.3	5.0	2.4	2	5	-
283	陶器	埴輪付埴手器	大塚Ⅰ	227	赤土(土庫遺物)	鉄丸	12.3	5.0	2.7	2	12	-
284	陶器	埴輪付埴手器	大塚Ⅰ	227	赤土	鉄丸	12.5	5.05	2.2	4	12	-
285	陶器	埴輪付埴手器	大塚Ⅰ	227	灰褐色	鉄丸	11.8	5.0	2.3	11	12	-
286	陶器	埴輪付埴手器	大塚Ⅰ	227	赤土(土)	鉄丸	10.8	4.4	1.9	1	12	-
287	陶器	埴輪付埴手器	大塚Ⅰ	227	赤土	鉄丸	10.8	4.4	2.2	5	6	-
288	陶器	埴輪付埴手器	大塚Ⅰ	227	赤土(土庫遺物)	鉄丸	11.55	5.4	2.2	2	12	-
289	陶器	埴輪付埴手器	大塚Ⅰ	227	赤土(土庫遺物)	鉄丸	-	-	-	-	-	-
290	陶器	埴輪付埴手器	大塚Ⅰ	227	196	鉄丸	6.6	5.7	2.5	3	6	-
291	陶器	埴手器	227	物置発掘	鉄丸	11.7	5.2	2.2	12	12	-	-
292	陶器	埴輪付埴手器	大塚Ⅰ	227	赤土	鉄丸	11.0	5.2	2.4	3	12	-
293	陶器	埴輪付埴手器	大塚Ⅰ	227	赤土	鉄丸	11.1	5.25	1.9	11	12	-
294	陶器	埴手器	227	灰褐色	鉄丸	11.7	4.45	2.5	3	12	-	-
295	陶器	埴土(埴輪付埴手器)	大塚Ⅰ	227	赤土	鉄丸	12.0	5.2	-	3	6	-
296	陶器	埴土(埴輪付埴手器)	大塚Ⅰ	227	赤土(黒褐色マダ)	埴みね内面に鉄印(ホリ目)	-	-	2.85	-	-	-
297	陶器	埴手器	227	赤土	鉄印	12.0	5.3	2.3	1.7	12	-	-
298	陶器	埴手器	227(伊)	191	内面に鉄印(ホリ目)	11.5	5.3	2.45	9	12	-	-
299	陶器	埴手器	227	赤土(土庫遺物)	内面に鉄印(ホリ目)	11.4	5.15	2.8	11	12	-	-
300	陶器	埴輪付埴手器	大塚Ⅰ	227	赤褐色	鉄丸、打ち丸	-	4.25	13.41	-	12	-
301	陶器	埴輪	227	赤土	内面に輪印	19.0	18.0	19.2	2	5	-	-
302	陶器	埴輪	227	赤褐色	内面に輪印	-	15.45	13.41	-	6	-	-
303	陶器	埴輪	227	赤土	裏面に穿孔	13.0	5.25	3.95	3	12	-	-
304	陶器	埴輪・輪印付埴手器	大塚Ⅰ	227	赤褐色	鉄丸	-	-	-	-	-	-
305	陶器	埴輪	227	赤土	裏面に円形孔	16.9	15.0	5.4	2	2	-	-
306	陶器	埴土	227	赤土	-	-	14.0	12.41	-	-	-	-
307	陶器	埴輪・鉄丸	227	灰褐色	-	11.3	7.4	3.9	12	12	-	-
308	陶器	埴土	227	赤土	-	11.1	5.2	2.33	4	12	-	-
309	陶器	埴輪・輪印付埴手器	大塚Ⅰ	227	赤褐色	鉄丸、打ち丸	15.2	12.0	7.9	11	12	-
310	陶器	埴輪・輪印付埴手器	大塚Ⅰ	227	赤褐色	-	15.6	11.2	6.5	6	6	-
311	陶器	埴輪・輪印付埴手器	大塚Ⅰ	227	赤褐色	-	15.1	12.0	6.7	4	7	-
312	陶器	埴輪・輪印付埴手器	大塚Ⅰ	227	赤土	-	16.9	13.8	10.5	5	6	-
313	陶器	埴輪・輪印付埴手器	大塚Ⅰ	227	赤土(土庫)	内面に鉄印付	16.25	12.4	6.3	7	12	-
314	陶器	埴輪	227	赤土→灰褐色	輪印付	15.4	12.0	10.5	4	9	-	-
315	陶器	埴輪	227	褐色	-	-	11.2	14.71	-	-	-	-
316	陶器	埴輪	196	赤褐色	外面に鉄印	-	11.1	17.11	-	6	-	-
317	陶器	埴輪	227	赤土(まぎり)	内面に鉄印(ヘラ)	11.2	6.4	4.2	4	3	-	-
318	陶器	埴輪	227	赤土	内面に鉄印	-	14.0	13.11	-	6	-	-
319	陶器	埴輪	227	赤土(土庫)	内面に鉄丸	11.25	6.2	4.85	4	12	-	-
320	陶器	埴輪	227	褐色	外面に鉄丸	-	7.0	6.9	-	5	-	-
321	陶器	埴輪	227	赤土	外面に鉄丸	-	17.6	14.41	-	4	-	-
322	陶器	埴輪	227	赤褐色	内面に鉄印(アソビ)	-	15.6	13.41	-	3	-	-
323	陶器	埴輪	227	赤褐色	内面に鉄印	16.85	14.15	6.2	3	3	-	-
324	陶器	埴輪	227	赤土	内面に鉄印	-	14.4	16.41	-	5	-	-
325	陶器	埴輪	227	赤土	内面に鉄印	-	16.6	15.41	-	2	2	-
326	陶器	埴輪	227	土庫正倉	内面に鉄印	-	16.0	12.71	-	7	-	-
327	陶器	埴輪	227	灰褐色	内面に鉄印	12.6	17.8	6.45	3	6	-	-
328	陶器	埴輪	227	赤土(土庫)	内面に鉄印	-	14.05	11.8	-	6	-	-
329	陶器	埴輪	227	赤土→灰褐色	内面に鉄印	12.45	13.07	11.15	2	12	-	-
330	陶器	埴輪	227	赤土(土庫)	内面に鉄印(アソビ)	-	15.9	13.61	-	6	-	-
331	陶器	埴輪	227	赤土	内面に鉄印	16.2	14.4	10.05	3	7	-	-
332	陶器	埴輪	227	赤土	内面に鉄印(ヘラ)	16.4	13.4	6.4	2	6	-	-

掲載遺物一覧表 6

資料 番号	種別	器種	数量・材質など	グランド-	遺構・層位	輪蓋、その他	口径cm	底径cm	高さcm	保存率 / 1/2	
				遺址地帯						口径部	底部
332	漆器具	杯鉢	277	若上層 (黒灰)	内面に塗印		18.2	11.4	9.4	1	2
334	漆器具	杯鉢	277	若上→次粉色	内面に塗印		-	14.7	12.1	-	12
335	漆器具	杯鉢	996F	若上 (ザナ下)	内面に塗印 (ヘラ)		26.6	14.4	9.7	2	6
336	漆器具	杯鉢	277	若上 (ザナ)	内面に塗印 (ヘラ)		19.9	14.8	8.6	2	4
337	漆器具	杯鉢	277	若上	漆面に転写		-	12.1	2.05	-	12
338	漆器具	杯鉢	277	若上上層 (黒灰)	漆面に転写		13.9	12.2	12.81	4	6
339	漆器具	杯鉢蓋	277	若粉色	漆研打ち、文字		13.6	7.8	5.3	11	12
340	漆器具	ヒノクス+ヒノクス	277	物置	厚く磨削の小石		100.9	192.0	94.15	11	11
341	漆器具	長脚ビン	276	若上→次粉色			46.5	46.2	91.4	11	11
342	漆器具	長脚ビン	276	若上→次粉色			44.4	46.2	91.55	12	12
343	漆器具	長脚ビン	276	若上→次粉色			44.45	46.2	91.9	12	12
344	漆器具	長脚ビン	276	若上→次粉色			44.4	46.2	91.7	12	12
345	漆器具	トナ	276	若上→次粉色			45.3	46.2	91.5	12	12
346	漆器具	トナ	276	若上→次粉色			46.3	46.7	91.45	12	12
347	漆器具	トナ	277	若上			46.9	46.7	91.9	12	12
348	漆器具	輪トナ	276	96.15基下 (若上)			46.5	46.4	91.5	12	12
349	漆器具	輪トナ	277	若上、褐色	二重に塗布		46.8	46.9	91.4	12	12
350	漆器具	輪トナ	277	若上			46.1	46.45	91.45	12	12
351	漆器具	輪トナ	276	若上→次粉色			46.9	46.4	91.9	12	12
352	漆器具	輪トナ	276	若上→次粉色			46.5	46.25	91.45	12	12
353	漆器具	埴の	276	若上			46.1	46.9	91.9	12	12
354	漆器具	埴の	276	若上→次粉色	転写か		46.0	46.16	91.3	12	12
355	漆器具	寸心倉庫	47	中層			-	111.2	102.9	-	10
								174.9	167.1	-	10
356	漆器具	寸心倉庫	277	中層			44.4	46.9	113.25	10	10
357	漆器具	寸心倉庫	47	中層			44.4	46.4	113.2	9	9
358	漆器具	寸心倉庫	277	若上			46.9	46.9	91.7	11	11
359	漆器具	寸心倉庫	277	中層			44.4	46.1	113.2	10	10
360	漆器具	一寸	277	2/2			46.1	46.1	91.7	10	10
361	陶器	天目茶碗	大塚1	276	灰褐色 物置	磨削	12.1	-	16.1	2	6
362	陶器	天目茶碗	大塚1	276	灰褐色 物置	磨削	12.0	-	16.0	2	6
363	陶器	天目茶碗 (灰褐色)	大塚1	277	若上	磨削	11.9	-	15.9	1	-
364	陶器	天目茶碗	大塚1 (大塚1 復)	276	褐色	磨削、輪蓋付	-	4.9	13.0	-	12
365	陶器	天目茶碗	大塚1	276	褐色	底付磨削	-	5	-	-	12
366	陶器	天目茶碗	大塚1	275	褐色	磨削 (転写)	10.6	-	-	2	-
367	陶器	天目茶碗	大塚1	276	物置	磨削 (転写)	11.9	-	14.2	3	-
368	陶器	天目茶碗	大塚1	275	褐色	磨削	11.6	4.1	6.3	9	12
369	陶器	天目茶碗	大塚1	277	褐色	磨削	11.5	4.15	6.9	1	12
370	陶器	天目茶碗	大塚1	277	褐色	磨削	11.2	3.3	6.05	6	6
371	陶器	天目茶碗	大塚1	276	物置	磨削	11.6	-	15.9	1	-
372	陶器	天目茶碗	大塚1	277	褐色	磨削	12.2	5.2	5.35	3	1
373	陶器	天目茶碗	大塚1	276	若上	磨削	10.9	3.95	5.95	3	12
374	陶器	天目茶碗	大塚1	276	物置	磨削	11.4	-	15.3	1	-
375	陶器	天目茶碗	大塚1	276	2/2	磨削	11.9	-	15.4	1	-
376	陶器	天目茶碗	大塚1	277	褐色 (ヘラ+赤)	磨削	11.1	3.8	5.35	6.5	12
377	陶器	天目茶碗	大塚1	276	2/2	磨削	11.2	-	15.0	2	-
378	陶器	天目茶碗	大塚1	276	2/2	磨削	11.2	-	-	1	-
379	陶器	天目茶碗	大塚1	275	褐色	磨削	10.6	2.9	5.6	1	12
380	陶器	天目茶碗	大塚1小塚	275	褐色	磨削	10.7	-	15.4	1	-
381	陶器	天目茶碗	大塚1	277	褐色	磨削	11.9	-	15.1	6	-
382	陶器	天目茶碗	大塚1	276	物置	磨削	-	2.3	15.5	-	12
383	陶器	天目茶碗	大塚1	276	物置	磨削	-	2.2	15.6	-	12
384	陶器	天目茶碗	大塚1	276	2/2	磨削	-	4.2	-	-	-
385	陶器	天目茶碗 (緑褐色)	-	277	褐色	-	-	-	12.45	-	-
386	陶器	天目茶碗 (緑褐色)	大塚1	276	若上	磨削	11.8	2.8	5.6	1	12
387	陶器	天目茶碗 (緑褐色)	大塚1	277	褐色	磨削	11.2	2.8	6.2	1	12
388	陶器	天目茶碗	大塚1	276	褐色	磨削	13.0	3.2	6.7	1	12
389	陶器	天目茶碗	大塚1	275	褐色	磨削 (転写)	11.2	2.9	5.6	1	12
390	陶器	天目茶碗	大塚1	276	2/2	磨削 (転写)	11.2	3.4	5.5	9	12
391	陶器	天目茶碗	大塚1	276	褐色	底付磨削	11.8	-	14.7	1	-
392	陶器	天目茶碗	大塚1	275	褐色	底付磨削	11.5	-	16.0	1.5	-
393	陶器	天目茶碗	大塚1	276	褐色	底付磨削	12.6	-	14.8	2	-
394	陶器	天目茶碗	大塚1	277	褐色	底付磨削、転写	-	3.9	11.6	-	12
395	陶器	天目茶碗	大塚1	277	褐色	底付磨削、転写	-	3.8	11.1	-	12
396	陶器	天目茶碗	大塚1	277	褐色	底付磨削、転写	-	4.2	11.9	-	12
397	陶器	天目茶碗	大塚1	276	褐色	底付磨削、転写	-	4.3	11.6	-	12
398	陶器	天碗	大塚1	277	褐色	灰研、転写、文	11.4	3.2	6.9	1	12
399	陶器	天碗	大塚1	276	若上	灰研、転写、文	12.0	-	14.4	1	-
400	陶器	天碗	大塚1	275	褐色	灰研	12.2	3.2	6.9	6.25	12
401	陶器	天碗	大塚1	277	若上	灰研	-	3.3	13.5	-	6

掲載遺物一覧表 7

資料番号	種類	器種	グランド・遺土地点		遺構・遺位	施装、その他	口径cm	底径cm	器高cm	残存率、P/2	
			時期・発見位置							口径cm	底径
402	陶器	土瓶	大塚2	35	褐色	器底戸粒小	12.6	4.9	7.0	2	3
403	陶器	土瓶	-	377	褐色	鈎跡	-	4.1	(12.7)	-	12
404	陶器	土瓶	-	376	褐色	-	-	-	(12.5)	-	-
405	陶器	平瓶	大塚3	377	赤褐色	鈎跡、磨跡	15.0	-	(13.7)	1	-
406	陶器	平瓶	-	376	褐色	-	17.1	-	(12.45)	2	-
407	陶器	信縁平瓶	大塚3	375	褐色	鈎跡、磨跡	15.9	-	(13.3)	1	-
408	陶器	信縁土瓶	-	376	褐色	鈎跡、磨跡	(11.8)	-	(13.7)	1	-
409	陶器	信	大塚1か2	376	物置反履	-	16.0	-	(13.4)	1	-
410	陶器	線草皿	大塚1	377	赤土	鈎跡、刷付	16.7	5.7	2.45	1	12
411	陶器	線草皿	大塚1 / (大塚2)	376	褐色	鈎跡	11.0	5.4	3.3	1	5
412	陶器	線草皿	大塚1	376	褐色	鈎跡、刷付	11.0	6.3	2.6	6	12
413	陶器	線草皿	大塚1南中 / (大塚2)	377	褐色	鈎跡	16.45	6.5	3.4	12	12
414	陶器	線草皿	大塚1	376	褐色	鈎跡、刷付	9.2	4.9	2.5	4	12
415	陶器	線草皿	大塚1	376	褐色	鈎跡、刷付	9.2	4.7	2.5	6	12
416	陶器	線草皿	大塚1 / 池原	376	褐色	鈎跡、刷付	9.2	5.2	2.5	12	12
417	陶器	線草皿	大塚1 / 池原	376	褐色	鈎跡、刷付	9.2	5.5	2.5	12	12
418	陶器	線草皿	大塚1	375	褐色	鈎跡、刷付	6.6	4.9	2.2	11	12
419	陶器	線草皿	大塚2	376	赤土	鈎跡、刷付	9.2	5.05	2.4	12	12
420	陶器	線草皿	大塚1	376	物置	鈎跡、刷付	6.2	4.45	2.3	7	12
421	陶器	線草皿	大塚2 / (大塚1、池原)と大塚2南中 / (イ)	376	褐色	鈎跡、刷付	8.6	5.4	2.4	10	12
422	陶器	皿	大塚1か2	376	褐色	鈎跡、刷付	-	6.6	(13.4)	-	2
423	陶器	皿	大塚1か2	375	褐色	鈎跡、刷付	-	4.2	(13.3)	-	6
424	陶器	皿	大塚1か2	375	褐色	-	-	4.0	(10.4)	-	2
425	陶器	土瓶 (ノボ)	大塚2	376	褐色	鈎跡、刷付	10.9	6.5	2.8	9	12
426	陶器	土瓶 (ノボ)	大塚2	377	赤褐色 (バーニ)	鈎跡、刷付	11.0	6.25	3.2	5	12
427	陶器	土瓶 (ノボ)	大塚2	377	赤土	鈎跡	-	5.45	(12.3)	-	10
428	陶器	土瓶 (ノボ)	大塚2	376	褐色	鈎跡	10.6	6.2	3.7	3	3
429	陶器	土瓶 (ノボ)	大塚2	377	赤褐色	鈎跡	10.5	6.0	2.8	6	4
430	陶器	土瓶 (ノボ)	大塚2	376	褐色	鈎跡	10.2	6.0	2.8	2	1
431	陶器	土瓶 (ノボ)	大塚2	377	赤土	鈎跡	10.6	-	(12.1)	2	-
432	陶器	土瓶 (ノボ)	大塚2	376	褐色	鈎跡、刷付	11.0	6.35	2.45	2	12
433	陶器	皿	大塚1か2	377	赤褐色、赤土	鈎跡、刷付	12.9	-	(13.4)	2	-
434	陶器	豆皿	大塚1	375	褐色	鈎跡、磨跡、印	6.0	3.2	3.3	3	9
435	陶器	信縁打明皿	大塚1	377	赤褐色	鈎跡	9.25	5.35	2.35	11	12
436	陶器	信縁打明皿	大塚2	375	褐色	-	9.45	4.7	2.3	9	12
437	陶器	信縁打明皿	大塚2	377	褐色	-	10.1	4.9	2.35	4	4
438	陶器	信縁打明皿	大塚2	377	褐色	-	9.8	5.0	2.3	3	3
439	陶器	信縁打明皿	大塚2	376	褐色	磨跡	-	-	-	-	12
440	陶器	信縁打明皿	大塚2	375	褐色	-	9.4	4.35	2.5	12	12
441	陶器	線草皿	大塚1	377	赤褐色	鈎跡、磨跡	(14.5)	6.6	2.5	1	-
442	陶器	土瓶	大塚1 / (大塚2)	375	褐色	鈎跡、刷付	16.5	4.2	2.45	3	11
443	陶器	土瓶	大塚2 / (大塚2)	376	褐色	鈎跡	10.3	6.7	2.6	4	12
444	陶器	土瓶	大塚2	376	褐色	磨跡	10.1	5.6	2.4	6	10
445	陶器	土瓶	大塚2	375	褐色	磨跡	9.7	5.2	2.4	3	6
446	陶器	土瓶	大塚2	376	褐色	鈎跡	9.4	5.15	2.35	2	5
447	陶器	土瓶	大塚2	375	褐色	鈎跡	10.1	6.0	2.5	12	12
448	陶器	土瓶	大塚2	376	褐色	鈎跡、磨跡	11.0	5.6	2.2	4	4
449	陶器	土瓶 (細頸)	大塚2	377	褐色	-	6.4	4.4	1.9	2	1
450	陶器	土瓶	大塚2	376	褐色	鈎跡、磨跡	10.9	6.3	2.35	5	4
451	陶器	土瓶	大塚2	376	褐色	鈎跡、刷付	10.6	6.0	2.7	5	12
452	陶器	土瓶	大塚2か3 / (大塚2南中)	377	褐色	鈎跡、二重跡	10.5	6.0	2.4	4	6
453	陶器	土瓶	大塚3	376	褐色	鈎跡、磨跡	9.9	6.0	2.5	2	1
454	陶器	土瓶	大塚3	377	褐色	鈎跡、二重跡	11.3	5.95	2.35	4	6
455	陶器	土瓶	大塚3南中	377	褐色	内底、鈎跡、二重跡	10.6	5.9	2.3	2	6
456	陶器	線草皿	大塚2か3	375	褐色	鈎跡、二重跡	11.0	5.7	2.4	4	5
457	陶器	土瓶	大塚3 / (内底磨平)	377	赤土	鈎跡、内底、磨跡	10.3	5.9	2.35	1	5
458	陶器	土瓶	大塚3南中	377	赤土	鈎跡、内底、底内面に磨跡	11.0	5.75	2.6	3	9
459	陶器	線草皿	大塚2	376	褐色	鈎跡、刷付	10.2	6.1	2.35	2	11
460	陶器	線草皿	大塚2	377	赤土	鈎跡 (刷付)、磨跡	10.2	5.6	2.8	3	5
461	陶器	線草皿	大塚2	375	褐色	鈎跡	10.7	5.45	2.45	4	6
462	陶器	線草皿	大塚2	375	褐色	鈎跡、磨跡	10.7	5.75	2.2	12	12
463	陶器	線草皿	大塚2か3	376	褐色	鈎跡、磨跡	10.9	5.9	2.2	9	12
464	陶器	線草皿	大塚2 / (大塚2南中)	376	褐色	鈎跡、磨跡	10.4	7.0	2.1	4	3
465	陶器	線草皿	大塚2か3	-	赤土	鈎跡、平底	9.8	6.6	1.9	4	4
466	陶器	線草皿	3 / (大塚2)	377	褐色	鈎跡、磨跡	6.3	5.7	1.75	1	5
467	陶器	線草皿	大塚2か3	375	褐色	鈎跡、磨跡	10.0	4.95	2.3	6	12
468	陶器	線草皿	大塚2か3 / 池原	375	褐色	鈎跡、磨跡	9.9	5.4	2.7	10	12

掲載遺物一覧表 8

登録番号	種別	遺物	グッド・ポイント		遺構・部位	施業、その他	口径cm	底径cm	高さcm	残存率	
			納箱・整理など	出土状況						口縁部	底部
409	陶器	磁土	大塚2-1-3	216	褐色	鉄粒、赤褐色	19.3	5.70	2.6	2	10
470	陶器	磁土	-	276	褐色	鉄粒、赤褐色	16.0	5.6	2.6	6	10
471	陶器	磁土	大塚2	276	褐色	鉄粒、赤褐色	19.70	6.1	2.50	7	12
472	陶器	磁土	大塚2	276	褐色	鉄粒、赤褐色	19.9	4.95	2.8	7	12
473	陶器	内土質	大塚3	277	赤褐色 (灰)	鉄粒	19.2	4.8	5.0	13	12
474	陶器	内土質	-/大塚3か	277	赤褐色	鉄粒、黒紫銅片	19.7	5.6	2.2	2	3
475	陶器	砂緑土	大塚2	276	褐色	灰粒	13.6	-	(2.25)	2	-
476	陶器	磁土	大塚2	276	灰青	鉄粒、赤褐色	9.8	6.0	2.3	4	12
477	陶器	砂緑土 (緑釉)	大塚3	277	褐色	-	5.2	-	(2.7)	-	7
478	陶器	土質 (緑釉)	-	277	褐色	-	6.7	-	(3.7)	1	-
479	土器	土質緑釉	276	褐色	-	イロの遺物	-	5.6	(2.2)	-	6
480	陶器	焼酎大甕	大塚3	276	赤土	-	25.4	-	-	1	-
481	陶器	焼酎大甕	大塚3	277	赤褐色	-	-	12.3	(2.5)	-	2
482	陶器	磁瓶	内野小1	277	赤褐色	鉄粒	21.2	-	(3.2)	2	-
483	陶器	磁瓶	大塚1	276	褐色	鉄粒	26.2	6.9	11.1	6	12
484	陶器	磁瓶	大塚1	276	褐色	鉄粒	26.2	6.5	11.65	7	12
485	陶器	磁瓶	大塚1	273	褐色	灰口磁器、銅	20.9	-	-	2	-
486	陶器	磁瓶	大塚1	277	赤土	鉄粒	27.4	-	(6.1)	2	-
487	陶器	磁瓶	大塚1	277	褐色	鉄粒	29.3	-	(5.4)	2	-
488	陶器	磁瓶	大塚2	276	褐色	鉄粒	26.0	-	(3.2)	1	-
489	陶器	磁瓶	大塚2 (大塚1)	277	赤褐色	鉄粒	29.3	-	-	-	-
490	陶器	磁瓶	大塚2 (大塚2甕)	277	赤土	鉄粒	26.7	-	(2.9)	1	-
491	陶器	磁瓶	大塚2	277	赤褐色	鉄粒	26.0	-	(2.5)	1	-
492	陶器	磁瓶	大塚2	276	褐色	鉄粒、黒紫銅片、赤	26.45	26.9	12.3	6	12
493	陶器	磁瓶	大塚2 (口縁緑釉、内土質)	276	褐色	鉄粒、鉄粒	36.3	-	(19.5)	2	-
494	陶器	磁瓶	大塚3	276	赤土	鉄粒	30.8	11.2	15.65	1.2	7
495	陶器	磁瓶	大塚3	277	赤土	鉄粒	36.0	-	-	1	-
496	陶器	磁瓶	大塚3 (大塚3甕)	277	赤褐色	鉄粒	25.4	-	(4.95)	2	-
497	陶器	磁瓶	大塚3 (大塚3)	277	赤褐色	鉄粒	22.8	-	-	-	-
498	陶器	磁瓶	大塚3	277	赤土	鉄粒	31.0	-	-	1	-
499	陶器	磁瓶	大塚3	276	褐色	鉄粒	26.0	-	(6.4)	2	-
500	陶器	磁瓶	大塚2 (大塚2甕)	277	褐色	鉄粒	36.8	-	(3.7)	1	-
501	陶器	磁瓶	大塚2 (大塚2甕)	277	褐色	鉄粒	33.7	-	(2.65)	1	-
502	陶器	磁瓶	大塚2 (大塚2甕)	276	褐色	鉄粒	29.2	-	(6.85)	1	-
503	陶器	磁瓶	大塚3	277	赤褐色	鉄粒	25.1	-	(4.4)	2	-
504	陶器	磁瓶	大塚1	277	褐色	鉄粒	17.8	-	7	2	-
505	陶器	灰口土甕	大塚2	276	褐色	鉄粒	23.8	5.9	2.2	2	12
506	陶器	砂赤土甕	-	276	褐色	鉄粒	22.6	-	(2.4)	6	-
507	陶器	赤土甕	大塚2-1-3	277	褐色	鉄粒	-	-	(4.20)	-	-
508	陶器	赤土甕	-	277	褐色	鉄粒	-	-	(6.7)	-	-
509	陶器	土質赤土甕	大塚	277	赤土	灰粒、赤褐色の少量鉄	-	5.6	(2.2)	-	2
510	陶器	磁利	-	277左型	褐色	赤土質鉄粒、鉄粒、磁土(口縁赤土質)	-	9.9	(4.9)	-	3
511	陶器	磁利	-	277左型	褐色	赤土質鉄粒、鉄粒、磁土(口縁赤土質)、磁土(口縁赤土質)	-	13.9	(2.4)	-	4
512	陶器	磁利	-	276	褐色	赤土質鉄粒、鉄粒	-	13.95	(3.75)	-	12
513	陶器	口辺有赤土	大塚1	277	褐色、灰褐色	鉄粒	13.2	-	(2.5)	1	-
514	陶器	口辺有赤土	大塚1	276	褐色	鉄粒	13.2	-	(6.7)	1.5	-
515	陶器	口辺有赤土	-	276	褐色	鉄粒	16.0	-	(4.4)	-	2
516	陶器	口辺有赤土	-	276	褐色	鉄粒	15.2	-	(6.1)	2	-
517	陶器	赤土甕	-	276	褐色	鉄粒	11.8	-	-	2	-
518	陶器	製茶甕	-	277左型	褐色	赤土質鉄粒、灰粒、内面に鉄粒	12.0	-	(16.1)	2	-
519	陶器	製茶甕	-	277左型	褐色	赤土質鉄粒、灰粒、内面に鉄粒、内面に鉄粒	16.8	-	(3.7)	2	-
520	陶器	製茶甕	-	277	褐色	赤土質鉄粒、灰粒、内面に鉄粒、内面に鉄粒	16.1	-	(3.5)	2	-
521	陶器	製茶甕	-	276	褐色	赤土質鉄粒、鉄粒、内面に鉄粒、内面に鉄粒、底面に赤土質	-	13.2	(2.5)	-	12
522	陶器	製茶甕	-	276	褐色	赤土質鉄粒、鉄粒、内面に鉄粒、内面に鉄粒、底面に赤土質	-	13.2	(6.55)	-	2
523	陶器	製茶甕	-	276、277	灰白、褐色	赤土質鉄粒、鉄粒、内面に鉄粒、内面に鉄粒、底面に赤土質	17.8	13.2	17.2	1	2
524	陶器	製茶甕	-	276	褐色	赤土質鉄粒、鉄粒、内面に鉄粒、内面に鉄粒、底面に赤土質	16.2	11.4	16.65	2	12
525	陶器	製茶甕	-	276	褐色	赤土質鉄粒、鉄粒、内面に鉄粒、内面に鉄粒、底面に赤土質	16.6	11.62	16.15	6	12
526	陶器	製茶甕	-	276	褐色	赤土質鉄粒、鉄粒、内面に鉄粒、内面に鉄粒、底面に赤土質	-	12.2	(2.3)	-	12
527	陶器	製茶甕	-	276	褐色	赤土質鉄粒、鉄粒、内面に鉄粒、内面に鉄粒、底面に赤土質	15.1	12.9	17.7	4	12

掲載遺物一覧表 9

資料番号	種別	時期	グッド/劣化程度	遺構/用途	施業、その他	口幅cm	底径cm	体高cm	残存率 / 12	
									口縁部	底面
520	灰土管	-	5/6	陶器	内面黒土・内面口縁付石に鉄粒、内面に鉄粒	16.3	-	16.152	2	-
529	灰土管	-	5/6	陶器	内面口縁部に鉄粒、胎土に炭素、胎土に炭素、胎土に炭素、胎土に炭素	-	11.7	16.41	-	4
530	灰土管	-	7/6	陶器	内面口縁付石に鉄粒、内面に鉄粒	15.5	-	16.923	3	-
531	灰土管	-	5/6	陶器	内面口縁付石に鉄粒、内面に鉄粒	14.8	-	17.803	1.5	-
532	灰土管	-	7/6	陶器	内面黒土・内面口縁付石に鉄粒、胎土に炭素	15.2	13.4	9.9	4	3
533	灰土管	-	5/6	陶器	内面黒土・内面口縁付石に鉄粒、胎土に炭素	13.9	-	14.73	1.5	-
534	灰土管	-	7/5	陶器	内面黒土・内面口縁付石に鉄粒、胎土に炭素	13.5	13.0	6.1	3	11
535	灰土管	-	7/5	陶器	内面黒土・内面口縁付石に鉄粒、胎土に炭素	13.3	16.7	6.2	12	13
536	灰土管	-	8/5	陶器	内面黒土・内面口縁付石に鉄粒、胎土に炭素	13.2	14.1	6.0	4	4
537	灰土管	-	7/5	陶器	内面黒土・内面口縁付石に鉄粒、胎土に炭素	12.4	9.8	6.0	5	12
538	灰土管(木割)	-	5/5	陶器	内面黒土・内面口縁付石に鉄粒、胎土に炭素	11.75	9.25	6.45	12	12
539	灰土管	-	7/6	陶器	内面黒土・内面口縁付石に鉄粒、胎土に炭素	11.3	9.7	6.7	12	12
540	灰土管	-	7/5	陶器	内面黒土・内面口縁付石に鉄粒、胎土に炭素	11.9	16.3	6.2	12	12
541	灰土管	-	8/7	土器	内面黒土・内面口縁付石に鉄粒、胎土に炭素	11.9	16.0	6.3	3	9
542	灰土管	-	7/5	陶器	内面黒土・内面口縁付石に鉄粒、胎土に炭素	12.0	16.0	6.1	9	11
543	灰土管	-	7/7	土器	内面黒土・内面口縁付石に鉄粒、胎土に炭素	11.6	-	14.22	2	-
544	灰土管	-	7/7	陶器	内面黒土・内面口縁付石に鉄粒、胎土に炭素	11.6	16.0	6.15	5	12
545	灰土管	-	7/6	陶器	内面黒土・内面口縁付石に鉄粒、胎土に炭素	11.4	6.0	6.0	3	3
546	灰土管	-	8/7	土器	内面黒土・内面口縁付石に鉄粒、胎土に炭素	10.8	-	16.91	2	-
547	灰土管	-	5/6	陶器	内面黒土・内面口縁付石に鉄粒、胎土に炭素	10.8	6.9	7.4	5	4
548	灰土管	-	7/7	陶器	胎土	14.7	-	14.1	5	-
549	灰土管	-	土器	土器	胎土	13.2	10.9	6.15	2	-
550	灰土管	-	5/6	陶器	胎土	16.0	-	16.31	1.5	-
551	灰土管	-	5/6	陶器	胎土	14.8	-	17.352	2	-
552	灰土管	-	7/6	陶器	胎土	13.0	-	17.40	3	-
553	灰土管	-	7/7	陶器	胎土	16.9	-	16.21	4	-
554	灰土管	-	7/6	陶器	胎土	-	-	16.51	-	-
555	灰土管	-	7/7	陶器	胎土	-	-	14.21	-	-
556	灰土管	-	7/6	陶器	胎土	10.0	6.2	6.7	3	1
557	灰土管	-	7/6	陶器	胎土	9.8	6.0	16.41	1	-
557	灰土管	-	7/6	陶器	胎土	-	-	-	-	-
558	灰土管	-	7/7	陶器	胎土	-	5.0	13.43	-	12
559	灰土管	-	7/5	陶器	胎土	5.0	6.4	6.75	12	8
560	灰土管	-	7/7	陶器	胎土	4.3	-	13.80	1	-
561	灰土管	-	7/6	陶器	胎土	5.0	-	12.40	2	-
562	灰土管	-	7/6	陶器	胎土	-	-	13.40	-	-
563	灰土管	-	7/6	陶器	胎土	-	3.8	13.32	-	2
564	灰土管	-	7/7	陶器	胎土	-	6.0	12.41	-	1
565	灰土管	-	7/6	陶器	胎土	-	1.8	12.1	-	12
566	灰土管	-	7/6	陶器	胎土	10.3	-	12.40	-	-
567	灰土管	-	7/6	陶器	胎土	10.7	-	12.40	-	-
568	灰土管	-	7/6, 7/7, 7/6	陶器	胎土	16.6	16.0	14.6	6	5
569	灰土管	-	7/6, 7/6, 7/7	陶器	胎土	12.6	12.2	13.45	1	3
570	灰土管	-	7/7	陶器	胎土	14.1	-	12.853	1	-
571	灰土管	-	7/6, 7/7	陶器	胎土	119.1	-	12.21	1	-
572	灰土管	-	7/7	陶器	胎土	12.8	-	12.753	1	-
573	灰土管	-	7/7	陶器	胎土	11.8	5.25	2.6	3	5
574	灰土管	-	7/7	陶器	胎土	13.0	-	6.0	5	-
575	灰土管	-	7/6	陶器	胎土	-	-	-	-	-
576	灰土管	-	7/6	陶器	胎土	12.8	5.6	12.31	4	12
577	灰土管	-	7/6	陶器	胎土	-	-	-	-	-
578	灰土管	-	7/6	陶器	胎土	11.3	5.7	2.7	11	12
579	灰土管	-	7/6	陶器	胎土	-	-	-	-	-
580	灰土管	-	7/5	陶器	胎土	11.55	5.15	2.45	12	13
581	灰土管	-	7/5	陶器	胎土	11.7	5.1	2.1	12	13

掲載遺物一覧表 10

資料番号	種別	名称	グッド		遺体・部位	材質、その他	口徑cm		底径cm		保存率 / 12	
			経緯・位置	出土地			口徑	底径	口縁部	底面		
502	弥生瓦	灰土瓦	大塚2-3-3	556	焼物		9.05	6.45	5.3	1.2	12	12
503	弥生瓦	瓦葺・瓦割物		517	土器		葺14.7	葺1.9	13.4	葺6.6	葺11.1	葺11
504	弥生瓦	瓦葺トナリ		515	焼物		-	45.0	15.21	-	-	9
505	弥生瓦	瓦葺		516	焼物	蓋部	葺6.7	-	-	5.2	1.5	9
506	弥生瓦	瓦葺		516	瓦葺	大塚	葺16.7	葺6.9	葺5.7	葺5	葺12	12
507	弥生瓦	瓦葺		516	焼物	葺部(土器)口縁部付着	葺15.25	葺6.9	葺5.2	葺4	葺12	12
508	弥生瓦	瓦葺		516	焼物	内面に刷印	葺15.8	葺6.9	葺5.9	葺5	葺12	12
509	弥生瓦	瓦葺		516	焼物	内面に刷印	葺15.5	葺6.5	葺5.85	葺5	葺12	12
510	弥生瓦	瓦葺		515	焼物	内面に刷印	葺15.0	葺6.25	葺5.85	葺4	葺12	12
511	弥生瓦	瓦葺		516	焼物	内面に刷印	葺15.3	葺6.9	葺5.9	葺5	葺12	12
512	弥生瓦	瓦葺		516	焼物	内面に刷印	-	-	-	-	葺3	葺16
513	弥生瓦	瓦葺		516	焼物	内面に刷印	-	2.4	12.21	-	12	12
514	弥生瓦	瓦葺		516	焼物	内面に刷印	-	6.5	15.43	-	12	12
515	弥生瓦	瓦葺		517	焼物	内面に刷印	-	5.7	11.77	-	4	12
516	弥生瓦	瓦葺		516	焼物	内面に刷印	葺15.3	葺6.7	葺6.1	葺6	葺12	12
517	弥生瓦	瓦葺		516	焼物	葺部	葺15.5	葺6.4	葺5.9	葺12	葺12	12
518	弥生瓦	瓦葺		516	焼物	葺に刷印	葺11.3	葺6.9	葺6.0	葺9	葺12	12
519	弥生瓦	瓦葺		515	焼物	葺部下方に施成線穿孔	葺11.6	葺6.2	葺5.3	葺9	葺12	12
520	弥生瓦	瓦葺		516	土器	内面に刷印	葺11.65	葺5.9	葺5.2	葺7	葺12	12
521	弥生瓦	瓦葺		516	焼物	葺部施成線穿孔、内面に刷印	葺11.15	葺6.7	葺5.15	葺12	葺12	12
522	弥生瓦	瓦葺		515	焼物(土上)		葺11.6	葺6.5	葺6.1	葺4	葺12	12
523	弥生瓦	瓦葺		515	焼物(土上)		葺11.8	葺6.5	葺5.85	葺12	葺12	12
524	弥生瓦	瓦葺		515	焼物	葺部土中に施成線付着	葺11.0	葺6.5	葺6.05	葺9.3	葺12	12
525	弥生瓦	瓦葺		515	焼物	内面に刷印	葺11.7	葺6.7	葺5.75	葺12	葺12	12
526	弥生瓦	瓦葺		516	土器	内面に刷印	葺11.8	葺6.9	葺6.6	葺1	葺6	12
527	弥生瓦	瓦葺		517	伊賀焼(瓦割物)		葺15.0	葺5.6	葺6.45	葺12	葺12	12
528	弥生瓦	瓦葺		519	瀬川古瓦 瓦割物		葺15.4	葺6.1	葺6.9	葺12	葺12	12
529	弥生瓦	瓦葺		517	土器	内面に刷印	葺12.4	葺5.2	葺6.65	葺4	葺4	12
530	弥生瓦	瓦葺		516	焼物	葺部口縁下に穿孔、内面に刷印	葺16.6	葺6.1	葺6.8	葺4	葺5	12
531	弥生瓦	瓦葺		517	焼物		葺16.9	-	葺9.15	葺2	-	12
532	弥生瓦	瓦葺		515	焼物	葺部下方に穿孔	葺15.3	葺5.9	葺6.15	葺1	葺2	12
533	弥生瓦	瓦葺		517	土上		葺16.8	葺6.4	葺6.9	葺3	葺7	12
534	弥生瓦	瓦葺		517	焼物	内面に刷印	葺16.9	葺6.4	葺6.4	葺2.5	葺3	12
535	弥生瓦	瓦葺		516	土器	葺部下方に穿孔、内面に刷印	葺16.8	葺6.6	葺6.75	葺4	葺4	12
536	弥生瓦	瓦葺		515	焼物	内面に刷印	-	16.0	15.25	-	葺6	12
537	弥生瓦	瓦葺		515	焼物	葺部下方に穿孔、内面に刷印	葺17.0	葺5.2	葺6.9	葺2	葺12	12
538	弥生瓦	瓦葺		517	土上	内面に刷印	-	15.0	11.41	-	葺4	12
539	弥生瓦	瓦葺		516	焼物	内面に刷印	-	16.4	11.81	-	葺4	12
540	弥生瓦	瓦葺		517	土器	内面に刷印	-	16.4	11.41	-	葺4	12
541	弥生瓦	瓦葺		516	土器	内面に刷印	葺16.0	葺5.0	葺6.2	葺4	葸4	12
542	弥生瓦	瓦葺		517	土上		葺16.6	葺6.8	葺6.5	葺12	葺12	12
543	弥生瓦	瓦葺		517	土上		葺16.3	葺6.5	葺6.2	葺12	葺12	12
544	弥生瓦	瓦葺		516	土器	葺部、口縁下に穿孔	葺15.35	葺6.5	葺6.2	葺12	葺12	12
545	弥生瓦	瓦葺		516	土器	葺部、口縁下に穿孔	葺15.35	葺6.5	葺6.2	葺12	葺12	12
546	弥生瓦	瓦葺		516	焼物	二重に葺	葺15.95	葺6.2	葺5.55	葺12	葺12	12
547	弥生瓦	瓦葺		516	焼物		葺15.65	葺6.2	葺5.55	葺12	葺12	12
548	弥生瓦	瓦葺		516	焼物		葺15.8	葺6.2	葺5.95	葺12	葺12	12
549	弥生瓦	瓦葺		516	焼物		葺15.9	葺6.2	葺5.95	葺12	葺12	12
550	弥生瓦	瓦葺		516	焼物		葺15.7	葺6.4	葺5.25	葺12	葺12	12
551	弥生瓦	瓦葺		516	焼物		葺16.2	葺6.6	葺5.9	葺6	葺12	12
552	弥生瓦	瓦葺		516	焼物		葺16.4	葺6.8	葺6.15	葺6	葺12	12
553	弥生瓦	瓦葺		516	焼物		葺16.3	葺6.8	葺6.15	葺6	葺12	12
554	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
555	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
556	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
557	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
558	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
559	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
560	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
561	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
562	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
563	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
564	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
565	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
566	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
567	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
568	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
569	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
570	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
571	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
572	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
573	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
574	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
575	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
576	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
577	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
578	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
579	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
580	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
581	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
582	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
583	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
584	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
585	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
586	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
587	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
588	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
589	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
590	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
591	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
592	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
593	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
594	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
595	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
596	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
597	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
598	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
599	弥生瓦	瓦葺		517	土器		葺16.2	葺6.2	葺5.7	葺6	葺12	12
600	弥生瓦											



北山・勘介窯跡航空写真（北山窯跡・勘介窯跡周辺風景 昭和32年撮影）



北山窯跡・勤介窯跡より北東方向 上品野地区をのぞむ (平成 29 年)



北山窯跡・勤介窯跡全景 (平成 29 年)



北山窯跡・勘介窯跡 調査前風景 (平成27年)



北山窯跡 調査前風景 (平成29年)



遺跡付近遠景 土岐市方面を望む (北方向)



遺跡付近遠景 (北西方向)



遺跡付近遠景 瀬戸市街方面を望む (南方向)



遺跡付近遠景 (西方向)



調査前風景 (西から 平成 27 年)



遺跡付近全景 (北から 平成 29 年)



調査前現況 (南東から 平成 27 年)



北山窯跡調査準備状況 (北西から 平成 29 年)



北山窯跡完掘状況（南東から）



窯体完掘状況（南から）



窯体完掘状況 (南から)



窯体コド完掘状況 (東から)



窯体西半完掘状況 (南から)



窯体東半完掘状況 (南から)



窯体完掘状況 (北から)



窯体東半完掘状況 (北東から)



窯体煙道煙突検出状況 (西から)



窯体東半完掘状況 (南から)



煙突・西煙道完掘状況（北から）



煙突完掘状況（南から）



煙突裏込め石材検出状況（西から）



煙突完掘状況（北から）



西煙道東壁完掘状況（西から）



煙突完掘状況（西から）



西煙道西壁完掘状況（東から）



煙突完掘状況（東から）



東煙道完掘状況（西から）



横軸（窯体東脇）断割り土層断面（南から）



東煙道土管検出状況（東から）



B7・C7 北壁土層断面（南から）



東煙道暗渠天井部検出状況（北から）



A7・Z7 南壁土層断面（北から）



窯体中軸断割り土層断面（西から）



山ノ神現況（南から）



調査区東半完掘状況 (東から 平成 27 年)



通路状遺構完掘状況 (東から)



調査範囲全景 (東から 平成 29 年)



平坦面完掘状況 (南西から)



調査区東半完掘状況 (東から)



平坦面上石列検出状況 (北西から)



南側断面 整地層・物原層 (南から)



南側断面東部 土層断面 (南から)



立会調査範囲断面 (北から)



窯体残存部断面 1 (北から)



立会調査範囲断面 (北西から)



窯体残存部断面 2 (北から)



立会調査作業風景 (東から)



窯体残存部断面 3 (北から)



立会調査 窯体床面の一部 (東から)



窯体残存部断面 4 (北から)



1 試掘坑西壁土層断面 (南東から)



2 試掘坑完掘状況 (南から)



1 試掘坑南半西壁土層断面 (東から)



2 試掘坑完掘状況 (北から)



1 試掘坑南半東壁土層断面 (西から)



2 試掘坑北壁土層断面 (南から)



勘介窯跡西半調査後全景



1 試掘坑完掘状況 (北から)



2 試掘坑東壁土層断面 (西から)



勘介1号窯検出状況（南東から）



勘介2号二次窯完掘状況（北西から）



勘介1号窯検出状況（北から）



勘介2号二次窯完掘状況（東から）



勘介2号二次窯完掘状況（北から）



勘介2号二次窯天井支柱痕検出状況（北西から）



勘介2号一次窯完掘状況（北から）



勘介2号一次窯焼台出土状況（東から）



勘介2号窯横軸東半断割り土層断面 (北から)



A7・Z27区南壁土層断面 (北から)



勘介2号窯横軸西半断割り土層断面 (北から)



ZT7区西壁土層断面 (東から)



勘介2号一次窯完掘状況 (北西から)



ZU6区北壁土層断面 (南から)



勘介2号一次窯天井支柱痕検出状況 (北西から)



ZV6区北壁土層断面 (南から)



北山窯の焼成品（陶器・磁器／北山窯跡）



北山窯の窯道具類



勸介第1・2号窯の焼成品



勸介第1・2号窯の窯道具類







42



52



54



62



46



56



55



57



49



60



63



50



58-59





138



139



132



141



133



140



135



115



114



69f+



700+



S-1





201



200



210



224



|



214



227



202



|



228



|



218



230



205



|



231



|



219



233



207



236



237



241



242



247



263



250



253



255



257



256



278



281



285



287



290



292



293



368



387



369



308



370



388



277



271



373



389



386



405



416



390



415



420



399



410



417



425



412



432



413



419



434



1



435



436



440



447



451



450



452



454



455



456



458



462



463



467



468



470



1



471



472



505



568



483



559



569



484



507



574



492



540



542



493



544



535



503





307



589



328



579



606



314



304



356



359



各種窯印のある匣鉢類（勘介第1・2号窯跡）

報告書抄録

ふりがな	ほくざんかまあと かんすけかまあと							
書名	北山窯跡 勘介窯跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第214集							
編著者名	武部真木(編)・松澤和人(瀬戸市文化振興財団)・藤根 久,米田恭子(パレオ・ラボ)							
編集機関	公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24 TEL 0567(67)4161							
発行年月日	西暦 2020年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ほくざんかまあと 北山窯跡 かんすけかまあと 勘介窯跡	あいらげん せとし 愛知県瀬戸市 おちあいちょう 落合町	23204	030970 030408	35度 15分 7秒	137度 07分 35秒	2015.08.~09 2015.10. ~2016.03 2017.05	290	急傾斜地 崩壊対策 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
北山窯跡	窯跡	近代・現代	窯体(連房式登窯1基) 物原	磁器(碗,湯呑,皿類) ・陶器(植木鉢,鉢類) ・窯道具 大窯製品(天目茶碗, 皿類,搦鉢,筒形容器ほか) ・窯道具		近代連房式登窯の 貴重な調査事例 (北山窯跡) 落合城跡(中世城館) 推定地に近い窯跡 (勘介窯跡)		
勘介窯跡	窯跡	戦国	窯体(大窯2基) 物原					
文書番号	発掘届出 (27瀬文振第1050-8号,2015.7.1/29理セ第5号,2017.4.7) 通知(27教生第1231号,2015.7.1/29教生第250号,2012.4.18) 終了届・保管証・発見届 (27瀬文振第1050-17号・27瀬文振第1050-18号・27瀬文振第1050-19号,2018.3.11 /29理セ第22号,2017.5.31) 鑑定結果通知 (27教生第3287号・27瀬文第698号,2016.3.31/29教生第955号,2017.6.14)							
要約	勘介窯跡は、瀬戸市北部の水野川右岸丘陵地に位置し、標高175m前後の南斜面に立地する戦国期の窯跡である。調査により2基の大窯の窯体の一部と、これに伴う灰原を確認した。それぞれの操業期間には時期差がみられ、勘介1号窯は大窯第1段階後半から第2段階前半(16世紀初頭から前葉)、勘介2号窯は大窯第2段階後半から第3段階前半(16世紀中葉)を主体とする時期と考えられる。 北山窯跡は創業が明治に遡ると伝えられる近・現代の連房式登窯である。常滑窯産土管を利用した煙道部など、最終段階の構造の一端が明らかとなった。連続と続いてきた窯業地ではむしろ希少な資料であり、百年ほどの昔の事柄はすでに不明瞭となっている部分も少なくない。							

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第214集

北山窯跡 勘介窯跡

2020年3月31日

発行 公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 新日本法規出版株式会社